

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第59集

東脇遺跡群

2001年12月

豊橋市教育委員会

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第59集

東脇遺跡群

2001年12月

豊橋市教育委員会

例　　言

1. 本書は、豊橋渥美都市計画柳生川沿線土地区画整理事業にともない緊急に調査された東脇地区内3地点と下水道工事にともなう1地点の発掘調査報告を「東脇遺跡群」としてまとめたものである。その内訳は、1968（昭和43）年末から1969（昭和44）年の1月に調査された見丁塚遺跡A地点、1976（昭和51）年の見丁塚遺跡F地点、1979（昭和54）年の林遺跡A地点および1983（昭和58）年の行合前貝塚であり、現在の東脇一丁目と四丁目に所在した遺跡である。

2. 発掘調査の担当者および調査員は次のとおりである。

見丁塚遺跡A地点	調査担当者 芳賀 陽	調査員 伊藤 恵
見丁塚遺跡F地点	調査担当者 芳賀 陽	調査員 住吉政浩・小畠頼孝・森田勝三
林 遺 跡 A 地 点	調査担当者 住吉政浩	調査員 小畠頼孝
行 合 前 貝 塚	調査担当者 芳賀 陽	

3. 遺物はそれぞれの調査担当者が保管し大半は未整理のままであったが、1998（平成10）年に豊橋市教育委員会と調査担当者の間で遺物整理と報告書の執筆編集等について協議がもたれ、本書の刊行にいたったものである。

4. 報告書の作成にあたり、遺物の実測およびトレースは原則として執筆者が行い、一部は豊橋市教育委員会美術博物館が協力した。写真については調査担当者および調査員が撮影したものである。

5. 石材は豊橋市自然史博物館家田健吾氏、貝類は同館松岡敬二・井澤伸恵氏に同定を依頼した。

6. 本書の執筆分担は下記のとおりである。第6章は執筆者全員の協議によるものである。

第1章第1節・第2節、第5章第1節～第3節・第5節	芳賀 陽
第2章	伊藤 恵
第4章	住吉政浩
第1章第3節、第3章第1節・第2節・第3節1,3～9・第4節	森田勝三
第3章第3節2,10,11、第5章第4節1～5	小畠頼孝
第5章第4節6～9	石川明弘

7. 調査にあたって作成した写真・実測図などの記録および出土遺物は、豊橋市教育委員会において保管・管理している

本文目次

第1章 位置と環境	1
第1節 位 置	1
第2節 地理的環境	2
第3節 歴史的環境	3
第2章 見丁塚遺跡A地点	10
第1節 位置と地形	10
第2節 調査の経過	11
第3節 遺構および遺物の出土状態	12
第4節 遺 物	15
第5節 小 結	27
第3章 見丁塚遺跡F地点	30
第1節 位 置	30
第2節 調査の経過	31
第3節 遺構と遺物	38
第4節 小 結	61
第4章 林遺跡A地点	67
第1節 位 置	67
第2節 調査の経過	68
第3節 遺構および遺物の出土状態	71
第4節 遺 物	75
第5節 小 結	83
第5章 行合前貝塚	85
第1節 位 置	85
第2節 調査の経過	86
第3節 層序と遺構	91
第4節 遺 物	100
第5節 小 結	110
第6章 結 語	111

挿図目次

挿図第 1	東脇遺跡群の位置	1
挿図第 2	東脇遺跡群の分布	4
挿図第 3	東脇遺跡群の出土遺物（1）	8
挿図第 4	東脇遺跡群の出土遺物（2）	9
挿図第 5	見丁塚遺跡 A 地点の位置	10
挿図第 6	見丁塚遺跡 A 地点 堪穴状遺構－1・堪穴状遺構－2 の平面図・断面図	14
挿図第 7	見丁塚遺跡 A 地点 出土遺物実測図（1）	22
挿図第 8	見丁塚遺跡 A 地点 出土遺物実測図（2）	23
挿図第 9	見丁塚遺跡 A 地点 出土遺物実測図（3）	24
挿図第10	見丁塚遺跡 F 地点の位置	30
挿図第11	見丁塚遺跡 F 地点 トレンチおよびグリッド配置図	33
挿図第12	見丁塚遺跡 F 地点 A・D・E トレンチの断面図	34
挿図第13	見丁塚遺跡 F 地点 調査区の遺構配置図	37
挿図第14	見丁塚遺跡 F 地点 方形周溝墓の平面図・断面図	39
挿図第15	見丁塚遺跡 F 地点 方形周溝墓出土遺物実測図	40
挿図第16	見丁塚遺跡 F 地点 第1号堪穴住居址の平面図・断面図	41
挿図第17	見丁塚遺跡 F 地点 第1号堪穴住居址出土遺物実測図	41
挿図第18	見丁塚遺跡 F 地点 第2号堪穴住居址の平面図・断面図	44
挿図第19	見丁塚遺跡 F 地点 第2号堪穴住居址出土遺物実測図	45
挿図第20	見丁塚遺跡 F 地点 第3号堪穴住居址の平面図	48
挿図第21	見丁塚遺跡 F 地点 第3号堪穴住居址の断面図	49
挿図第22	見丁塚遺跡 F 地点 第3号堪穴住居址出土遺物実測図（1）	50
挿図第23	見丁塚遺跡 F 地点 第3号堪穴住居址出土遺物実測図（2）	51
挿図第24	見丁塚遺跡 F 地点 第4号堪穴住居址の平面図・断面図	54
挿図第25	見丁塚遺跡 F 地点 第4号堪穴住居址出土遺物実測図	55
挿図第26	見丁塚遺跡 F 地点 第1号土壤状遺構の平面図・断面図	58
挿図第27	見丁塚遺跡 F 地点 第2号土壤状遺構の平面図・断面図	58
挿図第28	見丁塚遺跡 F 地点 2号溝状遺構出土遺物実測図	58
挿図第29	見丁塚遺跡 F 地点 1号・2号・3号溝状遺構の平面図・断面図	59
挿図第30	林遺跡 A 地点の位置	67
挿図第31	林遺跡 A 地点 トレンチおよびグリッドの配置図	69
挿図第32	林遺跡 A 地点 A トレンチの平面図	70
挿図第33	林遺跡 A 地点 A グリッド平面図	74

挿図第34	林遺跡A地点 Bグリッド平面図・断面図	74
挿図第35	林遺跡A地点 出土遺物実測図（1）	78
挿図第36	林遺跡A地点 出土遺物実測図（2）	81
挿図第37	林遺跡A地点 出土遺物実測図（3）	82
挿図第38	行合前貝塚の調査地点	85
挿図第39	通行止めにしてトラ柵で囲った行合前貝塚調査区	87
挿図第40	行合前貝塚の台風による壁面崩落状況	87
挿図第41	行合前貝塚の崩落した壁面の復旧作業	87
挿図第42	行合前貝塚 調査区の平面図・断面図（1）	92
挿図第43	行合前貝塚 調査区の平面図・断面図（2）	93
挿図第44	行合前貝塚 調査区の平面図・断面図（3）	94
挿図第45	行合前貝塚 調査区の平面図・断面図（4）	95
挿図第46	行合前貝塚 遺構平面図・断面図（1）	98
挿図第47	行合前貝塚 遺構平面図・断面図（2）	99
挿図第48	行合前貝塚 出土遺物実測図（1）	107
挿図第49	行合前貝塚 出土遺物実測図（2）	108
挿図第50	行合前貝塚 出土遺物実測図（3）	109
挿図第51	柳生川沿線地区画整理事業の範囲	111
挿図第52	柳生川沿線地区画整理事業以前の小字名	112
挿図第53	県道豊橋港線の建設状況（昭和36年）	113
挿図第54	柳生川沿線・牟呂・坂津土地区画整理事業の範囲	114

表 目 次

第1表	東脇遺跡群地名表	5
第2表	見丁塚遺跡A地点 壇穴状遺構-1の柱穴	12
第3表	見丁塚遺跡A地点 出土遺物観察表	25
第4表	奈良朝須恵器編年の流れ	28
第5表	見丁塚遺跡F地点 第3号壇穴住居址の柱穴の位置と法量	47
第6表	見丁塚遺跡F地点 壇穴住居址の法量と年代	62
第7表	見丁塚遺跡F地点 出土遺物観察表	65
第8表	林遺跡A地点 柱穴の法量	72
第9表	林遺跡A地点 土壙の法量	72
第10表	林遺跡A地点 土壙-1の貝の種類と数	73

図版目次

- 図版第1 昭和50年頃の東脇遺跡群（1）
- 図版第2 昭和50年頃の東脇遺跡群（2）
- 図版第3 昭和50年頃の東脇遺跡群（3）
- 図版第4 昭和50年頃の東脇遺跡群（4）
- 図版第5 見丁塚遺跡A地点（1）
1. 見丁塚遺跡A地点の遠望
2. 見丁塚遺跡A地点発見時の状態
- 図版第6 見丁塚遺跡A地点（2）
1. 壴穴状遺構－1の西部
2. 壴穴状遺構－1の東部
- 図版第7 見丁塚遺跡A地点（3）
1. 壴穴状遺構－2
2. 壴穴状遺構－2
- 図版第8 見丁塚遺跡A地点（4）
1. 柱穴検出状態（裴穴状遺構－1）
2. 柱穴検出状態（裴穴状遺構－2）
- 図版第9 見丁塚遺跡A地点（5）
1. 土製支脚出土状態
2. 砥石出土状態
- 図版第10 見丁塚遺跡A地点（6）
1. 須恵器脚付盤出土状態
2. 土師器甕出土状態
- 図版第11 見丁塚遺跡A地点（7）
1. 奈良朝須恵器壺
2. 古墳時代須恵器壺
3. 奈良朝須恵器長頸壺
4. 奈良朝須恵器長頸壺
5～8. 土師器甕
- 図版第12 見丁塚遺跡A地点（8）
1. 奈良朝須恵器蓋
2. 奈良朝須恵器壺
3. 奈良朝須恵器蓋
4. 奈良朝須恵器壺
5. 奈良朝須恵器脚付盤
6. 奈良朝須恵器壺
7. 奈良朝須恵器脚付盤
8. 奈良朝須恵器壺
- 図版第13 見丁塚遺跡A地点（9）
1. 奈良朝須恵器蓋
2. 古墳時代須恵器壺
3. 奈良朝須恵器壺
4. 土製支脚
5. 奈良朝須恵器壺
6. 土製支脚
7. 平安朝瓷器鉢
8. 砥石
- 図版第14 見丁塚遺跡A地点（10）
1～4. 奈良朝須恵器蓋
5. 奈良朝須恵器壺
6～7. 奈良朝須恵器壺
8. 奈良朝須恵器皿
9. くの字口縁内耳鍋
10. 行基焼碗
- 図版第15 見丁塚遺跡F地点（1）
1. 発掘調査前の状態
2. 雪がうっすら積もった発掘調査区
- 図版第16 見丁塚遺跡F地点（2）
1. 発掘調査区の全景
2. 発掘調査区の全景

図版第17 見丁塚遺跡F地点（3）

1. 方形周溝墓の全景 2. 南溝から出土した壺形土器

図版第18 見丁塚遺跡F地点（4）

1. 第1号竪穴住居址の全景 2. 第1号竪穴住居址の竈
3. 遺物の出土状態

図版第19 見丁塚遺跡F地点（5）

1. 第2号竪穴住居址の全景 2. 遺物の出土状態 3. 遺物の出土状態

図版第20 見丁塚遺跡F地点（6）

1. 第3号竪穴住居址と第1号土壙状遺構 2. 遺物の出土状態
3. 遺物の出土状態

図版第21 見丁塚遺跡F地点（7）

1. 第4号竪穴住居址の全景 2. 第4号竪穴住居址と方形周溝墓西溝の全景

図版第22 見丁塚遺跡F地点（8）

1. 第2号土壙状遺構 2. 2号溝状遺構
3. 3号溝状遺構 4. 4号溝状遺構

図版第23 見丁塚遺跡F地点（9）

1. 方形周溝墓溝内出土壺形土器 2. 第1号竪穴住居址出土高坏形土器
3. 第2号竪穴住居址出土石器 4. 第2号竪穴住居址出土石器
5. 第2号竪穴住居址出土盃 6. 第2号竪穴住居址出土広口短頸埴

図版第24 見丁塚遺跡F地点（10）

1. 第3号竪穴住居址出土盃 2. 第3号竪穴住居址出土坏身
3. 第3号竪穴住居址出土坏身 4. 第3号竪穴住居址出土坏身
5. 第3号竪穴住居址出土高坏 6. 第3号竪穴住居址出土高坏

図版第25 見丁塚遺跡F地点（11）

1. 第3号竪穴住居址出土高坏 2. 第3号竪穴住居址出土平瓶
3. 第3号竪穴住居址出土甕 4. 第3号竪穴住居址出土甕
5. 第3号竪穴住居址出土甕 6. 第3号竪穴住居址出土甑

図版第26 見丁塚遺跡F地点（12）

1. 第4号竪穴住居址出土甕 2. 第4号竪穴住居址出土甕
3. 第4号竪穴住居址出土高坏 4. 第4号竪穴住居址出土製塩土器
5. 第4号竪穴住居址出土土錘 6. 2号溝状遺構出土貝

図版第27 林遺跡A地点（1）

1. 発掘調査前の全景 2. Aトレンチ 3. Aトレンチ

図版第28 林遺跡A地点（2）

1. Aトレンチ竪穴住居址 2. Aトレンチ竪穴住居址出土遺物
3. Aトレンチ集石遺構

- 図版第29 林遺跡A地点（3）
1. Aグリッド全景 2. Bグリッドの調査
- 図版第30 林遺跡A地点（4）
1. 林遺跡A地点出土遺物
- 図版第31 行合前貝塚（1）
1. 発掘区北端部に現れた旧牟呂往還 2. 発掘区東側断面
3. 発掘区南端部に現れた円形土壙SK-1
- 図版第32 行合前貝塚（2）
1. 円形土壙SK-2 2. 円形土壙SK-4 3. 円形土壙SK-5
- 図版第33 行合前貝塚（3）
1. 繩文式土器出土状態 2. 壺器片の出土状態 3. 壺器片の出土状態
- 図版第34 行合前貝塚（4）
1. 円形土壙SK-3 2. 丸木弓状木片 3. 加工痕のある木片
- 図版第35 行合前貝塚（5）
1～8. 繩文式土器
- 図版第36 行合前貝塚（6）
1～8. 繩文式土器
- 図版第37 行合前貝塚（7）
1. 繩文式土器 2. 繩文式土器底部 3. 土師器台付壺
4～8. 塙 輪
- 図版第38 行合前貝塚（8）
1～8. 塙 輪
- 図版第39 行合前貝塚（9）
1～5. 塙 輪 6～8. 土師器壺
- 図版第40 行合前貝塚（10）
1. 中世・近世土師器 2. 中世・近世土師器
- 図版第41 行合前貝塚（11）
1. 須恵器蓋坏 2. 須恵器高坏 3. 須恵器瓶
4～8. 平安朝瓷器碗 9. 行基焼山茶碗 10. 行基焼小皿
- 図版第42 行合前貝塚（12）
1. 刷毛目皿 2. 黄瀬戸鉢 3. 丸碗
4. 尾呂茶碗 5. 秉燭 6. 蓋
7. 鉄鉢 8. 花瓶

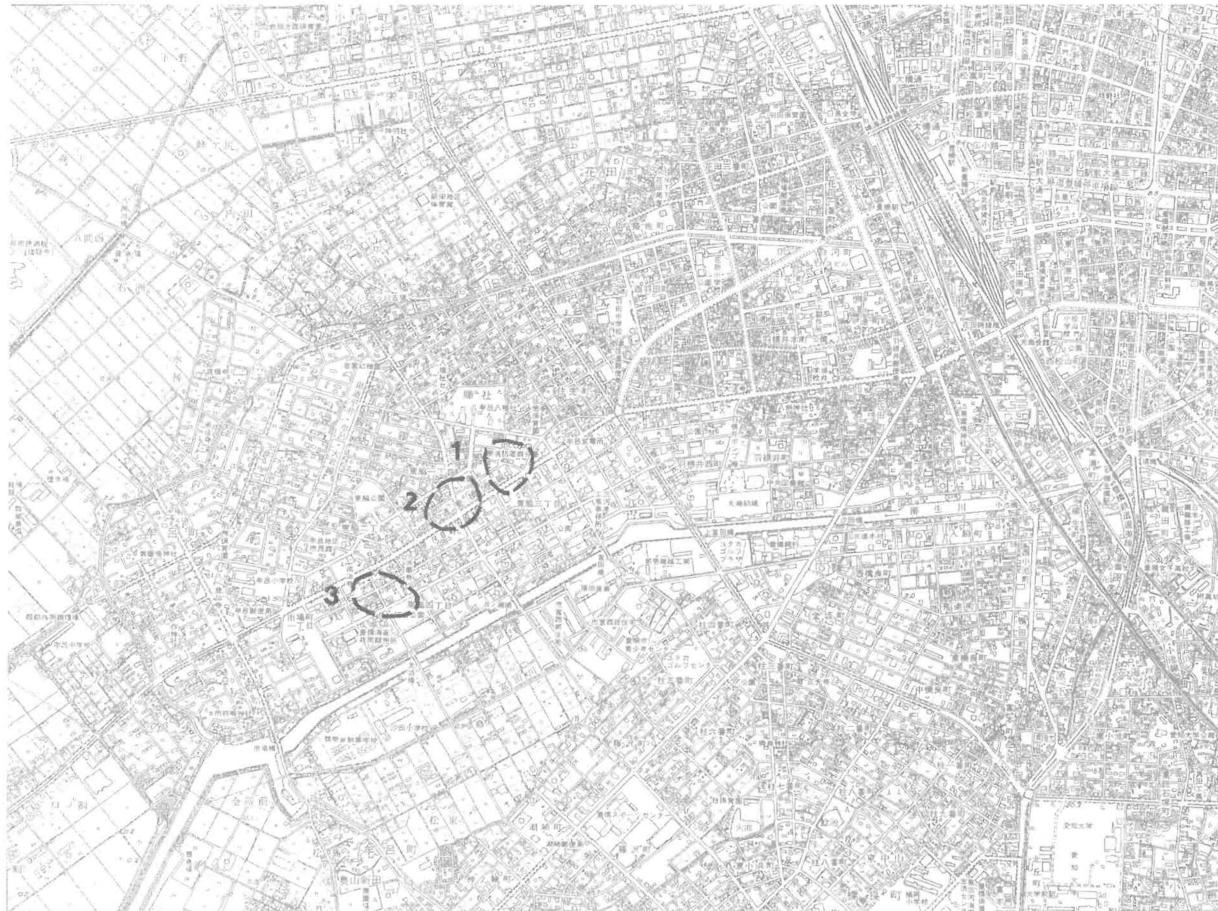
第1章 位置と環境

第1節 位置

JR東海道本線豊橋駅の西口に立つと、正面の道路が県道豊橋港線である。西駅の信号で県道大山豊橋停車場線を横切って直進すると、牟呂用水にかかる花田橋をわたって花田小前・西羽田の信号を経て往還町の交差点にでる。港大通りと呼ばれる県道豊橋港線を300mほど進むと、右手に中部電力牟呂変電所と豊橋南消防署西分署がある。その間にある東脇東の信号から港大通りを100mほど西に進んだところの右手一帯が見丁塚地区遺跡群である。

県道豊橋港線をさらに200m西に進むと東脇の信号である。交差点を右折して50mほどの所にある林公園を中心とした地域が林地区遺跡群である。

再び県道豊橋港線に戻ってさらに西に進み東脇西の信号を過ぎると、右手に曹洞宗の五願山楽法寺が見える。その寺の西にある信号のない小交差点を左折すると、道は一筋目の道路に突き当たる。このあたり一帯が行合地区遺跡群である。



挿図第1 東脇遺跡群の位置

S=1:25,000

1.見丁塚地区遺跡群 2.林地区遺跡群 3.行合地区遺跡群

第2節 地理的環境

東脇遺跡群は、中央構造線にそって東三河を貫流して三河湾に注ぐ豊川の河口部左岸に広がる豊橋台地の西端近くに分布している。この台地は北側が豊川沖積平野に面し、南側は柳生川の沖積地で画された東西に細長い台地で、豊川流域に形成された河岸段丘の一つである。

豊川の中下流域に発達している河岸段丘は、上位面・中位面・下位面に大別されている。豊橋市の中心部が所在するのは、豊川左岸の諸段丘のうち中位面に分類されている豊橋面である。この段丘面のうち、柳生川の上流右岸に広がる標高20m前後の段丘面は豊橋上位面と呼ばれ、標高・堆積物ともに共通する高師原面とともに中位段丘上位面（M I）とされている。

豊橋上位面とは10m前後の段丘崖で画されて、柳生川中・下流域の右岸に広がる標高8m前後の面は豊橋下位面と呼ばれ、中位段丘下位面（M II）に分類されている。この豊橋下位面は平坦ではあるが緩やかな東高西低の傾向をもち、吉田城付近と牟呂の一部にみられる8m前後の標高をもつ豊橋下位I面、豊橋下位面の中央部に広く分布する標高4～8mの下位II面、柳生川に沿った標高2～4mの下位III面に分けられている。このうち下位I面と下位II面が豊川沖積地に接する部分は急峻な段丘崖を形成している。下位III面は下位II面の南側に位置し、柳生川の沖積地に沿って東西に伸びており、南に向かって緩やかに傾斜している。

豊川沖積平野は河口部で幅が約4km、河口からの奥行が約12kmを測る東三河最大の平野である。河口部には海岸砂堤が形成されており、内部には豊川の流れが作り出した自然堤防が各所に発達している。柳生川は流路が短く、その沖積平野は河口部で幅が約1km、奥行が約3kmと小規模である。自然堤防は顕著でないが、河口部には海岸砂堤が形成されている。小規模な平野であるため、縄文海進や弥生小海退など小規模な海面の変動も、それぞれの時代の生活環境に大きな影響を与えたことであろう。

見丁塚遺跡と林遺跡は豊橋下位段丘III面の上端部に位置しており、行合前貝塚は崖部傾斜面に構成されている。この付近の台地が沖積地に接する崖下には、各所に湧水が見られる。牟呂地方ではこれらの池状泉は田井戸と呼ばれており、柳生川沖積地に面した東脇地区に8箇所、田成の谷に面して4箇所、市場地区に2箇所、豊川沖積地に面した坂津地区に2箇所、台地の西端部にあたる市道・真裏口に5箇所、計21箇所の存在が報告され、それぞれの田井戸と遺跡との関連が考察されている（註1）。海進・海退などに伴う大きな環境変化を乗り越えて、豊橋低位段丘II・III面で継続された人々の生活を支えたのは、絶え間なく湧き出るこれらの湧水群であったと言っても過言ではなかろう。

註1 伊藤恵「位置・地形および歴史的環境」『築根遺跡・大海津遺跡』豊橋市教育委員会・牟呂遺跡調査会 1990

<参考文献>

- ・水野季彦「遺跡の立地」『見丁塚遺跡』豊橋市教育委員会 1990
- ・町田貞・大倉陽子「豊川中・下流域の段丘地形」『地学評論33』 1960
- ・池田芳雄他「豊川中流および下流の段丘と更新統」『愛知教育大学研究報告30』 1981
- ・堀和明「豊川中・下流域における後期更新世以降の地形発達史」『地学評論71A-4』 1998

第3節 歴史的環境（挿図第2～4 図版第1・2、第1表）

東脇遺跡群がある牟呂台地は、豊橋面と呼ばれる標高4～10mの洪積台地で中位段丘にあたる。この台地は、東から西南西方向の渥美湾（三河湾）に突出した小半島を形成し、北側には豊川、南側には柳生川が台地を挟むように渥美湾へ注いでいる。東脇遺跡群は小半島の先端部の東南部に位置し、南部には柳生川下流域の沖積地を臨む。この辺りの洪積台地と沖積地との比高は2～3mあり、台地裾部は急な崖面を成し、崖下には10か所程の湧水地がある。

遺跡は、洪積台地縁端部に多くが分布する。数は少ないが台地裾部の沖積地にも点在し、台地から250mほど離れた沖積地にも遺跡を確認している。

東脇遺跡群において最も古い遺物は、貝丁塚遺跡F地点（以下、地点を略す）の古墳時代竪穴住居址埋土から旧石器時代と考えられる縦長剥片が2点出土している。この付近に旧石器時代の遺跡がある可能性が濃い。

縄文時代の遺跡は、見丁塚遺跡F、見丁塚遺跡G、王塚貝塚、東脇三昧貝塚、見丁塚貝塚、東脇貝塚A、権現神社遺跡、行合遺跡、行合前貝塚の9か所あり、遺物は数が少ないが出土している。いずれも遺構に伴って見出されたものはない。行合遺跡からは晩期の土器片が30点程（挿図第4の23～34）と東脇遺跡群としてはまとまった点数が採集され、ここに何らかの遺構があったことが想像できる。

次に弥生時代の遺跡は縄文時代に比べて半減し、見丁塚遺跡F、東脇貝塚A、東脇遺跡B、行合遺跡の4か所がある。東脇遺跡Bからは竪穴と思しき遺構内から中期前葉の二反地三式土器の壺形土器（挿図第4の22）、見丁塚遺跡Fからは方形周溝墓の溝内から中期後葉の長床式土器の壺形土器が出土している。そして、東脇貝塚Aの貝層中から、中期中葉の瓜郷式土器と中期後葉の長床式土器、それに後期後葉の欠山式土器の壺形・高坏形・甕形の土器が出土している。

古墳時代の遺跡は、見丁塚遺跡A、見丁塚遺跡F、見丁塚遺跡G、見丁塚遺跡H、見丁塚遺跡J、東脇貝塚A、法華寺西遺跡、行合遺跡、行合前遺跡、郷社東古墳、東脇古墳、権現神社古墳の12か所が知られ、遺跡数が増える。

見丁塚遺跡Fでは中期の竪穴住居址1軒、後期が3軒。北隣の見丁塚遺跡Gからは後期の竪穴住居址8軒と掘建柱建物址1棟が検出されている。両遺跡は隣接しており同じ集落であったと考えている。東脇貝塚Aでは前期のS字口縁台付甕、行合前貝塚からは埴輪片が数十点も出土している。

郷社東古墳は今は往完町であるが、かつては牟呂村に属していた時期がある。昭和3（1928）年から昭和27（1952）年にかけて行われた八幡耕地整理の工事と昭和50（1975）年の保育園建設工事に伴いその姿は消えてしまった。明治17（1884）年の『牟呂村地籍字分全図』（愛知県公文書館）を見ると円墳にもみえる。内部構造や出土遺物についての記録は残っていない。

見丁塚にあった東脇古墳については、大正6（1917）年に地元の近藤健作氏が書かれた記録がある。古墳は山本家一統の祖先を供養する塚で、円墳は東西南北各々7間（12.6m）、発掘土器には須恵器の平瓶（挿図第3の11）と土師器の高坏脚部が図示されている。明治時代の終わりに墳丘に茂っていた木を切って畑にする際、松の根を掘ると地下二尺（約60cm）の深さに大小さまざまな石があり、鋤が入らず作業を中止したと記され、横穴式石室があったと考えてよからう。それにこの供養塚は貝畠



挿図第2 東脇遺跡群の遺跡分布

第1表 東脇遺跡群地名表

(平成13年3月現在)

No.	地区	遺跡名	所在地	立地	時代	備考
1		見丁塚遺跡A地点	東脇一丁目5番地	台地内	古墳～奈良	昭和43・44年発掘、本報告書
2		見丁塚遺跡B地点	東脇一丁目2番地	台地内	不明	火葬人骨出土
3		見丁塚遺跡C地点	東脇一丁目8番地	台地内	奈良～室町	
4		見丁塚遺跡D地点	東脇一丁目7番地	台地内	平安	
5		見丁塚遺跡E地点	東脇一丁目7番地	台地縁端部	鎌倉～室町	小貝塚、竪穴、布目瓦
6	見 丁 塚	見丁塚遺跡F地点	東脇一丁目2番地	台地縁端部	旧石器～江戸	昭和51年発掘、本報告書
7		見丁塚遺跡G地点 (旧見丁塚遺跡)	東脇一丁目3番地	台地縁端部	古墳～奈良	昭和62年発掘(註1)
8		見丁塚遺跡H地点	東脇一丁目5番地	台地内	古墳～奈良	
9	地区	見丁塚遺跡I地点	東脇一丁目3番地	台地内	不明	小貝塚
10		見丁塚遺跡J地点	東脇一丁目5番地	台地縁端部	古墳～奈良	
11		東脇三昧貝塚	東脇一丁目7番地	台地縁端部	繩文晚期	芳賀陽氏教示
12		王塚貝塚	往完町字郷社東	台地縁端部	繩文晚期	
13		東脇古墳	東脇三丁目22番地	台地縁端部	古墳後期	円墳1基
14		見丁塚貝塚	東脇三丁目22番地	台地内	繩文	
15		郷社東古墳	往完町字郷社東34番地	台地内	古墳後期	推定円墳1基
16		八幡社前遺跡	東脇一丁目12番地	台地内	江戸	小貝塚
17		林遺跡A地点	東脇一丁目21番地	台地内	繩文～江戸	昭和54年発掘、本報告書
18		林遺跡B地点	東脇一丁目21番地	台地内	鎌倉～江戸	
19	林 地 区	林遺跡C地点	東脇一丁目20番地	台地内	鎌倉～江戸	
20		林貝塚	東脇一丁目20番地	台地内	江戸	ピット
21		林遺跡D地点	東脇一丁目22番地	台地内	不明	
22		林遺跡E地点	東脇一丁目9番地	台地内	奈良	竪穴住居址
23		林遺跡F地点	東脇一丁目10番地	台地内	不明	竪穴、ピット
24		林遺跡G地点	東脇一丁目11番地	台地内	不明	竪穴、ピット
25		林公園遺跡	東脇一丁目9番地	台地内	平安～室町	
26		高良社南貝塚	東脇四丁目1番地	台地縁端部	鎌倉～室町	
27	東 脇 地 区	高良社南遺跡	東脇四丁目1番地	台地縁端部	不明	
28		東脇貝塚A地点 (旧東脇貝塚)	東脇四丁目3・9番地	台地縁端部	繩文晚期～江戸	昭和43年発掘(註2)
29		東脇貝塚B地点	東脇四丁目8番地	台地裾部	江戸	
30		東脇貝塚C地点	東脇四丁目1番地	台地内	不明	竪穴
31	I	東脇遺跡A地点	東脇四丁目10番地	台地内	江戸	
32		東脇遺跡B地点	東脇四丁目9番地	台地内	弥生中期	
33		法華寺遺跡	東脇四丁目12番地	台地内	平安	
34		法華寺北遺跡	東脇四丁目12番地	台地縁端部	平安	昭和43年発掘(註3)
35	東 脇 地 区	市道遺跡A地点	東脇一丁目35番地	台地縁端部	不明	
36		東脇公園西遺跡	東脇二丁目4番地	台地縁端部	鎌倉～室町	
37	II	楽法寺北貝塚	東脇二丁目8番地	台地縁端部	不明	
38		楽法寺東遺跡	東脇二丁目11番地	台地内	鎌倉～室町	竪穴
39		行合公園遺跡	東脇二丁目14番地	台地縁端部	平安～室町	
40		権現神社古墳	東脇四丁目13番地	台地縁端部	古墳後期	円墳1基
41		権現神社遺跡	東脇四丁目13・19番地	台地縁端部	繩文～江戸	小貝塚
42		樂法寺前貝塚	東脇四丁目20番地	台地内	不明	
43	行 合 地 区	行合遺跡	東脇四丁目20・21番地	台地縁端部	繩文後期～江戸	竪穴住居址、溝状遺構(註4)
44		行合前貝塚	東脇四丁目19・22番地	台地裾部	繩文晚期～江戸	昭和58年発掘、本報告書
45		汐田小学校東遺跡	牟呂町字北汐田50番地	沖積地	平安	

この一覧表は、昭和43(1978)年に発表した「豊橋・牟呂地区の遺跡概要第4号」『志香須賀第1号』牟呂誌編纂委員会古代部と、昭和55(1980)年の「牟呂の遺跡分布図」『しかすが第9号(特集号)』牟呂誌編纂委員会の両報文をもとに、新たに発見したものを付け加えたものである。

註1 小林久彦他『見丁塚遺跡』豊橋市教育委員会 1990

註2・3 伊藤 恵「東脇貝塚」『豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書第2集』豊橋市教育委員会 1970

註4 森田勝三「行合遺跡」『志香須賀第7号』牟呂誌編纂委員会古代部 1970

とも記してあり、この付近が貝塚であったことを示している。

大正 14 (1925) 年には、見丁塚の南側約半分の範囲が柳生川の堤防を造るための土取り場となった。古墳は上部に庚申様が祀られていたため約 8 m 四方が島状に残された。しかし、昭和 33 (1958) 年から始まった柳生川沿線土地区画整理事業の道路工事により全て壊されてしまった。古墳の年代は、出土した須恵器から 6 世紀末から 7 世紀初頭頃と考える。

權現神社古墳の旧字は行合である。昭和 8 (1933) 年発行の『牟呂吉田村誌』(白井梅里) には「横穴円墳」と記されている。今は住宅地の中に高さ約 60 cm、8 m 四方をコンクリート壁で囲まれ遺存している。上部には權現神社と庚申様が祀られている。この祠の裏手に横穴式石室に用いられたと考えられる立石が 2 個あり、祠の前には側壁らしい石組の一部が確認できる。遺物は明らかでない。

奈良時代になると、見丁塚遺跡 A、見丁塚遺跡 C、見丁塚遺跡 F、見丁塚遺跡 G、見丁塚遺跡 H、見丁塚遺跡 J、林遺跡 A、林遺跡 D、東脇貝塚 A、法華寺西遺跡、權現神社遺跡、行合遺跡、行合前貝塚と 13 か所となり柳生川に沿って広く分布する。このうち見丁塚遺跡 A からは、竪穴状遺構 2 軒が検出され、東脇貝塚 A からは、この地方では珍しい漢字で「陶」と箋書きされた糸切り底の片坏が出土している。

平安時代は、見丁塚遺跡 C、見丁塚遺跡 D、見丁塚遺跡 F、林遺跡 A、林遺跡 B、東脇遺跡 A、法華寺遺跡、法華寺西遺跡、行合公園遺跡、行合遺跡、行合前貝塚、汐田小学校東遺跡の 12 か所が知られ、奈良時代の遺跡の分布と同じ広がりをみせる。法華寺西遺跡からは住居址や溝状遺構が検出され、汐田小学校東遺跡は台地から 250m 程離れた沖積地にあり、広口壺が採集されている。

鎌倉時代から江戸時代にかけては、見丁塚遺跡 C、見丁塚遺跡 D、見丁塚遺跡 F、八幡社前遺跡、林遺跡 A、林遺跡 B、林遺跡 C、林貝塚、林公園遺跡、高良社南遺跡、東脇貝塚 A、東脇貝塚 B、東脇遺跡 A、東脇公園西遺跡、楽法寺東遺跡、行合公園遺跡、權現神社遺跡、行合遺跡、行合前貝塚の 19 か所の最も多い遺跡を確認している。これまでの柳生川沿いの分布に加え、海が入り江状に入り込んだ田成周辺の台地縁端部にも東脇公園西遺跡、楽法寺東遺跡が分布し、東脇地区全域に遺跡が分布することとなる。

昭和 43 (1968) 年に発掘調査された東脇貝塚 A は、鎌倉時代末期から江戸時代末期にかけての貝塚であり、ハマグリやアサリが主体をなしている。遺物には行基焼・土師質土器・近世陶器・土製品等が出土している。この貝塚は、この東脇地区および牟呂地区において考古学的な発掘調査が始めて行われた遺跡である。

東脇地区の遺跡を旧字名を用いて見丁塚、林、東脇 I、東脇 II、行合の 5 地区に区分してみた。見丁塚遺跡群は遺跡分布度が最も濃く、東脇両遺跡群は面積が他より広いため分布度がやや薄く感じられる。分布範囲は台地縁端部を中心をおき、台地内部へ 100~200m にわたり分布している。数は少ないが台地裾部の沖積地や台地から距離をおいた沖積地にも発見されている。

さらに時代別に見てみると、旧石器時代から縄文時代を経て弥生時代にかけては遺物のみが見出され、遺物と遺構が伴う遺跡は弥生時代の見丁塚遺跡 F と東脇遺跡 B の 2 か所である。遺跡は、ほぼ台地縁端部に分布している。古墳時代から奈良・平安時代になるとほとんどの遺跡が遺物を伴い発見されている。遺跡は、台地縁端部と台地内部へも広がりをみせ数が増える。これは牟呂の市道遺跡と関係が

あるのだろうか。そして、鎌倉・室町時代から江戸時代になると、遺物のみの発見が多くなり、遺構はあまり見出されない。遺跡は台地内部へと分布が移る。

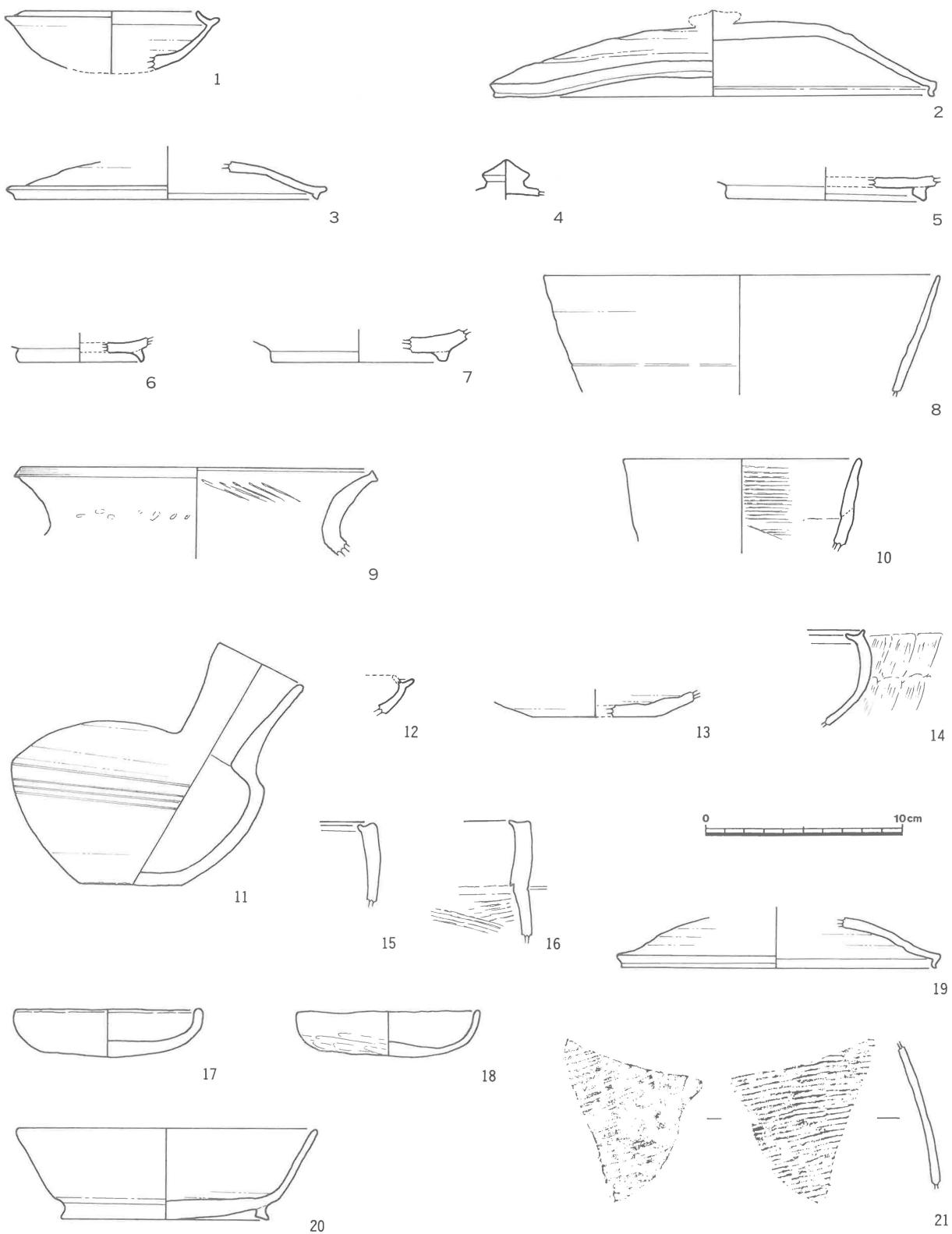
発見した遺跡の中には、時期不明の遺跡がある。これらは今後、遺物が見出されその時期が明らかになる可能性があり留意すべきである。

東脇遺跡群の分布については、35年以上の長きにわたり調査を行って来た。土地区画整理後も遺跡は発見されており、この間、久永春男、芳賀 陽、伊藤 恵、住吉政浩、牧野秀敏、小畠頼孝、平山雅弘、杉元左智男、鈴木利一、森田秀夫、近藤健也の各氏からご教示ご協力を頂き今に至っている。ここに記して感謝の意を表したい。

最後に、今回の報告書に用いた遺跡の名称（例：見丁塚遺跡A地点）と、これまで用いてきた遺跡の名称（例：見丁塚A遺跡）とが異なる標記となっている。しかし、遺跡の所在地は従来と同じ場所であり、どちらの標記を用いてもよいと考えている。

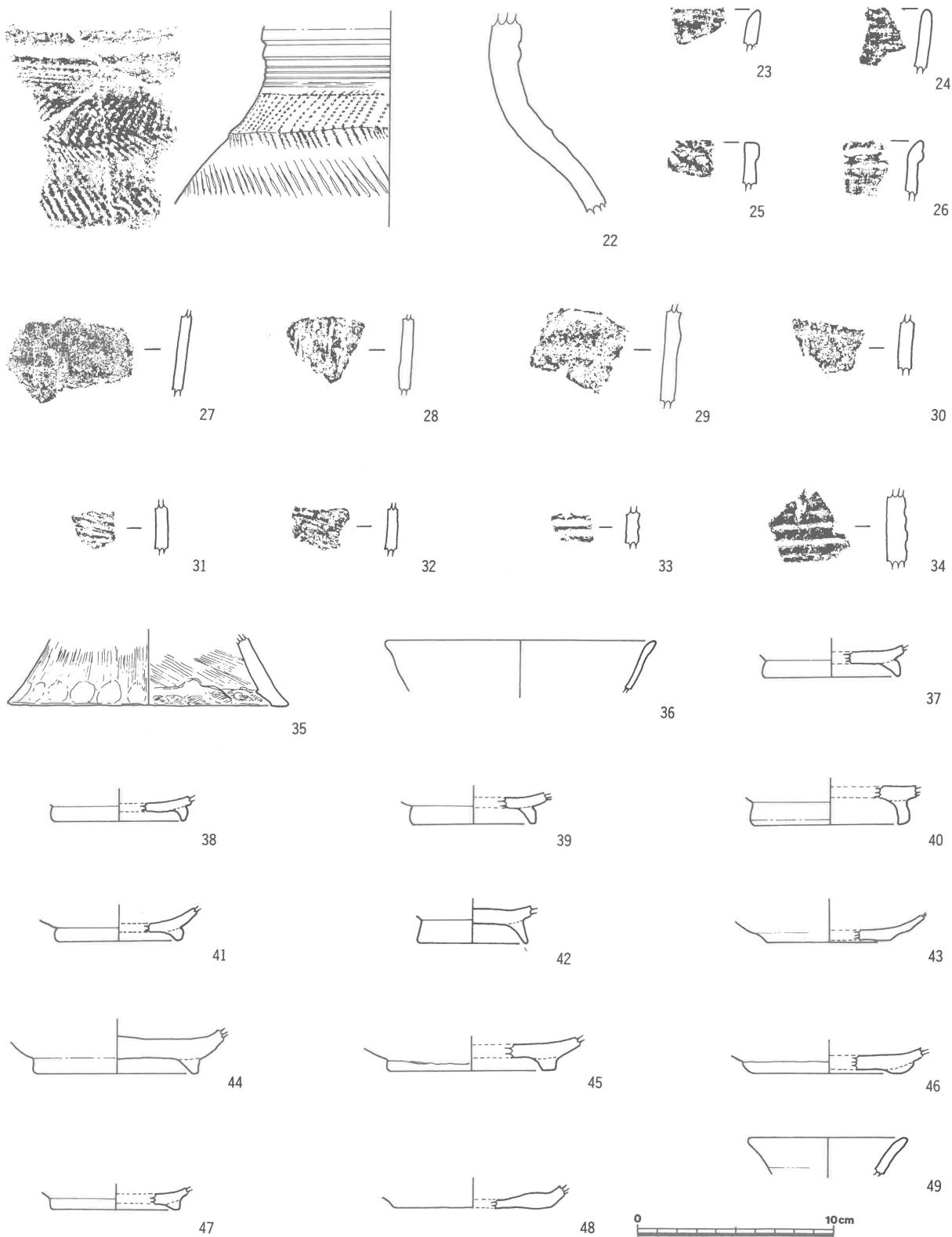
〈参考文献〉

- ・森田勝三「豊橋・牟呂地区の遺跡概略—第4号—」『志香須賀』牟呂町誌編纂委員会古代部
1978
- ・森田勝三「牟呂の遺跡分布図」『しかすが第9号（特集号）』牟呂町誌編纂委員会 1980
- ・伊藤 恵、住吉政浩、小畠頼孝、森田勝三「原始・古代・中世」『牟呂史』牟呂史編纂委員会
1996
- ・伊藤 恵「東脇貝塚」『豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第2集』豊橋市教育委員会 1970
- ・小林久彦他『見丁塚遺跡』豊橋市教育委員会 1990



挿図第3 東脇遺跡群の出土遺物 (1)

1～3.見丁塚遺跡A 4～7.見丁塚遺跡D 8～10.見丁塚遺跡J 11.東脇古墳 12～15.林遺跡A
16.林遺跡B 17・18.林貝塚 19～21.林遺跡D



挿図第4 東脇遺跡群の出土遺物（2）

22.東脇遺跡B 23~49.行合遺跡

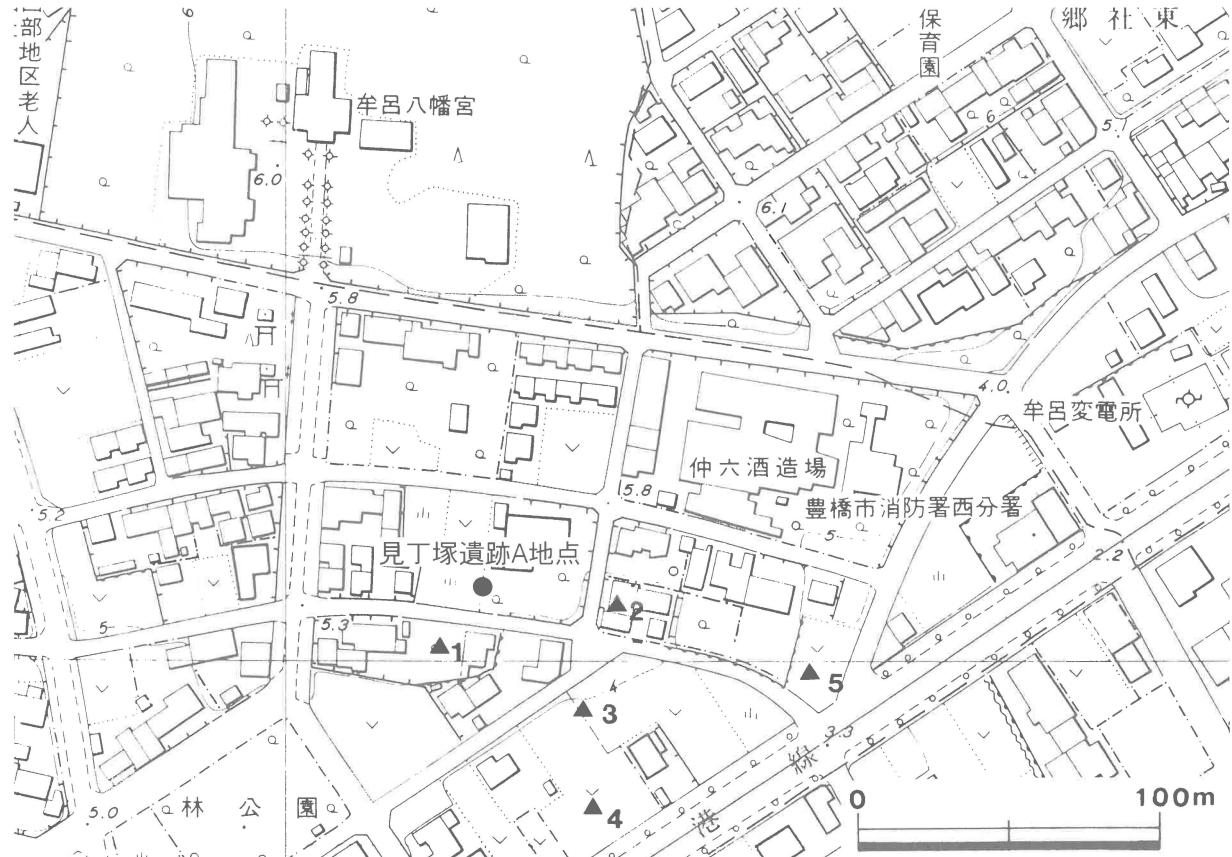
第2章 見丁塚遺跡A地点

第1節 位置と地形

豊橋駅西口から県道豊橋港線を西南西に1200mほど進むと、右手北方に豊橋南消防署西分署が見えてくる。西分署の東の緩い坂道を60mほど北西にあがると、牟呂八幡社の東参道入口に達する。そこから200mほど西に進み牟呂八幡社正面の大鳥居にいたる。表参道を100mほど南下し、交差点を東に65mほどいったところの北方左手の住宅地が見丁塚遺跡A地点である。

見丁塚遺跡A地点は、現在の地籍でいうと愛知県豊橋市東脇一丁目5番地の1と同5番地の7の境界線あたりを中心として所在する。この地籍は柳生川沿線土地区画整理事業（昭和33年～47年）以後に設定されたもので、遺跡が発見された昭和43年当時は愛知県豊橋市牟呂町字見丁塚50番地に属していたので、その名をとって遺跡名とした。見丁塚の数ある遺跡のなかでも最初に発見された遺跡であったので見丁塚遺跡A地点（註1）と呼ばれている。

このあたりは豊橋市街地から南西に三河湾に突出する牟呂台地のなかでもその南西部にあたり、標高は約5mである。区画整理以前は、牟呂八幡社の社家であった森田家と仲六酒造の建物のほかに家屋はなく、見丁塚墓地（註2）と墳頂に庚申様があった東脇古墳（註3）以外はほとんど畠地であったが、現在は住宅地に変貌している。



挿図第5 見丁塚遺跡A地点の位置
(▲1 B地点、▲2 C地点、▲3 D地点、▲4 E地点、▲5 F地点)

第2節 調査の経過

1968（昭和43）年12月8日（日）あの忌まわしい太平洋戦争開始の日から27年目にあたる日、牟呂八幡社の南東部にあたる見丁塚地区は柳生川沿線土地区画整理事業の最中にあった。所用があつてこの地を通りかかった筆者は、畠の中につくられたコンクリートの地境の周辺に大量に散乱する須恵器や土師器の破片を発見した。円盤形の鉢や鍵形に折れる口縁部をもつ蓋の破片など50点以上の遺物がまとまって出土していることから、地下に竪穴住居址などの存在することが推察されたので、遺物を採集し豊橋市教育委員会と日本考古学協会員・芳賀陽氏に遺跡発見の連絡をとった。

12月10日（火）豊橋市教育委員会の文化財担当者が現地を視察し、午後4時ごろ芳賀陽氏と筆者が立ち会い今後の対策を話し合った。担当者の説明によると、当遺跡は豊国産業の所有地で、従業員の福利厚生施設としてテニスコートを造成中であるが、年内くらいならば調査のために工事を延期してもよい、とのことであった。しかし豊橋市教育委員会としては調査費はもとより人夫もないという状態であり、小中学校が冬休みにはいるのをまって必要最小限の調査を芳賀陽氏を担当者として実施し、豊橋市教育委員会は国への発掘届や地主との交渉・発掘用具の準備などにあたることになった。

12月25日（水）南北に設置されたコンクリートの基礎を設けるための幅90cm余の溝は埋め戻されていたが、遺物に留意しつつ土砂を排出し断面を明らかにした。すると南北に約1.8mの幅で深さ10cm～20cmの地山面からの掘り込みが認められ埋土も耕作土とは明らかに違うものであった。コンクリート基礎の東側を床面を追って壁沿いに掘り進むと、床面はすぐ上がって東壁となり壁の上端近くに柱穴が2個（P1・P2）検出され須恵器や土師器にまじって木炭・焼土塊・土製支脚が出土した。コンクリート基礎の西を掘ると北東部に石を噛んだ柱穴（P3）があり、さらに西に掘り進むと一度南西に向けて閉じかけた壁が再び径1mの円形に開くことがわかった。そこで南北の断面に直交する形で東西の断面（A-B）を測図することにした。西区の西端でも柱穴（P4）が検出され高台をもたない壊や蓋壊の蓋などが出土した。

12月26日（木）西区の南半分の床面を精査する。壁の上面近くに柱穴（P5・P6）が検出される。床面からは須恵器の甕や砥石などが出土する。

12月27日（金）東西の断面と南北の断面を測図後、間壁を取りはずす。東区の床面清掃中、北方に別の竪穴の断面らしい掘り込みが現れたので床面に沿って掘ると、隅円方形の竪穴らしい一角が検出され柱穴も1個見出された。そこで最初検出された竪穴を竪穴状遺構-1と呼び、その北のものを竪穴状遺構-2と呼ぶことにした。つづいて南北の断面（C-D）を測図した。午後遅く竪穴状遺構-1の平面図の作成を急いだが日没は早く、その東半分と竪穴状遺構-2の平面図および断面図は未完成におわった。豊橋市教育委員会から地主は来年の1月8日まで工事を行わない旨連絡を受けほっとする。

1969（昭和44）年1月8日（水）小中学校の3学期始業式の日、午後1時30分から4時まで竪穴状遺構-1と竪穴状遺構-2の東区の平面図および断面図（E-F・G-H）を作成する。豊橋市教育委員会の担当者と地主の代理が立ち会う。最後に、調査中協力してくれた小畠頼孝・森田勝三両君をはじめとする牟呂中学校の生徒諸君に深く感謝する次第である。

第3節 遺構と遺物の出土状態

1. 壇穴状遺構－1

平面形は東西に長軸をもち、歪んだ隅円長方形の西北端に橢円形の張り出し部分をもつ。一般的な壇穴住居址とは様相を異にするので、ここでは壇穴状遺構とよぶ。東辺の壁の長さは上端で135cm、下端で106cmである。南辺の壁は中央部が外へ張り出しているが、上端で267cm、下端で224cmを測る。北東隅から円形の張り出し部分の始まる部分までを北辺とすると、壁の上端は162cm、下端は164cmである。西壁の上下端の長さは、張り出し部分がつくので不明である。面積は、下端で測ると2.5m²、上端で測ると3.5m²である。壇穴の深さは12cm～20cmである。

北西部につづく橢円形の張り出し部分は、東西径が上端で135cm、下端で100cmである。南北径は上端で120cm、下端で80cmを測る。面積は下端で0.7m²、上端で1.0m²となる。

検出された柱穴は6個で、その数値は右の表のごとくである。柱の太さは8cm×8cmから18cm×20cmまでさまざまであるが、深さは15cmから20cmまでで、あまり深くない。次に柱穴間の数値はP1～P2は116cm、P3～P4は127cm、P5～P6は105cmと、平均116cm前後であるのに、P2～P3は188cm、P1～P6は257cmとあまりにも大である。これは、この間90cm余が工事により掘削されているためで、南北に2個の柱穴を補足すれば柱穴間は100cmから130cmの間に収まるであろう。また張り出し部分については、P4～P5が76cmと狭いことや橢円形部分からの遺物が少ないこと、およびこの床面が他より5cmから6cm低く踏み固められていることから、この部分を出入口と想定することもできる。

東区の東の壁面に接して北端で土師器の甕（72）が出土した。その周辺には焼土や炭化材の破片などがコンクリート工事の埋土に混入していた。東壁の下中央部には、蓋（8・12・13）があり、東壁下の北寄りの床面に長頸壺の口頸部分（62）が検出され、中央部からは土製支脚（75）がコンクリート基礎用に掘られた溝すれすれに横たわっていた。折損部分には工事用のコンクリートが付着していた。東区南部の床面からは、須恵器の甕片（51・53）、塊（31）、皿（34）も出土している。

西区においてはP3の東から脚付盤（32）が出土し、蓋坏の蓋（9・14）はP3の西から検出された。袋状の橢円形部分の北東部からは高台のない坏（26・27）が現われ、P6とP5の間の西壁上面に土師器甕（73）が出土する。南西部のくびれ部付近から砥石（77）が現われ、南西壁沿いに脚付の盤（33）や蓋（7）が見出される。須恵器の甕（49・50）は中央部に、同じく甕（52）は南壁に接して出土した。

第2表 見丁塚遺跡A地点 壇穴状遺構－1の柱穴

柱穴番号	東西の径(cm)	南北の径(cm)	床面からの深さ(cm)	柱穴間の距離・備考(cm)
P 1	8	8	18	P1～P2間 116
P 2	12	12	20	P2～P3間 188
P 3	9	14	17	12×4×3の円盤を挟む
P 4	16	16	15	P3～P4間 127
P 5	18	18	15	P4～P5間 76
P 6	18	20	15	P6～P1間 257
平均	13.5	14.7	16.7	

2. 竪穴状遺構－2

東壁の一部分（上端で 166 cm、下端で 122 cm）と北壁の一部分（上端で 190 cm、下端で 144 cm）を東区で確認できた。竪穴の大部分は西区にあり調査できなかった。おそらく隅円方形の竪穴住居址と思われるが、ここではその 1/4 ほど検出できたのみであるので竪穴状遺構－2 と仮称する。

南壁下から 30 cm、東壁下から 20 cm の位置に検出された柱穴は、東西の径が上端で 22 cm、下端で 8 cm、南北の径が上端で 24 cm、下端で 10 cm、深さは 22 cm である。現状においては、地山面から床面までの深さは 10 cm～12 cm を測る。

遺物はきわめて少なく、須恵器の壺（70）と壺（69）が柱穴付近の床面から検出できたにすぎない。

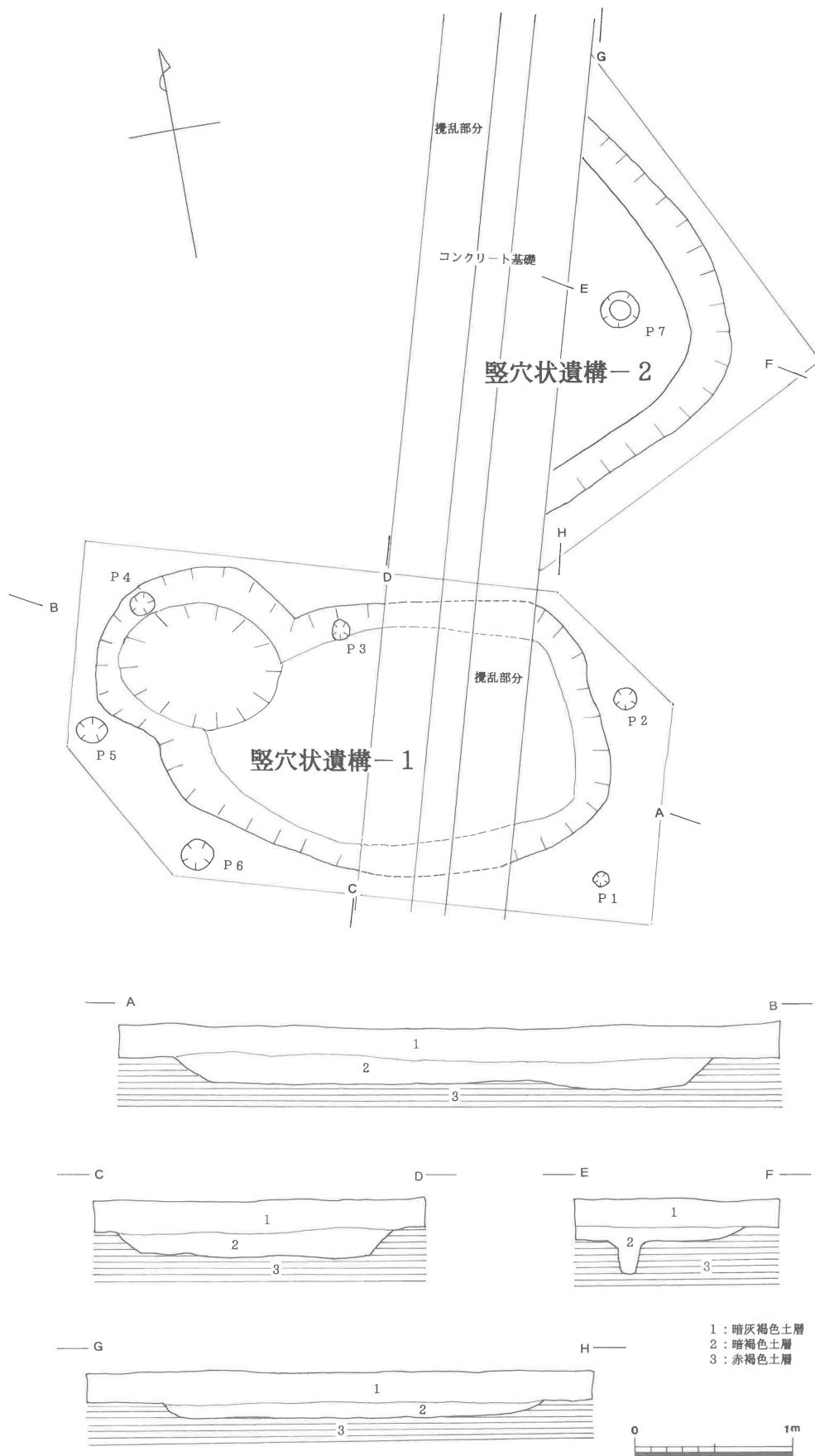
3. 耕作土（暗灰褐色土層）からの出土状態

地表から下へ 18 cm から 22 cm の間は耕作土層である。色調は暗灰褐色をなし、古代から近世までの遺物が攪乱状態で現れた。この層の下は粘質度の強い赤褐色土層であり、竪穴状遺構はこの土層に穿たれ、土色は暗褐色をなしていた。耕作土層からの出土遺物は、かわらけ（67・68）、行基焼の碗（63・64）、くの字口縁内耳鍋（65・66）などの中近世の土陶器とともに須恵器の壺（19）と甕（47・48）が出土した。

4. 工事にともなう遺跡と遺物の破壊

コンクリート塀を設置するために幅 90 cm 余りの溝を南北に 45 cm ほどの深さで掘り上げたことにより、前述の竪穴状遺構－1 の 1/3 ほどと竪穴状遺構－2 の一部分が破壊された。そのため遺構の床面や埋土中にあった遺物の一部は地表に散乱し、他の遺物は土砂とともに埋立地へ運ばれた。地表に残された遺物は 50 片ほどであったが接合できる割口の新しいものもあった。須恵器は 35 点あり、その内訳は蓋壺の蓋（1～6・54・58）、盤（15・18）、壺（16・17）、高台のない壺（20～25）、塊（30・55）、甕（35～46）、鉢（57）、長頸壺（59・60）である。瓷器の鉢（56）、土製支脚（76）、土師器の甕（71・74）も採集できた。

多くは小片であったが、残存度 20 % 以上の遺物についてみると蓋（1）は 7 片のかけらを接合、蓋（3）は 3 片を接合、蓋（5）は 4 片を接合できるなど細かく碎かれ、コンクリートが付着するものもあり、工事の影響を強く受けている。これらの遺物は 54・55・56・58 を除いて竪穴状遺構－1 の出土遺物と同じ時期の遺物であったことから、同遺構が工事によって壊されたとき出土したものであろう。



挿図第6 見丁塚遺跡A地点 竪穴状遺構-1・竪穴状遺構-2の平面図・断面図

第4節 遺 物

出土した遺物は竪穴状遺構－1から出土したもの、竪穴状遺構－2から出土したもの、暗灰褐色土層（耕作土）から出土したものおよび土木工事により掘り出されたものにわけて説明する。

1. 竪穴状遺構－1からの出土遺物

ここから出土した遺物には、須恵器・土師器・土製支脚・砥石がある。

(1) 須恵器

蓋坏の蓋（挿図第3の9～14） 9は全体の器形のわかる唯一の例であり、口径（縁端部の径）が12.5cm、器高（縁端から鉢の上端まで）2.5cmを測る。蓋の外面頂上には高さ1.2cm、径1.8cmの擬宝珠形の鉢がつき、鉢の下端から10°ほどゆるい傾斜で縁端部にいたる。縁端部は短く内折し、その断面形は鋭い逆三角状をなす。器面の調整は回転ヨコナデを基調とするが、鉢の付け根から縁端部に向けて2/3弱にわたって回転ヘラケズリ調整が施されている。

回転ヘラケズリの器表全体に占める割合については、1998年に『水神古窯灰原』（註4）で問題提起したことがある。その後2000年1月、『岩屋下古窯』（註5）の遺物を検討するなかで執筆者の石川明弘氏からヘラケズリの測定について次のような御教示を得た。すなわち器体外面の中心から縁端部までを曲面のカーブに留意しつつコンパスなどで外縁のすべてを測り、そのなかのヘラケズリ部分の長さが全体で占める割合を求めればよい、ということであった。

この器表の中心から縁端部までのラインを呼ぶ適当な言葉が見つからなかったが、数学事典を見ていると、数学では円錐の頂点から底面の縁端部までの直線を「母線」と称していることを知った。蓋の頂上（頂点）から縁端部（底面の側縁）までは直線ではなく、緩い曲線をなすことからこれを母線ということはできないので、ここでは「准母線」と呼ぶことにする。この准母線のなかでの回転ヘラケズリ部分の長さが占める割合をもって、ヘラケズリ率を表すことにした。

遺物9の場合は准母線の長さが5.6cmで回転ヘラケズリ部分の長さが3.5cmであるからヘラケズリ率は $3.5 \div 5.6 = 0.625$ で、63%と求めることができる。

10は、口径15.4cmを測り、鉢が欠落した痕までの高さは2.5cm、これに1cmほどの高さの鉢を想定すると、高さ3.5cmほどの中位の蓋である。縁端部で下方へ0.8cmほど折り曲げ、先端は丸く仕上げる。11は口径21.2cmを測る大型の蓋である。淡灰白色を呈し焼成軟弱で脆い。周縁部は下方へ0.9cm折り曲げられる。12は口径16.4cmの中型の蓋で、器高は3.5cmほどと推定される。周縁部は0.7cmほど下方へ折り曲げられる。13は口径21.0cmの大型の蓋で、器高3.5cm前後と推定される。縁端部は下へ0.7cmほど折り曲げられる。14は口径17.4cmの中型の蓋で、器高は3.5cm前後であろう。縁端部の折り曲げ部分は長さ0.7cmで先端は尖っている。7と8は小片で口径も高さもわからないが、口縁部の折り曲げ部分は7が0.7cm、8が0.8cm、ヘラケズリ部分は縁端から1.2cmまで両者とも回転ヘラケズリされる。

10～14までの調整技法は9と同様で、蓋頂上部を中心とする回転ヘラケズリと、他の面は回転ナデ調整が施される。

つぎに回転ヘラケズリの割合は、上述の蓋（9）で試みた方法で計算すると10のヘラケズリ部分は鉢を中心とする半径が2.6cm、准母線は7.1cmを測り、 $2.6 \div 7.1 = 0.366$ で、ヘラケズリ率は約37%となる。11は表面の剥落著しくケズリが不明である。12はヘラケズリ部分3.5cm、准母線7.7cmで、ヘラケズリ率45%となる。同様にして13はヘラケズリ率55%、14はヘラケズリ率49%となり、9～14までの回転ヘラケズリ率は36%～63%までに含まれる。

無台坏（挿図第3の26～29） 26は口径13.1cm、底径10.1cm、器高3.4cmの高台をもたない坏で、平底の底縁から70°の急角度で外上方に直行し口縁にいたる。口唇部は内面を軽く押さえ、外面は幅3mmの沈線を巡らす。底縁はその半周ほどが幅3mmほどヘラケズリされ丸みをもたせている。底部は回転ヘラケズリで調整しその他は回転ナデが施されている。

27は口径14.0cm、底径9.4cm、器高3.5cmで26に近い規格であるが、底縁から口縁にいたる角度は60°でやや緩い。口唇内部の斜めの押さえや外面の幅6mmの浅い沈線と幅4mmの底縁へのヘラケズリも26と共通するものである。

28は口径11.0cm、底径6.8cm、器高3.0cmと最も小型で口唇内面の押さえや外面の沈線はないが底縁のヘラケズリの幅は1.3cmと大である。底縁から口唇への角度は65°を測る。

29は口径13.1cm、底径8.4cm、器高3.1cmで口唇内面の押さえと外面の沈線はわずかに残り、底縁のケズリも1.0cm施される。底縁から口唇への角度は65°である。

これら高台をもたない平底の坏の特徴をまとめると、口径は11.0cmから14.0cmで、底径は6.8cmから10.1cmを測る。口径は底径の1.5倍前後を示す。器高は3.0cmから3.5cmの間にあり、口径は器高の約4倍にあたる。底縁から口縁部への角度は60°から70°である。口唇部は内面を斜めに押さえられ、外面には浅い沈線を巡らす。底部は回転ヘラケズリが施され、ほかは回転ナデが施される。

塊（挿図第3の31） 31は高台のない須恵器の塊である。その口径13.5cm、底径6.5cm、器高4.1cmを測る。底縁から口唇にかけての3/4までは高台のない坏と同様直行するが、それより口唇にかけては緩やかに外反する。また坏との違いは底部の厚さにおいて、坏が4mmから5mmであるのに対して塊は6.5mmから8mmと分厚く作られている点である。

脚付盤（挿図第3の32・33） 32は口径23.0cm、33は口径24.6cmを測る大型の盤である。坏部の高さは32が3.0cm、33が3.3cmである。脚部は欠損して不明であるが、坏底部外面の接合痕を測ると32は5.8cm、33は5.6cmの径である。このように数量的な規格は似通っているが、形態技法の点では異なる。すなわち32は盤の中央から口縁部にかけて緩く内彎気味に開き、口唇から1.5cmほどのところで斜め外方に屈折するが、33は盤中央から口縁にかけて浅くなるものの外反り気味で口唇は1.2cmほどほぼ直角に上方に折り曲げられている。口唇上面が水平に押さえられている点は共通しているが、胎土は32が砂質の粘土で色調は青墨色であるのに対し、33はきめ細かな粘土で灰白色を呈している。器の内外面は回転ナデが施されるが、脚のつくあたりは回転ヘラケズリがなされ、その範囲は32で半径6.5cmほど、33は半径4.3cmから4.5cmにおよび、ヘラケズリ率は、32が57%、33が36%である。これらの特徴からみて32は豊橋市東南部の一里山古窯址群（註6）、33は猿投山西南麓古窯址群（註7）に産地がもとめられよう。

皿（挿図第3の34） 34は口径15.1cm、器高2.7cmの皿で、高さ0.8cmの断面逆台形の高台をついている。口唇から0.9cm付近で斜め外上方へ折れ、口唇上面が平らに押さえられる技法は32と共に通している。器表面は回転ナデで調整しているが、底面は口縁の折り曲げ部分まで回転ヘラケズリが施されている。

長頸壺（挿図第5の61・62） 61は長頸壺の口縁部で、大きく外反した口唇部は上方に引き伸ばされ受口状をなし口径は9.8cmを測る。62は長頸壺の頸部で、その径は4.3cmほどである。両者とも焼成不良の生焼けで色調は灰白色をなし、同一個体と思われる。

甕（挿図第4の49～53） 49は頸基部の径が36.8cmを測り、口径は40cmを上回ることであろう。外面には平行叩き目が斜めに浅く施され、自然釉がかかる。内面は接合部を指押さえしたあとヘラ状器具で削っている。50は平行叩き目を斜めに施し内面はヘラ状器具で整えている。51は外面に平行叩き目を斜めに施し内面を平行にヘラ状器具で押さえている。52は細くていねいな平行叩き目を施し、内面の同心円文はほとんど磨り消している。53も52と同じ手法で作られており、器厚が薄い。

（2）土師器

甕（挿図第5の72・73） 72は口径24.0cm、口縁の幅3.4cmを測る。口縁部は頸部から（水平を基準線として）26°斜め上方へ屈折し、緩いくの字形口縁をなす。口頸部内面には口縁部と胴部を分ける稜線がはっきりしている。器表は摩滅して調整痕は不明である。73は口径27.0cm、口縁幅は3.6cmを測る。口縁は緩いくの字形口縁（27°）をなすが、72に比べて直線的で口縁部と胴部を分ける稜線の切れが良い。器壁は頸部あたりを最も厚くしている。器表面は剥落が激しく調整痕は残らない。

（3）土製品

土製支脚（挿図第5の75） 75は上方に比べて下方が幅広の四角柱状の土製支脚で、現存する長さは13.0cmである。上面は赤褐色に焼け締まり一辺が4cm前後の隅円の方形をなしている。下部は途中で折れ損じているが、その最も下方の太い部分で断面形は上底4.6cm、下底6.2cm、高さ5.2cmの台形を呈している。上面と側面の一稜のみ上端から5cmほど下方に強く赤褐色に焼け、他の部分より火力が強くあたったことを示している。このことから土製支脚は直立して立てられたものではなく、30°前後、上部を火の方へ傾けて下部を一部埋めて立てられたものと推定される。

（4）石製品

砥石（挿図第5の77） 77は下部が一部欠損しているが四角柱状をなす。鎌を研ぐため腰に吊るした鎌砥で上面中央と腹面および背面上方に径6mmから8mmの孔が貫通している。現存する長さは6.5cm、幅は上端で3.1cm、折れ損じている部分で2.6cmである。厚さは上端で2.2cm、折損部分で1.7cmである。このように上下に差のあるのは使用のために研磨したためで、特に腹面と左右側面は滑らかになっている。背面はやや凹凸があり側面近くが削られているが、それでも上方は円滑である。また折損部分も角がとれており、破損後も長年愛用されたことを物語っている。右の側面には縦1.5cm、幅0.1mmほどの細い線が3条あり、鉄器でつけられた痕と思われる。石材は硬質の灰白色凝灰岩で

であろう。

2. 竪穴状遺構－2からの出土遺物

竪穴状遺構－2からは古墳時代須恵器の蓋坏の坏と壺の2点のみが出土した。

(1) 須恵器

蓋坏の坏（挿図第5の70） 70は小片のため口径は不明であるが、口縁端から立ち上がりまでは4mmほどの平坦面をなす。立ち上がり部分は45°ほど内傾しているが、高さは先端が欠損し不明である。内外面は回転ナデにより調整しているが、外面の口唇から1cm近くまでは回転ヘラケズリ調整がなされている。

壺（挿図第5の69） 69の胴部の最大径は12.8cmで、それよりわずか上方に幅2mmのごく浅い2条一組の沈線を巡らし、その間に右上から左下へ刺突文が施されるが、点がつながって斜線列化している。上の沈線から1.8cmほど上方の器表面に胴部に屈折する痕があり、ここから口縁部に移行すると思われる。頸か直口壺の胴部と考えられる。

3. 暗灰褐色土層（耕作土層）からの出土遺物

暗灰褐色土層（耕作土層）から出土した遺物には、須恵器、行基焼、内耳鍋、かわらけがある。

(1) 須恵器

坏（挿図第3の19） 19は高台部分から60°ほどの角度で口縁部にいたる坏で、腰部は緩やかである。高台部分は角形をなし、その高さは外側で5mm、内側で2.5mm、幅は上下ともに5mmで高台下面の外縁で着床する。

甕（挿図第4の47・48） 47は器厚10mm前後の甕の胴部破片である。表面は浅い叩き目が斜めに押され、その後に別の叩き目が加えられる。内面はていねいに磨り消しているが、一部に指痕が見られる。48は器厚7mm前後の甕の胴部小片で、表面には斜めの叩き目があり、内面には笠先で2本平行しながら緩く曲がる線と1本の直線とが、先で結ばれる船の舳先のような図が描かれている。

(2) 行基焼

碗（挿図第5の63・64） 63は底径7.6cmの行基焼の碗である。器壁は高台脇で1.1cmと厚く、口縁部に近いところで0.6cm前後と薄くなる。高台は断面が半円形に整えられ、高台の着地面には粉殻痕が見られる。高台の内底面はていねいに撫でつけられている。高台の高さは0.6cm、基部の幅は1.3cmである。高台内の底面の糸切り痕は少し残るがほぼ撫でつけられ、高台の外底面には笠先の調整痕が巡っている。内底面はよく摩耗しその3/4に墨色が残されるので、硯としての利用が考えられる。64は碗の口縁部の破片である。口唇部は丸く口縁はあまり彎曲せず、口唇内面の押さえもない。

(3) 中近世土器

内耳鍋（挿図第5の65・66） 65はくの字状の口縁をもつ内耳鍋である。口縁部先端を外方へ折り返し、折れた部分を上方へわずかにつまみ出して立ち上がり気味の口唇部をつくる。外へ折り返された部分は1本の細い沈線状となり、口縁部を飾っている。66は同じくの字状の口縁をもつ内耳

鍋で技法もつくりも同じであるが、口縁の厚みが薄く立ち上がりも短くなり小型化している。

かわらけ（挿図第5の67・68） 67・68はかわらけの口縁部の小片である。67は口縁部外側に指痕を残すが、68には見られない。68は67に比べて口縁部の内弯する傾向が大きくなっている。

4. 土木工事に伴って出土した遺物

土木工事にともなって出土した遺物には、須恵器（蓋坏・高台をもたない坏・盤・塊・長頸壺・鉢・甕）、土師器の甕、平安朝瓷器（鉢）および土製支脚がある。

（1）須恵器

蓋坏の蓋（挿図第3の1～6、挿図第5の54・58） 1は、口径19.8cm、鉢の部分を欠落するが、鉢の直下の天井部までの高さは3cm前後と推定される。口縁部は直角に下方へ折り曲げられ、坏の口縁にかぶせるようにつくられる。折り曲げられた外面は0.8cmほどの凹面をなす。口縁部の内面は5cmほど中心に向けて自然釉がかかり焼成時内面を上に向けて置かれたことがわかる。外面は回転ナデ調整を主とするが、鉢を中心とする部分は回転ヘラケズリ調整がなされ、ヘラケズリ率6cm÷准母線9.6cmでヘラケズリ部分は63%となる。

2は、口径18.4cm、1とほぼ同じつくりで折り曲げ部分は0.9cmから1.0cm、ケズリ部分は約5.4cm、准母線は8.5cmで、ヘラケズリ率64%となる。

3は、口径14.8cmと小型で、口縁の折り曲げ部分は0.6cm、断面は逆三角状をなす。鉢は欠くがその接着部の跡が残り、それより3.3cmの幅で2回転ヘラケズリがなされている。ヘラケズリ率は不明である。

4は、小片のため口径は不明で、他の須恵器と色調が異なり、赤褐色を呈する。

5は、口径12.0cmで、蓋のなかで最小である。口縁端は短く内折するが、その先端は口径がこれに近い9のように断面は鋭くない。口縁から1.3cmの器表に他の器物の縁端部が付着し、窯糞も付着している。ヘラケズリ部分は3.0cm、准母線は5.7cmであるので、ヘラケズリ率は53%となる。

6は、円盤形で中心部がやや突出する鉢をもつ。鉢の径は2.8cmで、高さは0.9cmである。天井部には回転ヘラケズリが3回転施され、鉢の端から4.2cmまでおよんでいる。残存部の器径が16.4cmなので、これを2～3cm上回る口径となろう。

54は、弧状をなす器表が口縁部にいたって斜め下方へ折り曲げられ、口唇から1cmほどの部分が稜をなし、口唇部はまるくおさめられる。奈良朝須恵器の前期に属する。

58は、かえりのある蓋で、かえりの先端は欠損しているが傾きが少なく、その先端部は口縁端から下方へ出ないものと推定され、古墳時代以後の須恵器のなかでも古い部類に属しよう。

坏（挿図第3の16・17） 16は底部中心から7.1cmのところで70°の角度で斜め上方へ屈折している。ほぼ直線的に口縁にいたるものと思われるが、腰折れ部から2.2cmのところで欠損し口縁部の形はわからない。底面には腰折れ部から1.2cm内寄りに角張った高台が付される。高台の径は11.4cmで高さは内側で3mm、外側で5.2mmとなる。幅は5mmから6mmである。内外面とも回転ナデにより成形しているが、腰折れ部のみ籠状器具をあてて角を2mmほど面取りしている。自然釉が高台

から底面と腰折れ部にまでかかり、底面から高台にかけて径 0.3 cm から 1.0 cm の窓糞が付着している。

17 は、口径および器高は不明であるが、高台径 12.0 cm を測る坏である。高台の高さは外側 5 mm、内側 4 mm、幅は 4 mm から 5 mm である。高台の着床面が高台外周となることは 16 と共通である。高台端より 1.1 cm ほど外で腰折れするタイプとみられる。

無台坏（挿図第 3 の 20～25） 20～25 は小片のためいずれも口径は不明である。器高がわかるものは 20 が 2.0 cm、21 が 2.2 cm の 2 個である。口唇内側の斜めの押さえは、20 が 3 mm 幅で、21 が 3 mm 幅、24 が 6.5 mm 幅である。口縁外側の沈線は 20 が 6.5 mm、21 は 5 mm で、他には存しない。底面外側は、20 が 1.0 cm、21 が 0.5 cm のヘラケズリがあり、底内面の角は 20 と 25 は緩く、21 と 23 は鋭く折れ曲がる。

塊（挿図第 3 の 30、挿図第 5 の 55） 30 は、底径 6.0 cm の高台のない塊の底部である。底部から腹部にかけてふっくらと曲面をなし、器厚は 6 mm から 3 mm へと厚さを減ずる。

55 は、糸切り痕が平底に残る塊で、底部から腹部へふっくらとした曲面を見せ、器厚は 6 mm 前後である。

盤（挿図第 3 の 15・18） 15 は、高台のある大型の皿で盤とも称される。口径は不明であるが高台径は 14.3 cm を測る。器高は 2.7 cm まで残存するが、高台から 3.1 cm のところでほぼ直上にまがり、0.7 cm 上で口縁部が折れ損じている。この部分の径は 20.5 cm であり、このことから器高は 3 cm 前後、口径は 21 cm 前後と推定される。高台の高さは外側で 0.8 cm、内側で 0.6 cm、高台の幅は 0.7 cm 前後で、外へひねり出されている。底部中央は高台よりやや突出し不安定なつくりとなる。内面や高台脇などは回転ナデ調整であるが、高台内面は回転ヘラケズリが施されている。

18 は、下端外側へひねり出した高台を有する底部の小片である。高台の高さは内外とも 0.6 cm、高台の幅は 0.6 cm である。15 と同じように盤と思われる。

長頸壺（挿図第 5 の 59・60） 59 は長頸壺の口縁部の破片で、口径は 13.8 cm を測る。頸部から朝顔の花弁状に大きく外反した口唇部は上に 0.2 cm、下に 0.1 cm つまり出され、端面は 0.7 cm 幅に拡張されて受口状をなす。

60 は長頸壺の底部で、高台径は 12.4 cm である。高台の高さは外縁で 1.1 cm、内縁で 0.9 cm を測る。高台の幅は 1.0 cm、下端を外方へひねり出した力強いつくりである。下胴部はふっくらと膨らみ、器壁は高台付近で 1.2 cm で、上方 4.5 cm で 0.5 cm と薄くなる。下胴部と高台外面には暗灰緑色の自然釉がかかる。内底面中央には径 4.5 cm の円形に自然釉が垂れているので、この長頸壺の口頸部の太さは 4.5 cm に器壁の厚さを加えた 5.5 cm 前後と推定される。高台には窓壁の一部が付着する。

鉢（挿図第 5 の 57） 57 は深さ 8 cm 以上の大きな深鉢と思われ、底部から口縁にかけて直線状をなしている。全体に焼成不十分である。

甕（挿図第 4 の 35～46） 35～39・45 には、内面に同心円文が残っているが、他には認められない。35～38 の外面には平行叩き目が施されるが、叩き具の木目と叩き目が直交するので、格子目状に見える。39 は平行叩き目にカキメを加えている。45 は太くはっきりした平行叩き目を施し、薄手である。40～42 は内面をきれいに磨り消し、外面には浅い平行叩き目が施される。43・44・

46も内面は磨り消し、外面に斜位の平行叩き目とカキメが加わる。44は太い平行叩き目、46はごく浅くて細い平行叩き目が施される。

(2) 土師器

甕（挿図第3の71・74） 71は口径20.3cmを測り、出土した土師器の甕の中では最小である。口縁の幅は2.4cmで、頸部からほぼ直角に外反する。

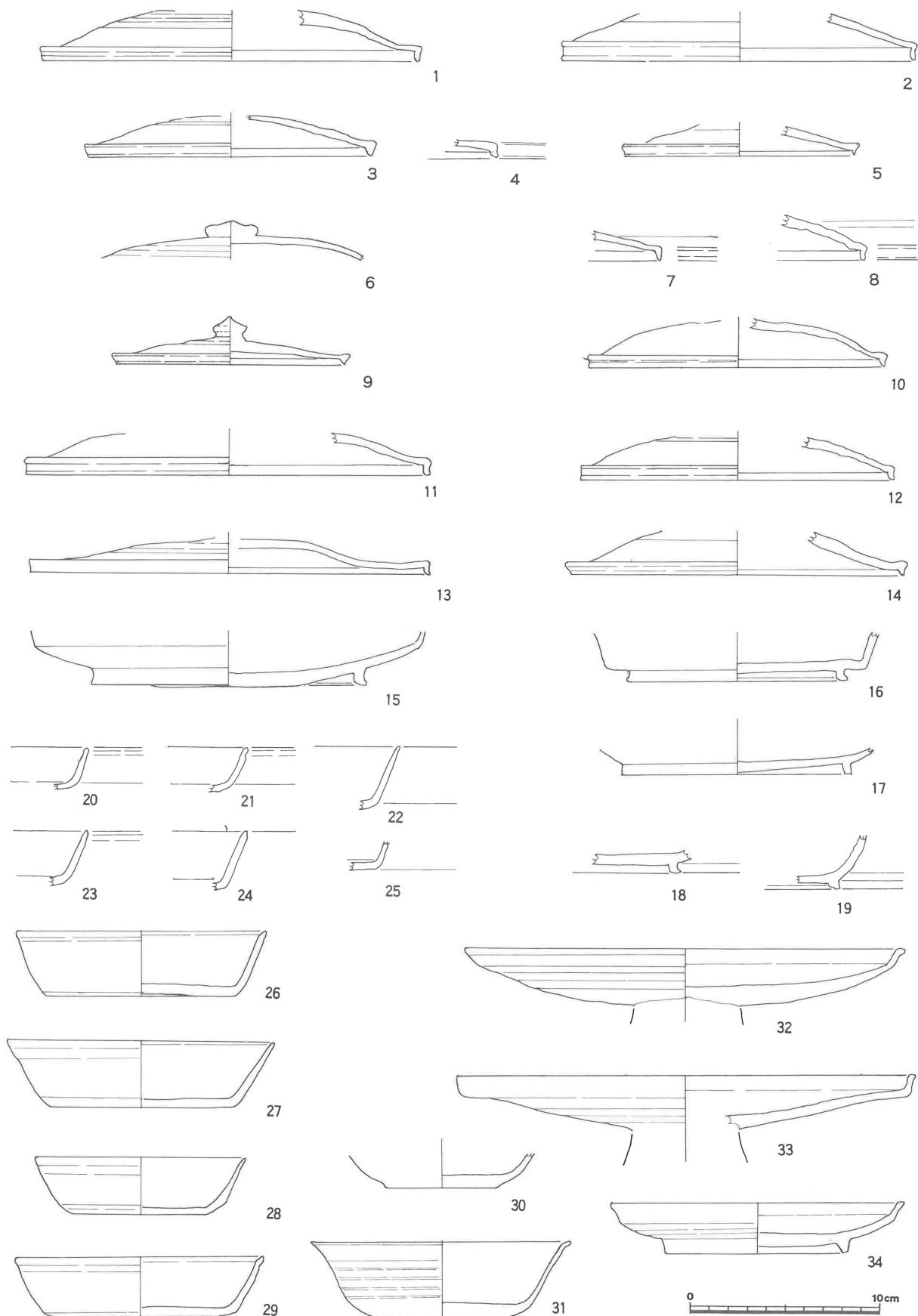
74は口径30.0cmを測り、出土した甕の中では最大である。口縁の幅は3.4cmで、口唇部を取りする。口縁部はくの字形口縁というよりも直角形に近く、17°ほど外上方にのびる。

(3) 平安朝瓷器

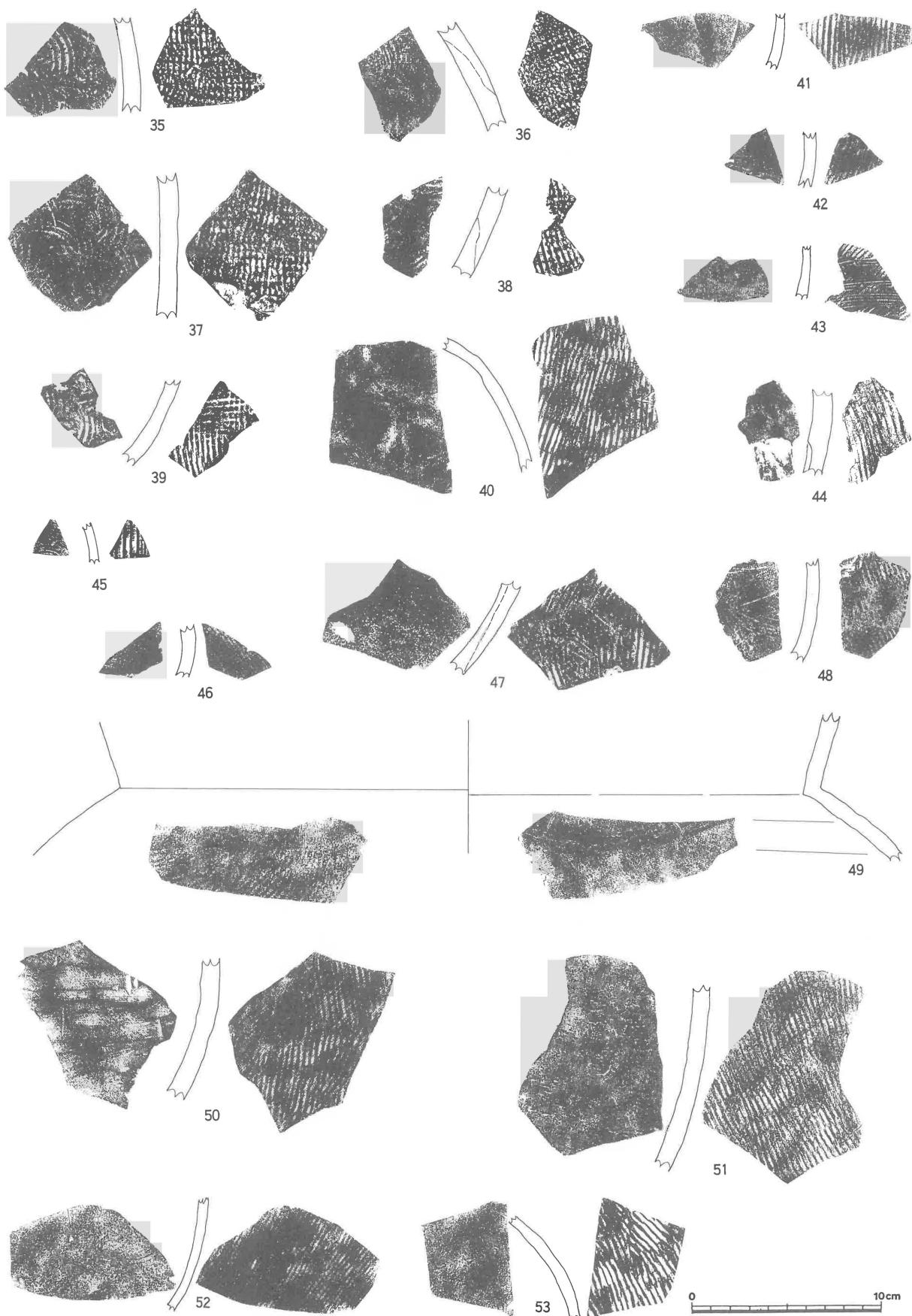
鉢（挿図第5の56） 半球形の胴部が緩く外反して口縁は外へ折り返す。口唇部を厚くして上に拡張し、口縁部内面は受け口状をなす。焼成不十分の製品である。藤並大沢B古窯址（註8）に類例を見る。

(4) 土製品

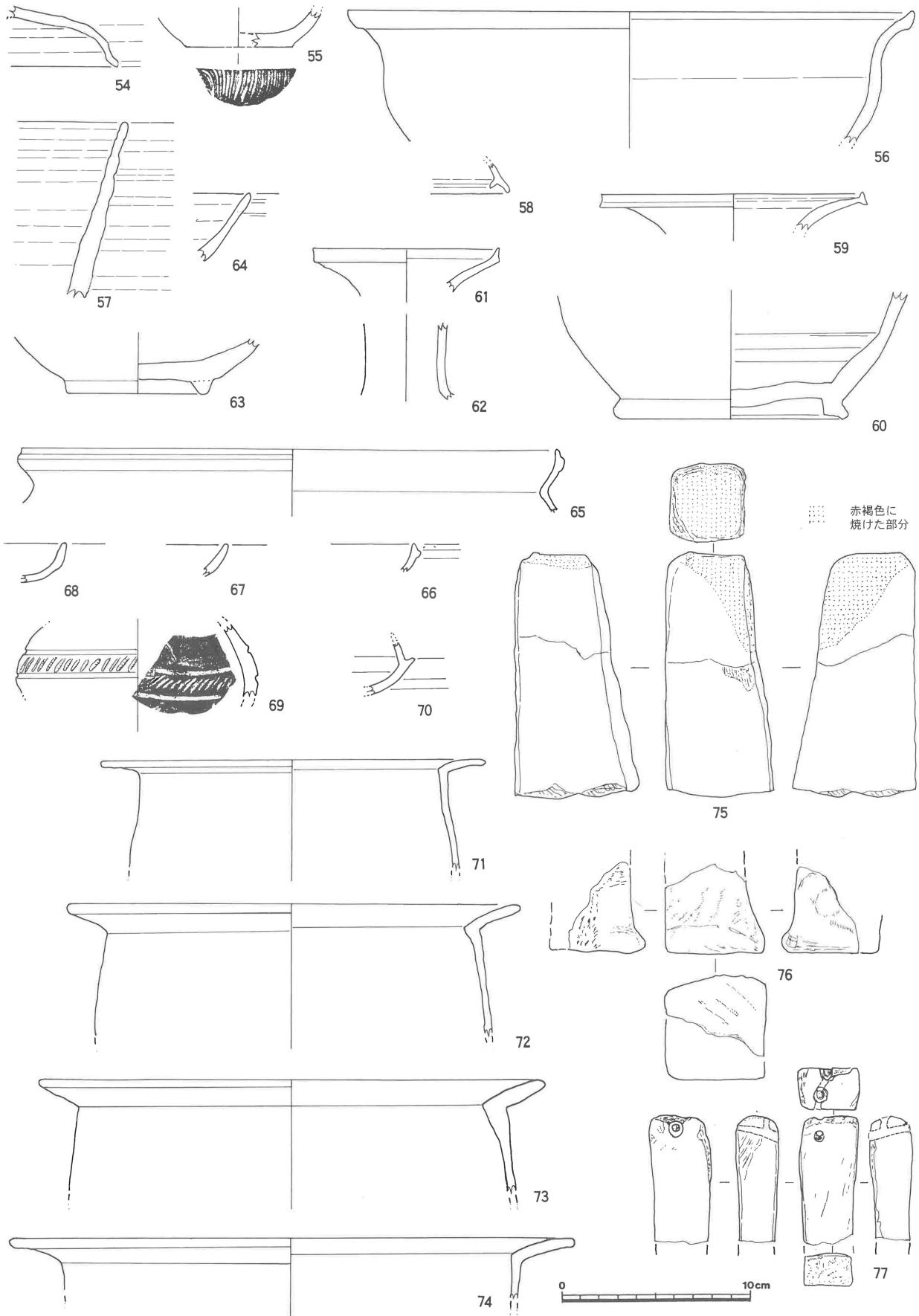
土製支脚（挿図第5の76） 76は土製支脚の底部の小片である。底部の一辺が5cmで、下部は押し潰されたように外方へはみ出している。現存する長さは5.5cmで、赤褐色に焼け締まっている。



挿図第7 見丁塚遺跡A地点 出土遺物実測図 (1)



挿図第8 見丁塚遺跡A地点 出土遺物実測図（2）



挿図第9 見丁塚遺跡A地点 出土遺物実測図 (3)

第3表 見丁塚遺跡A地点 出土遺物観察表

遺物番号	出土位置	出土層位	器種・器形	口径	底径	器高	残存度	胎土	焼成	色調	備考
1	?	?	須恵器 蓋	19.8	—	—	50	良	硬	灰白色	
2	?	?	須恵器 蓋	18.4	—	—	15	良	硬	灰白色	
3	?	?	須恵器 蓋	14.8	—	—	25	良	軟	青灰色	
4	?	?	須恵器 蓋	—	—	—	5	良	良	赤褐色	
5	?	?	須恵器 蓋	12.0	—	—	30	良	堅	灰褐色	器表面に他の器片が付着する
6	?	?	須恵器 蓋	16.2	—	—	35	良	軟	暗灰褐色	円盤形鉗
7	西区	2	須恵器 蓋	—	—	—	3	良	堅	青灰色	
8	東区	2	須恵器 蓋	—	—	—	5	良	堅	青灰色	
9	西区	2	須恵器 蓋	12.5	—	2.5	70	良	堅	灰白色	擬宝珠形鉗
10	西区	2	須恵器 蓋	15.4	—	—	15	良	堅	灰褐色	
11	西区	2	須恵器 蓋	21.2	—	—	10	良	軟	淡灰色	
12	西区	2	須恵器 蓋	16.4	—	—	5	良	堅	淡褐色	
13	東区	2	須恵器 蓋	21.0	—	—	10	良	堅	灰白色	
14	西区	2	須恵器 蓋	17.4	—	—	30	良	良	灰白色	
15	?	?	須恵器 盤	20.5	14.3	—	40	良	軟	暗灰褐色	
16	?	?	須恵器 坏	—	11.4	—	30	良	堅	暗灰白色	窯糞が付着する
17	?	?	須恵器 坏	—	12.0	—	10	良	良	暗灰白色	
18	?	?	須恵器 盤	—	—	—	5	良	堅	青灰色	
19	西区	1	須恵器 坏	—	—	—	5	良	堅	灰白色	
20	?	?	須恵器 坏	—	—	2.2	10	良	堅	青白色	
21	?	?	須恵器 坏	—	—	2.3	10	良	良	青灰色	
22	?	?	須恵器 坏	—	—	3.3	5	良	良	灰白色	
23	?	?	須恵器 坏	—	—	3.0	10	良	良	青白色	
24	?	?	須恵器 坏	—	—	3.1	10	良	堅	青白色	
25	?	?	須恵器 坏	—	—	—	5	良	堅	青灰色	
26	西区	2	須恵器 坏	13.1	10.1	3.4	60	良	堅	青墨色	
27	西区	2	須恵器 坏	14.0	9.4	3.5	25	良	堅	青白色	
28	西区	2	須恵器 坏	11.0	6.8	3.0	25	良	堅	青灰色	
29	西区	2	須恵器 坏	13.1	8.4	3.1	10	良	堅	青白色	
30	?	?	須恵器 塊	—	6.0	—	10	良	堅	青灰色	
31	東区	2	須恵器 塊	13.5	6.5	4.1	50	良	軟	灰白色	
32	西区	2	須恵器脚付盤	23.0	—	3.0	60	良	堅	青墨色	脚の接着痕あり
33	西区	2	須恵器脚付盤	24.6	—	3.3	35	良	軟	灰白色	同上
34	東区	2	須恵器 皿	15.1	9.5	2.7	25	良	堅	灰白色	
35	?	?	須恵器 甕	—	—	—	—	良	堅	青灰色	
36	?	?	須恵器 甕	—	—	—	—	良	堅	青灰色	
37	?	?	須恵器 甕	—	—	—	—	良	堅	青灰色	
38	?	?	須恵器 甕	—	—	—	—	良	堅	青灰色	
39	?	?	須恵器 甕	—	—	—	—	良	堅	青灰色	
40	?	?	須恵器 甕	—	—	—	—	良	堅	灰白色	

遺物番号	出土位置	出土層位	器種・器形	口径	底径	器高	残存度	胎土	焼成	色調	備考
4 1	?	?	須恵器 甕	—	—	—	—	良	堅	淡褐色	
4 2	?	?	須恵器 甕	—	—	—	—	良	堅	青灰色	
4 3	?	?	須恵器 甕	—	—	—	—	良	軟	灰白色	
4 4	?	?	須恵器 甕	—	—	—	—	良	堅	灰白色	
4 5	?	?	須恵器 甕	—	—	—	—	良	堅	青墨色	
4 6	?	?	須恵器 甕	—	—	—	—	良	堅	暗灰色	
4 7	西区	1	須恵器 甕	—	—	—	—	良	堅	灰白色	
4 8	東区	1	須恵器 甕	—	—	—	—	良	堅	灰白色	
4 9	西区	2	須恵器 甕	—	—	—	—	良	堅	灰白色	
5 0	西区	2	須恵器 甕	—	—	—	—	良	軟	灰白色	
5 1	東区	2	須恵器 甕	—	—	—	—	良	堅	灰白色	
5 2	西区	2	須恵器 甕	—	—	—	—	良	堅	灰白色	
5 3	東区	2	須恵器 甕	—	—	—	—	良	堅	淡黃灰色	
5 4	?	?	須恵器 蓋	—	—	—	5	良	軟	灰白色	
5 5	?	?	須恵器 塼	—	5.7	—	35	良	堅	青墨色	
5 6	?	?	瓷 器 鉢	30.0	—	—	5	良	軟	灰白色	
5 7	?	?	須恵器 鉢	—	—	—	5	良	軟	灰青色	
5 8	?	?	須恵器 蓋	—	—	—	5	良	堅	青灰色	
5 9	?	?	須恵器長頸壺	13.8	—	—	10	良	堅	灰白色	高台に窯糞
6 0	?	?	須恵器長頸壺	—	12.4	—	20	良	堅	淡黃青色	
6 1	西区	2	須恵器長頸壺	9.8	—	—	5	良	軟	灰白色	
6 2	東区	2	須恵器長頸壺	—	—	—	5	良	軟	灰白色	
6 3	西区	1	行基燒 碗	—	7.6	—	5	良	堅	灰白色	内底面に墨色
6 4	西区	1	行基燒 碗	—	—	—	2	良	堅	灰白色	
6 5	西区	1	土師器内耳鍋	28.2	—	—	5	良	堅	赤褐色	
6 6	西区	1	土師器内耳鍋	—	—	—	2	良	堅	赤褐色	
6 7	東区	1	土師器 かわらけ	—	—	—	5	良	堅	赤褐色	
6 8	東区	1	土師器 かわらけ	—	—	—	10	良	堅	赤褐色	
6 9	東区	2	須恵器 壺	—	—	—	5	良	堅	青灰色	縫または直口壺
7 0	東区	2	須恵器 坏	—	—	—	5	良	堅	青灰色	
7 1	?	?	須恵器 甕	20.3	—	—	10	良	良	淡紅色	
7 2	東区	2	須恵器 甕	24.0	—	—	15	良	良	淡黃褐色	
7 3	西区	2	須恵器 甕	27.0	—	—	20	良	良	暗灰褐色	
7 4	?	?	須恵器 甕	30.0	—	—	30	良	良	灰白色	
7 5	東区	2	土製支脚	中央径 5.0			60	良	良	赤褐色	
7 6	?	?	土製支脚	—			30	良	良	赤褐色	
7 7	西区	2	砥 石	長さ6.7×幅3.2×厚さ2.2			70	—	—	灰白色	擬灰岩製

第5節 小 結

豎穴状遺構－1 から出土した須恵器のなかで最も個体数の多い蓋坏の蓋は、擬宝珠形や円盤形の鉢をもち縁端部の身受けはほぼ直角に下方へ 0.7 cm 前後曲げられており、蓋にかえりのあるものはない。東三河地方のこの時期の須恵器の編年（第4表）に照らせば、第2期以降の製品であり、実年代では8世紀代のものとされている。この蓋は遺構内から8個体（7～14）出土し、工事中採集されたもの（1～6）を合わせると14個体となる。また、同遺構内から出土した坏についてみると、高台のある坏はなく、すべて高台をもたない平底の坏（26～29）であった。高台のある坏は同一地点から工事中採集されたもの（16・17）と耕作土中から出土したもの（19）を含めても3個体であるが、高台のない平底の坏は同一地点で工事中採集したもの（20～25）6個を加えると10個体となる。この高台のない平底の坏が盛んに焼成されるのは前記編年では第3期、実年代では8世紀後半からとされている。塊（31）、脚付盤（32・32）、皿（34）、長頸壺（61・62）の製造年代もほぼ同一時期と考えてよからう。土師器の甕（72・73）は緩いくの字状口縁をもつ甕で、8世紀代にその指標をもつものである。

その他工事中同一地点から出土した盤（15・18）、塊（30）、鉢（57）、長頸壺（59・61）もほぼ同じ時期と考えられるが、糸切り痕のある塊（55）はもう一時期年代の下がるものであろう。また、かえりのある蓋（58）は前代の遺物が混入したと思われる。

豎穴状遺構－1 の平面形は、歪んだ長方形に楕円形の張り出し部をもち、床面積（豎穴の下端で測定）はわずか 3.25 m² すなわち 1 坪である。その最も広い部分でも、東西 230 cm、南北 140 cm であって、ここを寝起きする日常の住居とすれば、大人 2 人が限度であろう。「伏盧の曲盧の内に直土にわら解き敷きて（万葉集 892）」と山上憶良が貧窮問答歌で詠んだのもこのような家かと思われる。

この小豎穴から出土した土製支脚、調査中確認された焼土塊（おそらく竈の一部をなしたものであろう）、炭化材、40点にもおよぶ須恵器、煮炊き用の4個の土師器の甕、砥石などは、この小豎穴が炊事を伴う食器や農具（鎌や鋤など）を収納する物置小屋的な施設であったことを物語っている。近くに一里山古窯址群という須恵器生産地をもつとはいえ、日常の什器として当時このように大量の須恵器が広く豊かに農村まで行き渡っていることは予想を越えたことであった。その須恵器のうち、少なくとも 7 個体はいわゆる焼成不良品と呼ばれるものであった。軟弱な生焼けの蓋（11）、鉢（57）、長頸壺（61・62）とか他の器物が融着した蓋（5）窯糞のついた長頸壺（60）や坏（16）などがそれである。また腰に下げて、いつでも鎌を研げる「鎌砥」と呼ばれる砥石が検出されたことは、この小豎穴の住人の出自を示唆しているといえよう。

豎穴状遺構－2 から出土した須恵器の坏は、この地方における古墳出土須恵器の第4型式（註9）の特徴をもち時期は6世紀末から7世紀初頭にかけてのものであり、ここにその時期生活が営まれていたことがわかった。

また耕作土層からの出土品ではあるが行基焼第2型式（註10）の碗（63）には墨色の痕が内底面にあり、鎌倉時代の地方社会の一端を示すほか、室町・戦国時代の内耳鍋、江戸時代のかわらけなど、歴代にわたる東脇・見丁塚地域の人々の生活の跡を残してくれた見丁塚遺跡A 地点は、規模は小なりと

いえどもその価値は大なりというべきであろう。

第4表 奈良朝須恵器編年の流れ

久永(1958)	田中(1966)	久永(1969)	芳賀(1971)	石川(1982)	森田(1982)
古墳文化様式	←	古墳時代須恵器 第5型式	←	第1期1段階 7世紀初頭	第1期 7世紀前半の新
奈良朝様式 第1型式	第1型式	奈良朝須恵器 第1期 7世紀後葉	第1期	第1期2段階	第2期 7世紀後半の古
過渡期	第2型式 前半	第2期 8世紀前葉	第2期	第1期3段階	第3期 7世紀後半の新
第2型式	第2型式 後半	第3期 8世紀中～8世紀後	第3期	第2期1段階 8世紀前半	第4期 8世紀前半
—	同 残存形態	第4期 9世紀前半	第4期	第2期2段階	かえりのある蓋の消滅
				第2期3段階	第5期 8世紀後～9世紀初
				第2期4段階 800年前後	第6期 9世紀中～10世紀

〈表の出典〉

久永春男「刈谷における古窯の分布とその製品について」『刈谷市の古窯』愛知県刈谷市市誌編纂委員会 1958

田中 稔「尾張・三河における奈良朝様式の須恵器の編年」『池浦古窯址』白菊古文化研究所 1966

久永春男「尾張・三河地方における古墳時代以後の須恵器」『乗鞍第1号窯址』白菊古文化研究所 1969

芳賀 陽「渥美半島基部における窯業製品の変遷」『渥美半島における古代・中世の窯業遺跡』田原町教育委員会 1971

石川明弘「一里山古窯址群」中田古窯址別刷 1982

森田勝三『渥美半島の須恵器窯』東海古文化研究所 1982

- 註1 森田勝三「豊橋・牟呂地区の遺跡概略第4号」『志香須賀第1号』牟呂町誌編纂委員会 1978
- 註2 「磯辺村誌」『豊橋市史第8巻』豊橋市 1979
これによると墓地として「字見丁塚 村ノ北方ニアリ、東西16間、南北16間 面積138坪」と記載されて
いるが、坪数は、256坪ではなかろうか。
- 註3 「東脇古墳」『牟呂史』のp.87～88 牟呂史編纂委員会 1996
- 註4 伊藤惠『水神古窯灰原』豊橋市教育委員会・牟呂地区遺跡調査会 1998
この報告書のp.33「天井部の回転ヘラ削り」
- 註5 石川明弘・小畠頼孝・芳賀陽・三辻利一『岩屋下古窯』豊橋市教育委員会 2000
- 註6 石川明弘『一里山古窯址群』中田古窯址別刷 1982
森田勝三『渥美半島の須恵器窯』東海古文化研究所 1982
- 註7 植崎彰一「猿投窯の編年について」、斎藤孝正「編年表」『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅲ）』愛知県教育
委員会 1983
- 註8 伊藤惠『豊橋市南部における平安朝瓷器古窯址群』東海古文化研究所 1979
- 註9 久永春男・斎藤嘉彦「三河における古墳出土須恵器の編年」『天神山古墳群』愛知県立岩津高等学校 1969
芳賀陽「東三河における古墳出土須恵器の編年」『二本松古墳群』愛知県営開拓パイロット事業石巻地区埋蔵
文化財調査団 1976
- 註10 久永春男・芳賀陽「渥美半島古窯址群出土行基焼の編年」『豊橋市大岩町北山古墳群・豊橋市植田町大膳古窯
址群』豊橋市教育委員会 1968

第3章 見丁塚遺跡F地点

第1節 位 置

東脇地区の南部と北部の中程を、東北から西南に向かって県道豊橋港線（みなと大通り）が走っている。この県道の「東脇東」信号交差点を西方に120m程進むと信号機のない五差路の交差点がある。遺跡はこの交差点の北東と北西とに二叉に分かれた道路沿い付近一帯にある。なお、北東に進む道はかつての牟呂往還である。現状は宅地、駐車場、店舗になっている。遺跡所在地は豊橋市東脇一丁目2番地の1付近一帯である。



挿図第10 見丁塚遺跡F地点の位置

(▲1 A地点、▲2 B地点、▲3 C地点、▲4 D地点、▲5 E地点、
▲6 G地点、▲7 H地点、▲8 I地点、▲9 J地点)

第2節 発掘調査の経過

1. 調査にいたる経過

昭和51（1976）年12月8日、東脇一丁目にある畠地が宅地造成のため、土取り工事が行われてることを知った。現場は、仲六酒造場の南隣で、牟呂街道（牟呂往還）沿いの西から東に向かって緩やかに傾斜する洪積台地縁端部にあたり、すでに東部と西部とが上下2段に削平整地されていた。東西の段差は高さ約40cmあり、その断面から奈良時代の土師器と須恵器を伴う竪穴状遺構が発見された。翌12月9日に遺跡の発見と破壊状況を豊橋市教育委員会と芳賀陽へ連絡した。

12月11日には、地主の藤井敏雄氏にも遺跡の発見を知らせ、発掘調査への協力をお願いした。

発掘調査区は、南北の長さ30m、東西の長さ17m、面積は510m²である。調査は昭和51年12月19日（日）から12月31日（金）の13日間を要した。

発掘調査は、日本考古学協会員の芳賀陽（豊橋市立南稜中学校教諭）を調査主任とし、牟呂町誌編纂委員会（会長 小林応三）が主体となり、町誌編纂事業のひとつとして実施した。

発掘調査員として住吉政浩（豊橋市立植田小学校教諭）、小畠頼孝（愛知大学生）、森田勝三（同朋大学生）が当たり、松井章泰、伊藤 忍（愛知大学生）、古田敏晴（名古屋電気通信工学院生）、伊藤秀紀（名古屋大学生）、柴原敬子（愛知大学短期大学部生）、石川明弘（三ヶ日高校生）、平山雅弘、杉元左智男（豊橋商業高校生）、鈴木利一（豊川高校生）、片桐成元、島 望、藤井英尚（羽田中学生）の各氏の参加協力を得て調査を行った。延べ参加人数は87名である。

2. 発掘調査日誌

12月19日（日） 晴れ

本日より発掘調査を開始する。調査区はすでに宅地造成のため、ブルドーザーにより表土層が20～40cm削平され、東部と西部とが上下2段に整地されていた。一応、東区と西区とに分け遺構の有無を確認するためにトレーニチとグリッドを隨時設定しながら調査を実施した。

調査区の東区にあたる下段地区はすでに地山まで削平され、遺構はほとんど削り取られていた。そのため西区の上段地区を主に調査を進めた。西区の南北のほぼ中央に、東西の長さ9m、幅1mのAトレーニチ、そしてこのAトレーニチの西方の北側にAトレーニチと直角に、南北の長さ14m、幅1mのBトレーニチを設定した。

Aトレーニチ東端に地山を掘り下げ東西に延びる溝状遺構を検出し、これを2号溝状遺構とした。そのためAトレーニチ東方の南隣に幅40cmの間壁を残し、長さ2×2mのAとBのグリッド、また、同じくAトレーニチ東方の北隣に幅20cmの間壁を残し、長さ3×3mのCグリッドを設け、この2号溝状遺構を追究した。Aグリッドの北壁断面にAトレーニチ東端から延びる同じ2号溝を認めた。この溝は西隣のBグリッドにも延びているようである。Aグリッド南壁断面にも地山を掘り下げた新しい溝状遺構を見出し、これを3号溝状遺構とした。この3号溝も西隣のBグリッドに延びており、埋積土にはハマグリの貝殻が混入していた。

Bトレンチでは、トレンチ南端から3～6mの間に地山を掘り込んだ黒色有機土層が認められ、この黒色有機土層の分布範囲を追究するためにBトレンチの西隣に拡張区を設けた。これによりこの黒色有機土層は竪穴住居址であることが確認できた。後日ここを第3号竪穴住居址とした。

東区では、削平された地山に2号溝状遺構ともう1条の溝状遺構（5号溝状遺構）の下底部が東西にわずかな厚さを残し検出できた。

12月20日（月）くもり

昨日に引き続き、遺構の確認をするためにBトレンチの東方4m、Cグリッドの北隣に南北の長さ9m、幅1mのCトレンチ、それにAトレンチ西方の南側にBトレンチと直交する南北の長さ10m、幅1mのDトレンチを設定した。

Cトレンチのほぼ中央に地山を掘り込んだ南北の長さ約4.5mの黒色有機土層を確認した。そのためCトレンチ東隣に接して南北の長さ5m、幅1mの拡張区、同じくCトレンチ西隣に幅40cmの間壁を残し南北6m、幅2mのDグリッドを設け、黒色有機土層の分布範囲を追究した。その結果、東拡張区の北東隅に竈らしい堅く赤い焼土面を見出した。この黒色有機土が竪穴住居址の埋積土であることが明らかになり、第2号竪穴住居址とした。

Dトレンチでは、トレンチ北側2m付近に昨日検出した3号溝状遺構の延長部を確認した。

AとBグリッドを南側へ1m拡張し、2号・3号溝状遺構を追究する。

Bトレンチでは、第3号竪穴住居址の南北の長さが明らかになり、竪穴の南隣に他の遺構があることが判明した。

12月21日（火）晴れ

2号溝状遺構と3号溝状遺構の長さを確認するために、Bグリッドの南側に南北の長さ6.5m、幅1mのEトレンチを設けた。そしてEトレンチの南方の西隣に大きさ3×3mのEグリッド、Dトレンチ北方の西隣にFグリッドを新たに設けた。

Bトレンチで確認された第3号竪穴住居址は、東側の約3分の2が確認できたが、西側の約3分の1は調査区外の西方へ延びていることが明らかになった。なお、竪穴の北壁に竈と考えられる焼土を認めた。

12月22日（水）くもりのち雨

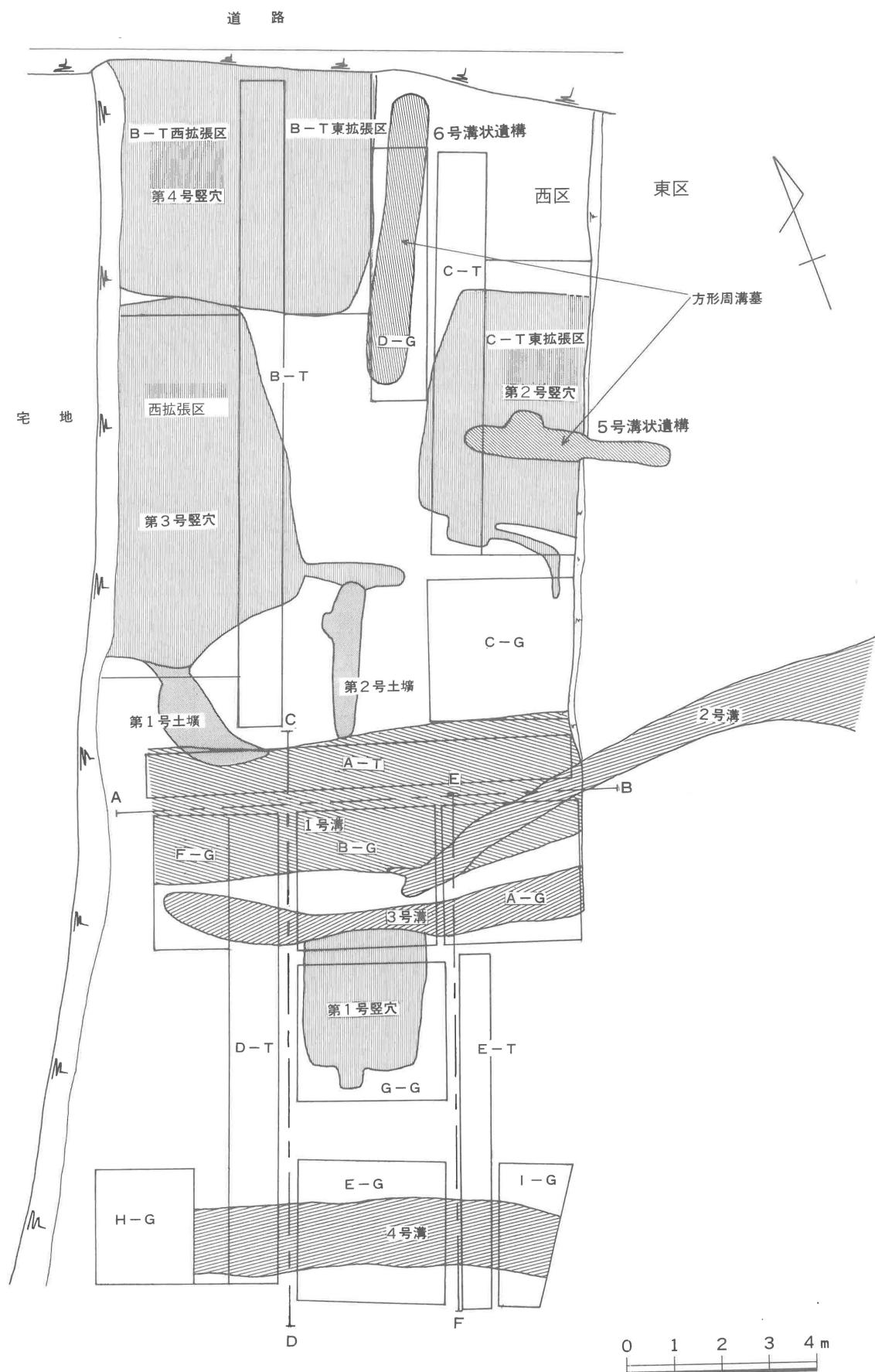
3号溝状遺構はFグリッド内で、西端部が明らかになった。埋積土は、暗黒色有機土層であった。遺物は須恵器・土師器・陶器の破片が出土した。

Bグリッドでは、2号溝状遺構の西端部が明らかになった。この西端部は二叉状になり、床面に河原石が数個点在していた。

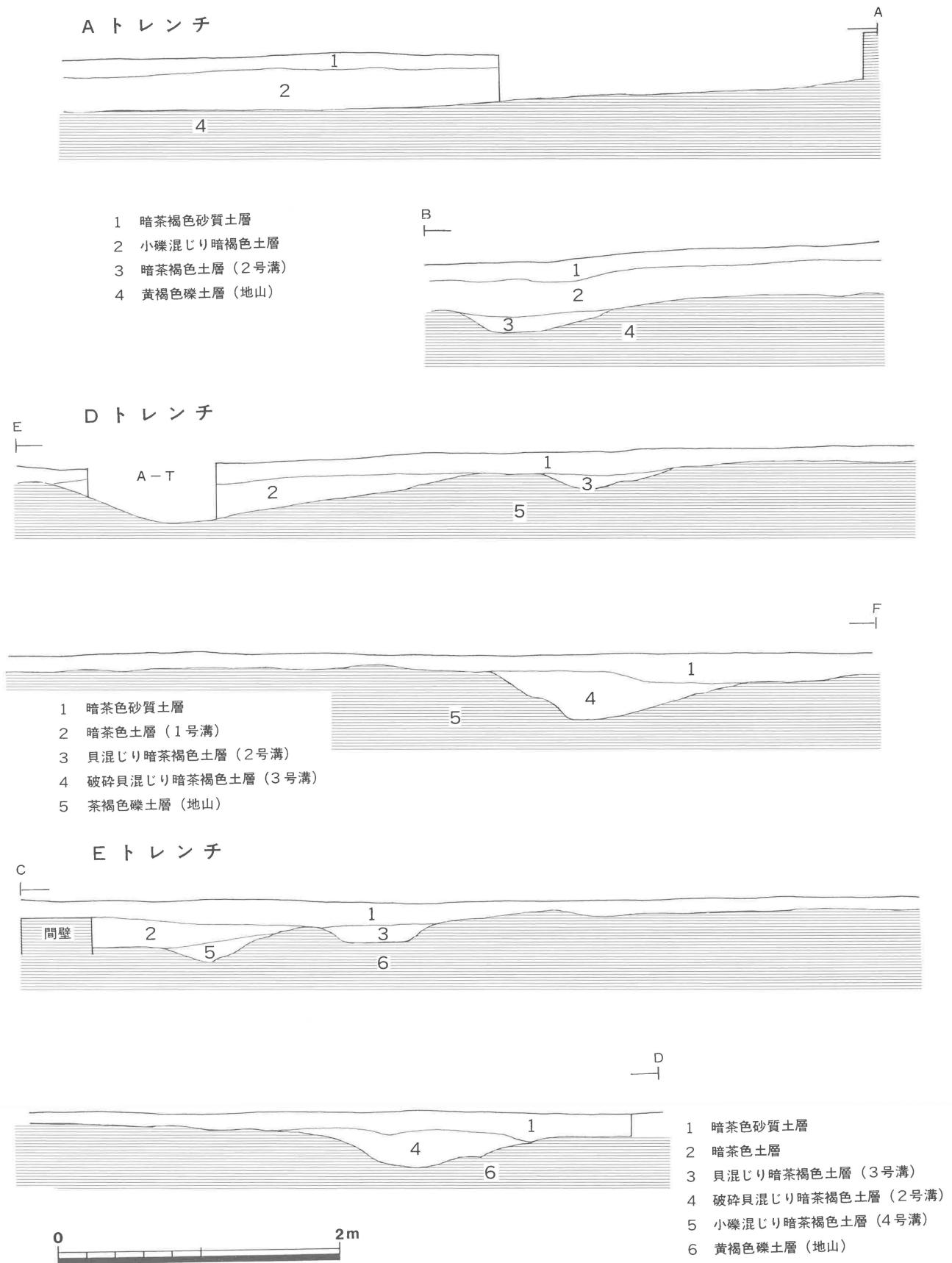
Bグリッドの南隣にDトレンチとEトレンチの間に、大きさ2.0×2.5mのGグリッドを設定した。Bグリッドからは東西の長さ2.4m、南北の長さ2mで、柱穴1個と竈がある住居址が確認された。これを第1号竪穴住居址とした。

12月23日（水）晴れのちくもり

調査区の南端に見出された4号溝状遺構の長さを確認するため、Eトレンチ南方の東隣に東西の長



挿図第11 見丁塚遺跡F地点 トレンチおよびグリッド配置図



挿図第12 見丁塚遺跡F地点 A・D・Eトレンチの断面図

さ1.5m、南北の長さ2.3mのIグリッド、Dトレーナー南方の西隣にHグリッドを設定した。

第2号竪穴住居址の平面形プランと床面を追究した。竪穴住居址は西側の約3分の2が遺存していたが、東側はすでに削平され確認できなかった。平面形はおそらく隅の円い方形と考えられる。

第3号竪穴住居址の北壁の中央部に検出された竈を再確認し、この竪穴住居址の南半分に4本の柱穴を見出した。また、南壁に切り込んでいる遺構を確認した。

東区の下部地区にわずかに認められた5号溝状遺構を追究すると、幅80cm、深さ35cmで西方の第2号竪穴住居址の方へ延びていた。溝内に弥生時代の壺形土器を見出したため、この5号溝の調査は、第2号竪穴住居址の調査を終え、改めて調査することとし、一応溝を埋め戻した。

12月24日（金）くもり時々雨

Dグリッドの南側に南北に延びる6号溝状遺構を掘り拡げる一方で、第2号竪穴住居址内に残されていた南北の間壁を取り除き、柱穴の検出を行った。その結果、柱穴を2個検出した。

Aトレーナー南側にある間壁を取り除き、2号溝状遺構の東端を確認するため東区にわずかの深さで残存していた溝の一部を掘り下げた。22日の調査では長さが9mであったのが11mとなり、東端部では幅が1.8m、深さが70cmとなつた。

Bトレーナー北側とその東と西の拡張区に見出されている暗黒色有機土層を追究すると、平面の広さが東西の長さ5.5m、南北の長さ5mの方形状に認められた。この暗黒色有機土層の深さを確認するため東西南北に幅40cmの十字トレーナーを設けた。

第1号竪穴住居址の北側の柱穴を検出した。この北側の柱穴は後代に造られた3号溝状遺構により上部が壊されていた。竪穴内の床面付近の埋積土中から出土した古墳時代の土師器の高杯の脚部と、床面上から出土した甕の胴部片の出土状態を写真撮影した。

12月25日（土）雨のち晴れ

午前中は雨のため作業を中止した。午後雨の上がるのを待って作業を開始する。雨のために遺構中に雨水がたまり、バケツでこれをかい出し作業を始めた。昨日に引き続きBトレーナー北側の暗黒色有機土層の遺構を追究する。

DとEトレーナーの東壁面の断面図を作成し、測図後、両トレーナー東側の間壁を取り除いた。

第2号竪穴住居址の床面清掃と柱穴の確認を行った。

12月26日（日）晴れ時々くもり

昨日に引き続き、第2号竪穴住居址の精査を行う。壁面沿いをめぐる壁溝が南側で竪穴外へ出ていることが確認でき、竈は耕作により上部が削り取られ、下部の一部が残っていることが明らかになった。

第3号竪穴住居址の竈と1号溝状遺構の精査を行った。

第2号竪穴住居址の遺物出土状況を写真撮影する。

午後より第3号竪穴住居址の平面形と、この竪穴住居址の南側で検出した不定形の第1号土壙状遺構を再確認した。

12月27日（月）晴れ時々くもり

第3号竪穴住居址の東南1mに南北に延びる暗黒色有機土層を確認した。この暗黒色有機土は南北

の長さ 3.2 m で第 2 号土壙状遺構とした。この土壙の北端に接するように、東西の長さ 2.6 m、幅 30 cm、深さ 15 cm の第 3 号竪穴住居址の壁溝から延びた溝状遺構を確認した。遺物は、第 2 号土壙状遺構の埋積土中から縄文時代晚期の水神平式土器と思われる破片が 1 点出土している。

第 1 号竪穴住居址の平面図を作成する。

第 2 号竪穴住居址の発掘を終え、第 2 号竪穴住居址の下部にある 5 号溝状遺構を検出する。23 日に確認した溝のほぼ中央部にある壺形土器を掘り上げにかかった。土器は 1 個体であることがわかった。

24 日から調査していた、B トレンチ北側の黒色有機土層は竪穴住居址の埋積土であることが確認できたため、第 4 号竪穴住居址とした。竪穴の北側と西側は調査区外に延びており正確な平面形は確認できなかった。

12月28日（火） 晴れ

昨日に引き続き、5号溝状遺構を掘り下げ、溝内の中央部に認められた壺形土器を掘り上げた。この壺形土器は出土状態から壺棺ではないかと考えた。第 4 号竪穴住居址の床面と柱穴を追究する。

午後より、第 2 号竪穴住居址と 5 号溝状遺構の平面図と断面図を作成した。第 3 号竪穴住居址は、第 4 号竪穴住居址の南壁中央部に切り込んでおり、柱穴を 2 個検出した。

12月29日（水） 晴れ

5号溝状遺構と昨日掘り上げた壺形土器の平面図と断面図、第 1 号竪穴住居址の断面図を作成し、次に第 2 号土壙状遺構と 6 号溝状遺構の平面図と断面図を作成する。

調査は、夜の午後 7 時までかかり、暗くて図面の方眼が見えないため、オートバイのライトを照らし測図を行った。

12月30日（木） 晴れ

調査区全体の平面図を 1 : 50 の縮尺で平板測量しながら、写真撮影も同時に行つた。

第 3 号竪穴住居址と第 4 号竪穴住居址の最終確認を行つた。第 3 号竪穴住居址は、北東コーナーに貯蔵穴が検出され、その床面から第 5 型式の須恵器の壺蓋が 3 点少しづつ重なった状態で出土した。北壁の中央部において竈が西側の調査区外に半分かかる状態で見出された。

第 3 号竪穴住居址の精査を行い、写真撮影も行つた。第 2 号竪穴住居址と第 3 号竪穴住居址の竈の再検討を行つた。

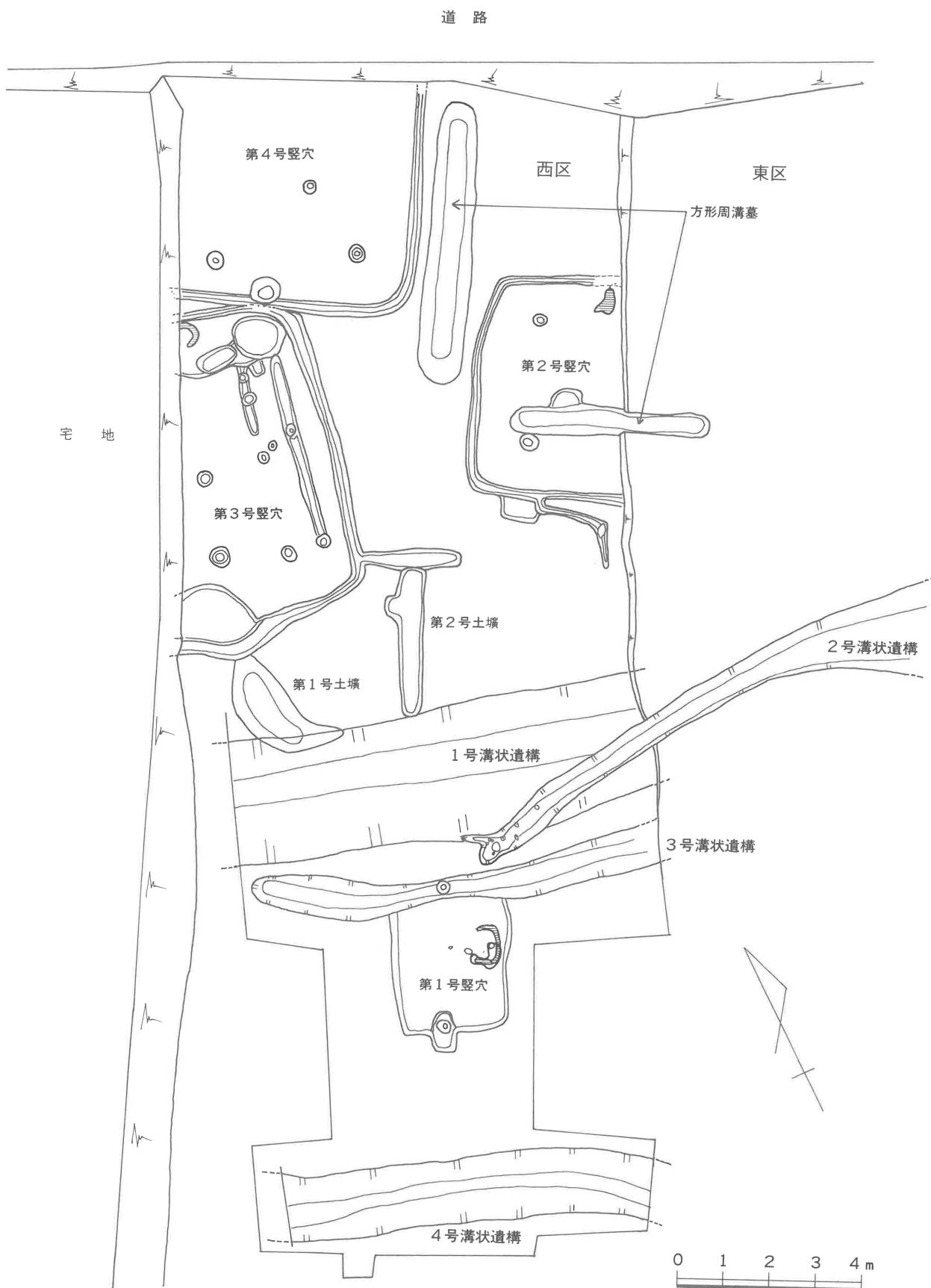
発掘調査は明日で終わるため、調査区の南側に東西に延びる 4 号溝状遺構の埋め戻しを行つた。

5 号溝状遺構と 6 号溝状遺構は、溝の大きさやその位置から推して方形周溝墓と考えられる。5 号溝状遺構内から出土した壺形土器は、壺棺ではなく供獻用の土器と考えられる。

12月31日（金） 晴れ

発掘調査は今日が最終日である。昨日に引き続き、調査区全体の平面図を平板測量で行つた。

第 3 号竪穴住居址と第 4 号竪穴住居址の精査と、平面図と断面図の作成および写真撮影を行つた。この測図作業と同時にブルドーザーで遺構の埋め戻しを進めたが、ブルドーザーでは埋め戻しが出来ない部分があり、夜の午後 9 時まで参加者全員が人力で作業を行い、すべての発掘調査を終了した。



挿図第13 見丁塚遺跡F地点 調査区の遺構配置図

第3節 遺構と遺物

調査区は、すでに重機により上部層の土砂が20～40cm程取り除かれていた。一部には遺構の表面が露出したものもあった。標高は、現地上面で西区上段4.41m、東区下段で3.89mを測る。

調査は、A・B・C・D・Eの5本のトレンチとA・B・C・D・E・F・G・H・Iの9か所のグリッド、それにトレンチに拡張区を隨時設けて進めた（挿図第11）。

層序は、上部が削平されているため、第1層は暗茶色砂質土層、第2層は暗茶色土層（遺構部）、第3層は黄褐色礫土層（地山）の3層に大きく分かれる（挿図第12）。

遺構は、方形周溝墓1基、竪穴住居址4軒、土壙状遺構2基、溝状遺構4条が検出できた（挿図第13）。

1. 方形周溝墓

（1）遺構（挿図第14、図版第17）

調査区の北側の東西方向の中程に位置する。

四方に周溝をめぐらし、四隅が切れる方形周溝墓である。南溝と西溝の2条が確認できたが、東溝と北溝はすでに削平され検出することはできなかった。西溝の長軸方向はN-28°-Eを測る。

南溝は、第2号竪穴住居址の下部に見出され、このことから竪穴を造る際に方形周溝墓の上部が数10cm程取り除かれていることが考えられる。封土および主体部もこの竪穴を作る際に壊されたと考えてよからう。

方形周溝墓の規模は、現存する2条の溝の外側で推定8.5mを測る。南溝の長さは上端で4.3m、下端で3.92m、幅は上端で67cm、下端で30～40cm、深さは第2号竪穴住居址の床面から38～42cmを測る。なお、これに竪穴住居址の深さを加えると最も深い所で60cm弱となる。溝の内側の西寄りに東西の長さ下端で90cm、南北の長さ同じく下端で35cm、深さ18cmの半円形のテラス状の掘り込み遺構を見出した。

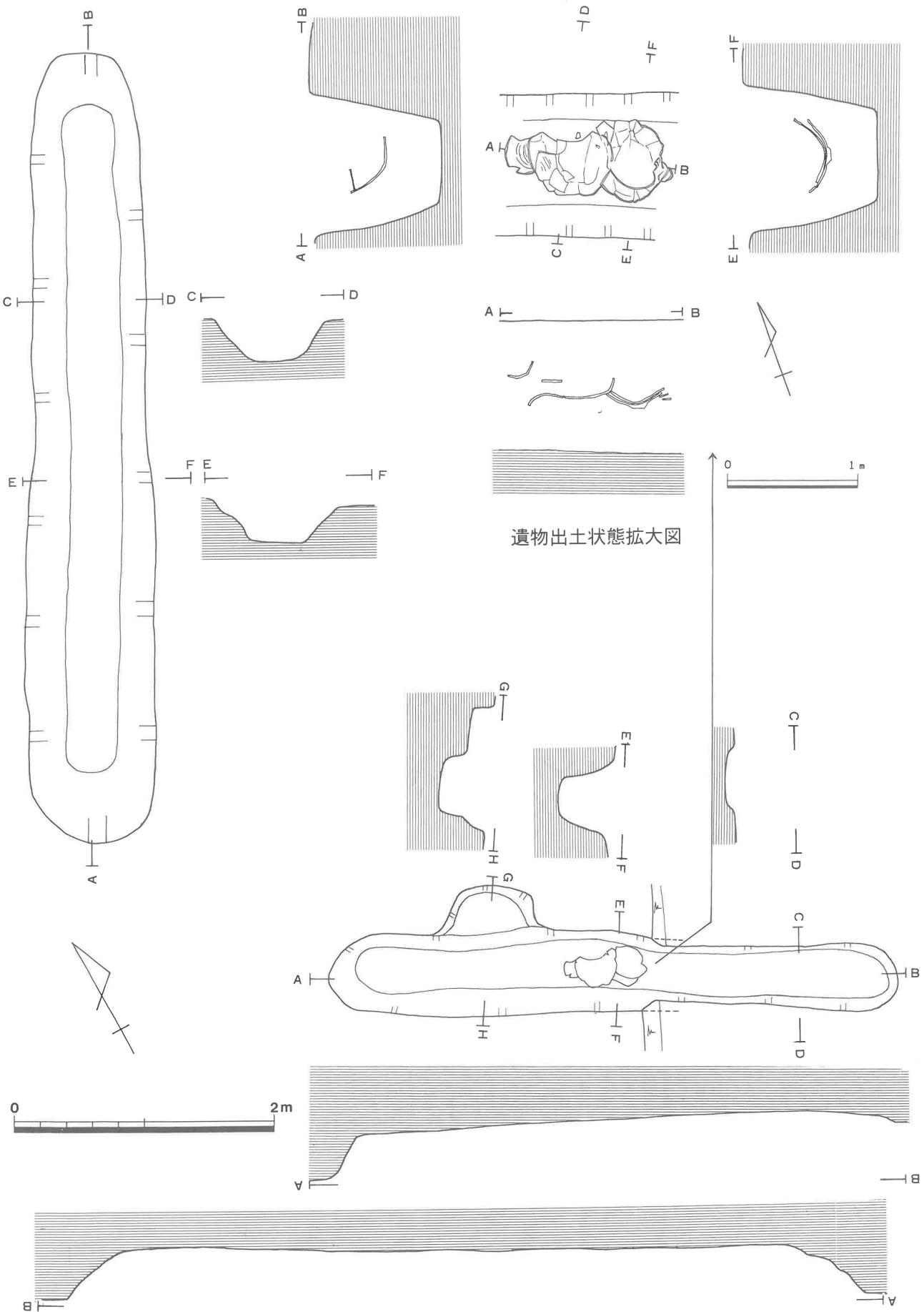
西溝の長さは上端で6.15m、下端で5.22m、幅は上端で84～1.03cm、下端で38～44cm、深さは30～40cmを測る。溝内の埋積土は、茶褐色土層である。

遺物は、南溝の中央部に弥生時代の壺形土器が溝底面から17cm程の高さに、西方に口縁部を向け横たわり潰れた状態で1個体分が出土した。西溝からも小破片であるが弥生時代の土器が出土している。

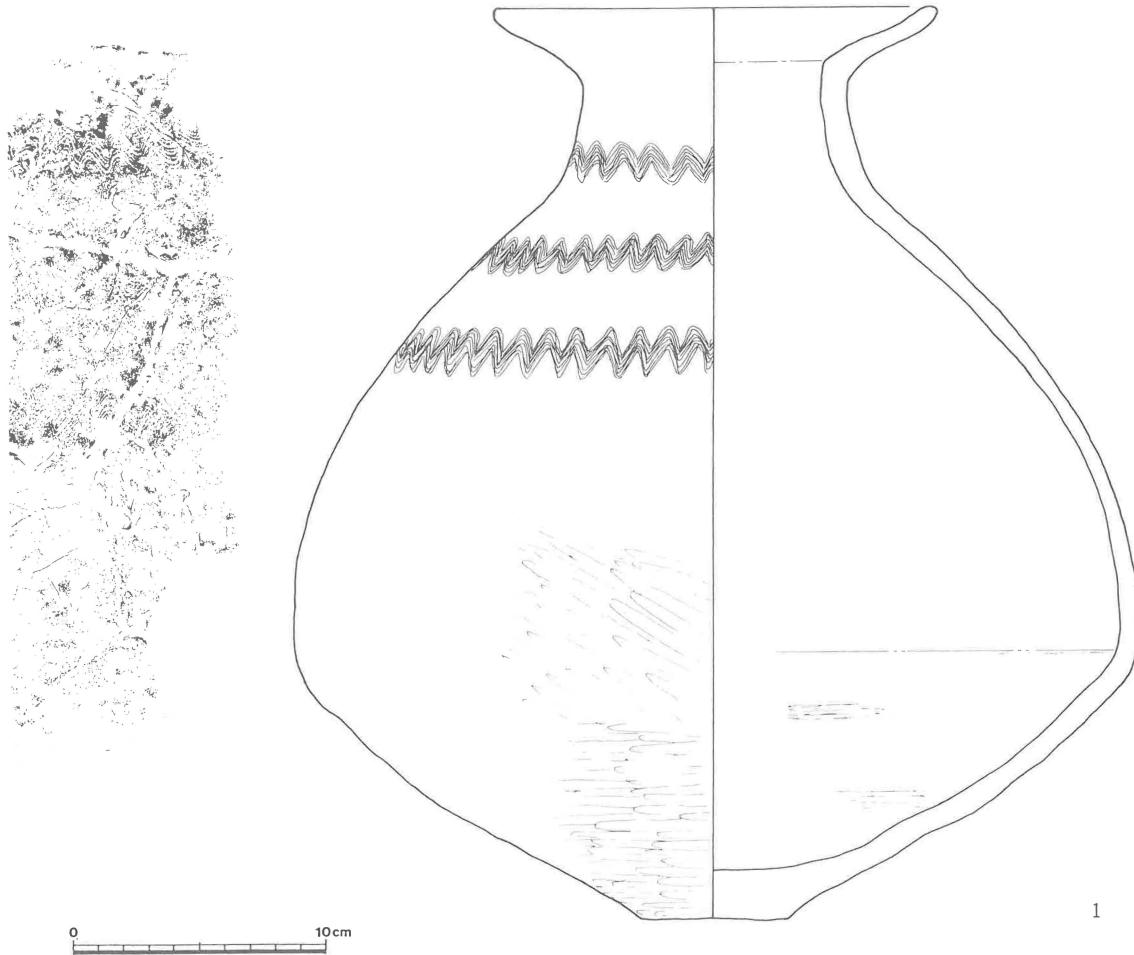
（2）遺物（挿図第15、図版第23、第7表）

壺形土器 1は口辺部の約3分の2と胴部中程のほとんどが欠損している。口径は推定復元17.4cm、高さ推定復元46.8cm、最大胴部径33cm、底径5.8cmを測る。頸部は口辺部に向かうにしたがって太さがやや細くなる。口辺部は強く外方へ屈折し、口縁部がわずかに内彎気味に開き、口唇は丸くつくってある。胴部は下膨れでやや角張って屈折するような形をしている。表面は右下がりや横位に範撫でが施され、頸部から胴部の肩にかけては、7条一組の櫛描き波文を3cm幅で3段めぐらしている。内面は表面が全体に薄く剥がれており、わずかに横位の刷毛目痕が見られるだけである。

なお、土器の口辺部の打ち欠きおよび胴部穿孔の有無は、破損部の風化により明らかにできなかつた。



挿図第14 見丁塚遺跡F地点 方形周溝墓の平面図・断面図



挿図第15 見丁塚遺跡F地点 方形周溝墓出土遺物実測図

(3) まとめ

壺形土器は南溝内で、溝底面から17cm程の高さから出土した。これは方形周溝墓が造られ、ある程度流れ土がたまるほどの時間をおいて埋納されたものであろうか。

壺形土器は、この地方の弥生式土器編年の下長山式土器（註1）に比定できる。時期は弥生時代中期中葉の新しい段階と考えられる。方形周溝墓が営まれた時期は、土器と同じ時代と考えてよからう。

2. 第1号堅穴住居址

(1) 遺構（挿図第16、図版第18）

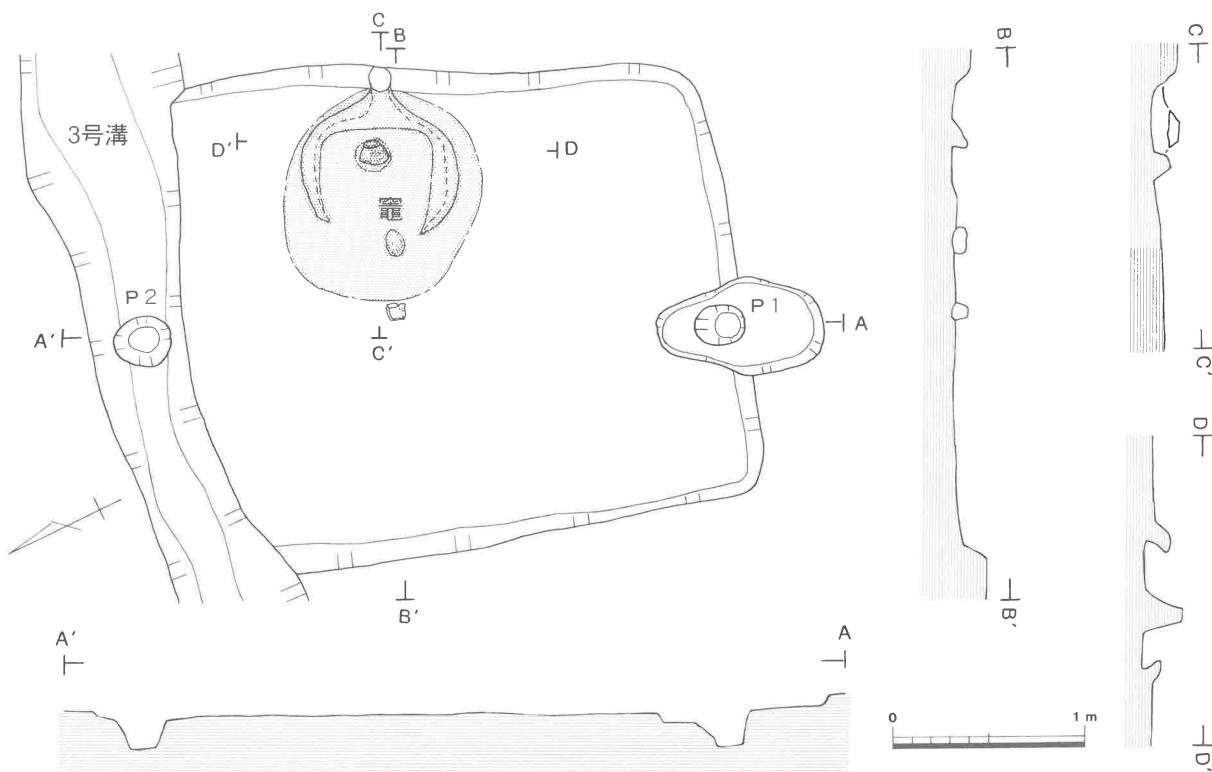
第1号堅穴住居址は発掘区の南方寄りに位置し、南側約3mには4号溝状遺構があり、北側には3号溝状遺構がある。

堅穴の北壁および左右コーナーは3号溝状遺構によって掘りとられている。堅穴の平面形は3号溝状遺構によって掘りとられた部分に柱穴が認められ、これに対応する柱穴が南壁の部分に認められることから推定して、北側でわずかに張り出したやや隅の円い長方形を呈するようである。長軸の方向はN-30°-Eである。

規模は南北推定長さが壁の上場で約3.2m、床面の長さは約3.1mを測る。東西の長さは壁の上場で2.35～2.65mを測り、床面の長さは2.2～2.4mである。壁高は東壁で深さ10cm、西壁で深さ15cm、南壁で深さ8cm、北壁は不明である。壁溝は検出できなかった。床面積は約7.5m²と推定する。

柱穴は竪穴の長軸線上の壁の位置に2か所掘られている。南側のP1は長径25cm、短径20cm、床面からの深さ20cmである。この柱穴と同位置に段掘りがなされ、竪穴から屋外に張り出した土壙状の広がりが存在した。平面形は竪穴外で幅をもつ洋梨形を呈し、長軸の長さは90cm、幅は50cm、床面からの深さは5cmであった。これは入口的な付属施設とも考えられる。北側のP2は残存する面での長径30cm、短径25cm、深さ18cmを測った。P1とP2の柱穴の間隔は3.07mである。なお、屋外に柱穴は認められなかった。

竪穴東壁の中央には竈が造り付けられている。竈の平面形は胴がやや膨らみをもつ正方形である。



挿図第16 見丁塚遺跡F地点 第1号竪穴住居址の平面図・断面図



挿図第17 見丁塚遺跡F地点 第1号竪穴住居址出土遺物実測図

幅は70cmで焚口から煙道部までの長さは60cmであった。竈の残存する高さは14cmである。煙道部の残存する長さは21cmであり、徐々に幅を減じながら東壁に沿って立ち上がり、先端は直径6cmの円形をなす。中軸線の中心よりやや奥に造り付けの支脚が存した。燃焼室床面で直径20cm、高さ20cm、残存する上端で直径8cmであった。形状は円錐台形を呈し、堅く焼き締まっていた。また、竈を取り囲むように直径1mの範囲で床面が赤く焼けていた。焚口手前には直径15cmの石が置かれ40cm離れて直径10cmの石が置かれていた。竈に附属したものと考えられる。

(2) 遺物 (挿図第17の2・3、図版第16、第7表)

豎穴の床面からは、台付甕の下胴部と考えられる土師器片が1点のみ出土した(2)。内外面ともに斜位の条痕が認められる。色調は茶褐色で、胎土中に金雲母を含み焼成は良好である。

床面に極めて近い覆土中から、土師器の高坏脚部(3)が横転した状態で出土した。坏部の接合部から脚端に向かい朝顔形に開く器形を呈している。外面はハケメ調整を施したのちにナデ調整を加えている。内面の脚部上半には横方向のヘラケズリを行い、裾部ではナデ調整を加えている。この境目で明確な稜をつくる。色調は黄褐色で胎土中に金雲母を含む。焼成は良好である。

豎穴を覆う暗茶褐色土層からは、平安朝瓷器の碗・甕および、土師器のいわゆる清郷形鍋が出土した。いずれも小片で図示できなかった。

(3) まとめ

本豎穴は、長軸方向に2本の主柱をもつ隅の円い長方形を呈した小型豎穴であった。内部には竈をもち、その周囲の焼土面は造設の際に床面を焼いて湿気抜きをしたものとも考えられる。また、竈が東壁に設けられていたことについては、当地方の冬場に三河湾を渡り西風が吹き付ける。このため当豎穴もこの風を除けるように入口と考えられる施設を南向きに、竈の煙出しを東側に設けたものと考える。豎穴の入口、竈の施設を除いた面積から考えて多人数の居住は困難であり、1~2名が居住した小規模な住居と考えたい。

豎穴の床面近くから出土した土師器の高坏は、5世紀代の青山式である(註2)。床面に接して出土した台付甕からは明確な時期を知ることはできないが、前述の高坏が豎穴が廃棄されてから間もない時期に流入したものとすれば、この豎穴の営まれた時期は青山式より若干遡ったころと推定できる。覆土中から出土した平安時代の遺物は、豎穴の埋没時期を示すものであろう。

3. 第2号豎穴住居址

(1) 遺構 (挿図第18、図版第19)

調査区の南北の中央北寄り、東西の中程に位置する。

豎穴の東側半分はすでに壊されているが、平面形を推定復元するとほぼ正方形に近く、わずかに隅の円い方形であろう。規模は南北の長さが壁上端で4.8~5.0m、床面で壁溝を含め4.75~4.85m、東西の長さは現状で2.8~3.55m、深さは現状で5~15cmを測る。面積は現状で約18m²である。

豎穴の上部は後代の攪乱を受けて削平されたものと考えられ、築造当時の豎穴の深さは少なくとも20~30cmはあったと考えたい。主軸方向はN-29°-Eを測る。

壁溝はほぼ四方の壁面沿いにめぐっている。幅は5～15cm、深さは床面から4～6cmを測る。この壁溝は、北壁の西壁から1.6mの位置で竪穴内から外へ30cm程北方に延び、東方へ曲がり1.4m進み、そこでまた北方に曲がり1.0m程延びて終わる。排水溝とも考えられる。

柱穴は竪穴内に2個検出できた。P1は北壁から1.15m、西壁から1.25mの位置にあり、直径は35×40cm、深さは床面から27cmを測る。P2は南壁から1.8m、西壁から1.2mの位置にあり、直径は23×25cm、深さは床面から22cmを測る。この2つの柱穴の間隔はその柱穴の中心で2.8mを測り、いずれもその位置から主柱と考えてよからう。

竈は北壁のほぼ中央部に西側約半分が確認できた。上部はすでに削平され、床面に近い基部が南北55cm、東西10～35cm、深さはわずか1～2cmが残っていた。東隣には赤褐色に焼けた焼土が広がっている。

床面は、ほぼ平坦に造られている。

南壁の西寄り外側に、東西の長さ1.0～1.2m、南北の長さ0.4m、深さ10～15cmの長方形のテラス状遺構を検出した。竪穴の外部にあり南側に位置し、この遺構の東隣には排水溝と考えられる施設があることから、出入口の関係する遺構とも考えられる。

北壁の壁溝内から上半分が欠損した広口短頸壺が、割れた状態で出土した。壺は西壁から0.8m、北壁から1.5mの位置に上を向いてほぼ完形で出土した。

(2) 遺物 (挿図第19、図版第23、第7表)

竪穴住居址の埋積土と床面から出土したものとに大別できる。

① 埋積土からの出土遺物

ア. 土師器 (4～7)

甕 (4～6) 口頸部はくの字にやや外反り気味に開く。形態により2種類に分かれる。

A類 (4) 口辺部は口唇部に向かうにしたがって器壁がやや薄くなり、口唇がやや尖がり気味である。

B類 (5・6) 口頸部から口唇部に向かうにしたがって器壁がやや薄くなり、口唇外面を角張らせ口唇上端をわずかに拡張している。

甌 (7) 口辺部の小破片である。口唇は丸めてあり、内面には左下がり範撫で痕が見られる。

イ. 須恵器 (8～12)

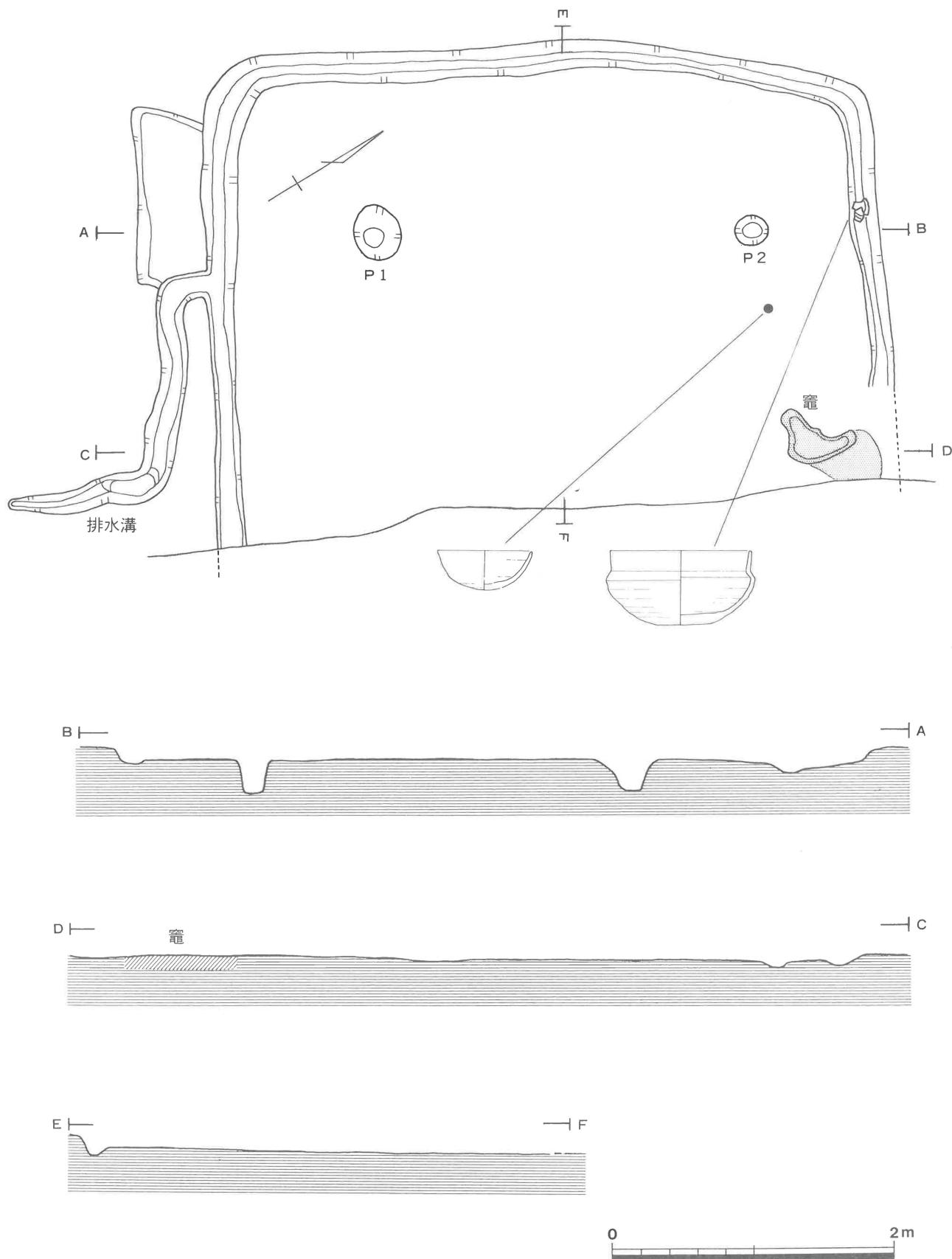
坏蓋 (8) 頂部と口唇部を欠く。頂部は丸みをもち、頂部と口縁部との境にわずかな段がつく。

坏身 (9・10) 9は底部を欠く浅い半球形の器形で、立ち上がりの幅は1cm、内傾角度は45度を測る。10は立ち上がりと坏底部を欠く半球形の器形で、器壁の厚さが9の4mmに比べ8mmと倍の厚さにつくってある。

小形偏平広口壺 (11) 下胴部を欠く偏平な胴部に、口径が大きく直立した口頸部がつく。口唇は角張り、口唇部の内側に段をつくる。口頸部と胴部との境に1条の沈線をめぐらす。

壺 (12) おそらく胴部の小破片であろう。表面に細い書き目文が施されている。

ウ. 行基焼 (13)

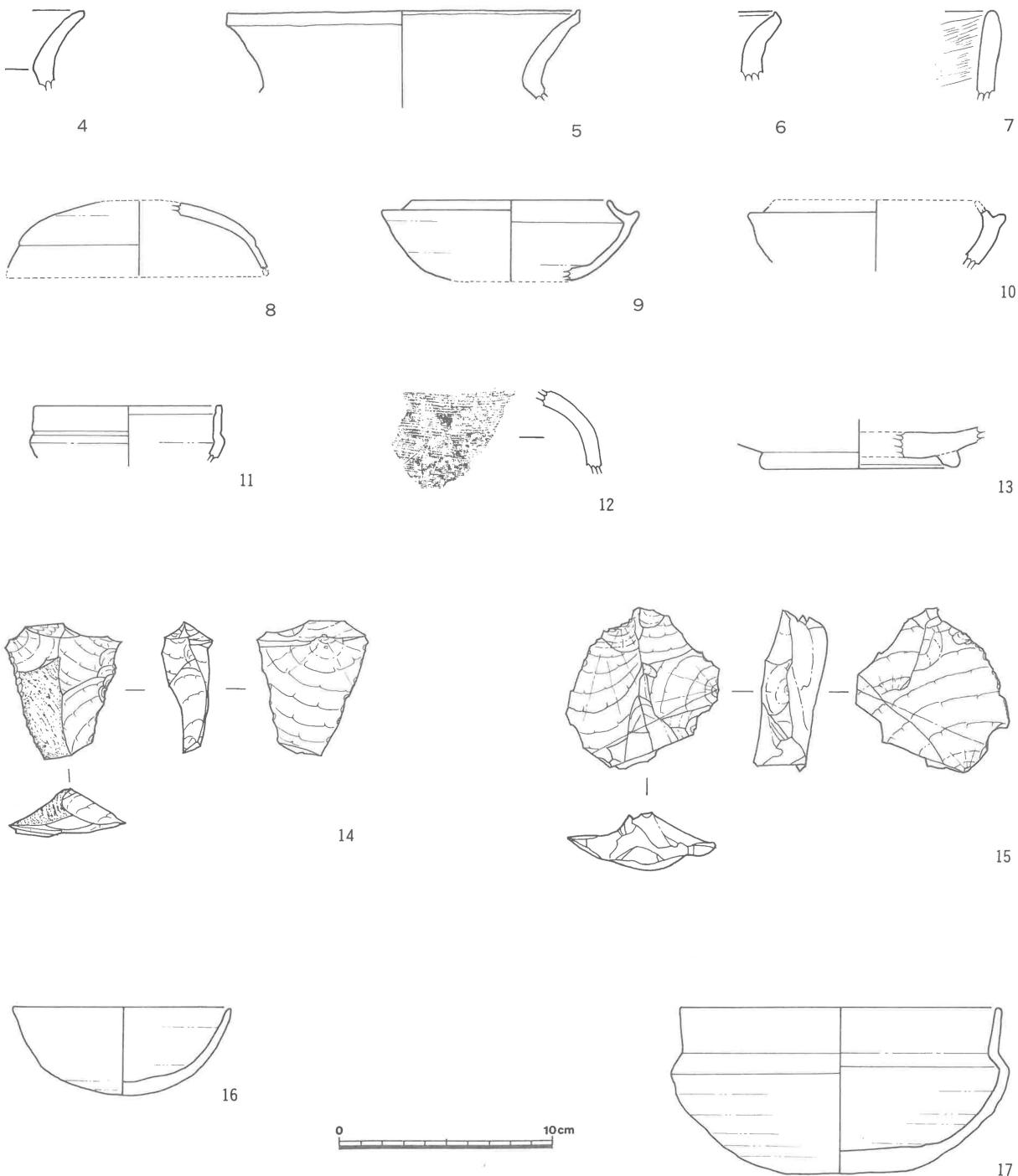


挿図第18 見丁塚遺跡F地点 第2号竪穴住居址の平面図・断面図

山茶碗（13） 底部の破片で、高台の高さは6 mmを測り、外開き気味につくられている。

工. 石器（14・15）

縦長剥片（14・15） 14の法量は、長さ6.4 cm、幅は上部で5.4 cm、下部で4.6 cm、厚さは0.9 cm～2.5 cm、重さは50 gを測る。逆台形を呈する。頂部に打面をもち、表面は右側面と左側面上部に剥離が施され、左側面の下部3分の2に自然面が残る。裏面は打瘤と貝殻状裂痕が見られる。表面が風化して乳白色を呈している凝灰岩製である。



挿図第19 見丁塚遺跡F地点 第2号竪穴住居址出土遺物実測図

15の法量は、長さ7.8cm、幅は7.2cm、厚さ2.0～2.8cm、重さは116gを測る。五角形を呈する。表面は頂部と左右中央の中程とそれに右側縁部中程に打面をもち、それぞれに打瘤と貝殻状裂痕が見られる。裏面は頂部に打面をもち、打瘤と貝殻状裂痕が見られる。表面が風化して、灰色をしている頁岩製である。

② 床面の遺物

ア. 須恵器（16・17）

盃（16） 小形で、底部が丸く不安定なつくりの半球形の胴部である。口唇は丸めてある。

広口短頸壺（17） 偏球形の胴部に、わずかに外方に開く直線的な口頸部が付く。口唇はやや角張る。

（3）まとめ

この豎穴の埋積土から出土した須恵器は、この地方の須恵器編年（註2）の第4型式の新しい方と考えられる。年代は6世紀末から7世紀初頭頃と考えてよからう。土師器もこの須恵器に伴うこの地方の土師器第3期後半（註3）の時期と考えられる。

行基焼は、渥美半島の行基焼編年（註4）の第1型式の新しい方であり、年代は12世紀前半頃と考えられる。

石器は、2点とも2次的加工が加えられていないことから縦長剥片とした。剥離方法や石質またはその風化状態から旧石器時代の年代を考えている。

床面上から出土した2点の須恵器は、その特徴からこの地方の須恵器編年の第5型式と考えられる。年代は、7世紀前葉から中葉頃と考えられている。これにより豎穴が営まれていた年代も須恵器と同じ年代と考えたい。

柱穴のP1とP2との間隔が柱穴の中心で2.8mで測ることから推して、1尺35cm単位の高麗尺が使われていたと考えてよからう。

4. 第3号豎穴住居址

（1）遺構（挿図第20・21、図版第20、第5表）

調査区の南北中程の北寄り、東西の西側に位置する。

豎穴は、西側の約半分が調査区外に延びており、明らかにできなかった。北壁の一部は北隣の第4号豎穴住居址の南壁に切り込み、南壁の中央部は南隣の第1号土壙の北端部に切り込んでいた。

平面形は、遺存部の形状から推して隅円方形であろうが、南壁の中央部が南側に60cm程彎曲して張り出している。規模は南北の長さが壁上端で6.85～7.4m、床面での長さは壁溝を含め6.73～7.28mである。現状での東西の長さは壁上端で3.9m、床面での長さは壁溝を含め3.84m、深さは現状で20～28cmを測る。豎穴の上部は後代の攪乱を受け削平されていることを考慮すると、築造当時は30～40cmの深さがあったと考えられる。床面の面積は現状で約28m²である。主軸方向はN-14°-Eを測る。

壁溝は、四方の壁面沿いをめぐっており、幅は15～37cm、深さは5～7cmを測る。なお、豎穴の南東コーナーから豎穴の外方へ直線状に延びており、長さ2.1m、幅は上端で25～45cm、深さは現状で15cmを測る。第2号豎穴住居址の南壁にも見られた排水溝と考えられる。

第5表 見丁塚遺跡F地点 第3号竪穴住居址の柱穴の位置と法量
(単位 cm)

番号	直径	床面からの深さ	位置(計測位置は柱穴の中心から)	備考
	短径×長径			
P 1	30×33	25	南壁から 130	東壁から 77 支柱
P 2	28×30	45	南壁から 140	東壁から 145 主柱
P 3	41×44	40	——	東壁から 290 支柱
P 4	30×34	——	北壁から 311	東壁から 285 支柱
P 5	25×26	19.5	北壁から 335	東壁から 149 支柱
P 6	19×21	19	北壁から 315	東壁から 120 支柱
P 7	22×22	——	北壁から 267	東壁から 72 支柱
P 8	30×32	20	北壁から 201	東壁から 150 支柱
P 9	22×26	41	北壁から 160	東壁から 155 主柱

柱穴は、竪穴内に9個が検出できた。各柱穴の直径と深さ、それに位置は第5表の如くである。P 2とP 9の柱穴の間隔はその中心で3.90mを測り、この2個は深さから棟持に用いられた主柱と考えられる。P 1・P 3～P 8の7個は深さや位置から主柱を補助する支柱、または竪穴内の附属施設に用いられた小穴と考えている。

北壁付近は床面より10cm程一段低くなり、北東コーナーには壁沿いに平面形が楕円形の1号貯蔵穴がある。その西隣には1号貯蔵穴の半分程の大きさで、平面形が長円形の2号貯蔵穴がある。大きさは、1号貯蔵穴は短径1.0m、長径1.15m、深さは床面から22cm。2号貯蔵穴は短径45cm、長径87cm、深さは床面から20cmを測る。

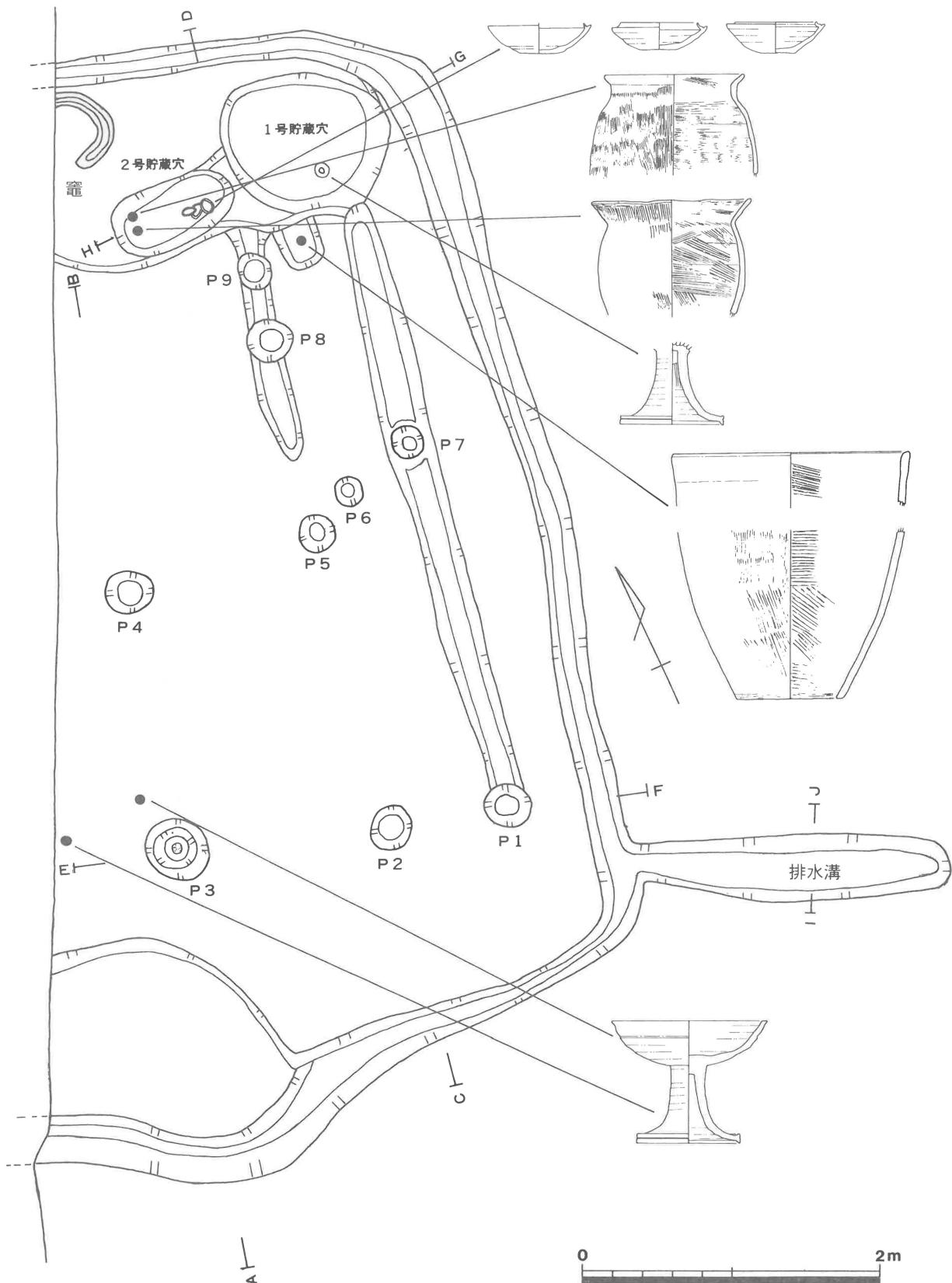
竈は南壁沿いの中央部にあり、西側半分は調査区外に延びているため明らかにできなかった。竈は粘土を積み上げつくられたもので、平面形は南に焚き口をもつU字形を呈する。大きさは外径で東西40cm、南北50cm、壁は床面から10cm程の高さまで遺存していた。竈の内外周辺の床面はよく焼けており、赤褐色を呈していた。

竪穴内に東壁から南側に50～60cmの位置に、南北の長さ4.10m、幅22～35cm、深さ5cmの溝状遺構がある。溝の南端部に柱穴のP 1、同じく中央部に柱穴のP 7があり、北端部は1号貯蔵穴に接して止まっている。この溝の西側80cmの位置にも南北の長さ1.65m、幅25cm、深さ5cmの短い溝状遺構がある。前述の溝と同じく溝の中央部に柱穴のP 8があり、このP 8の北側50cmに柱穴のP 9がある。北端部は2つの貯蔵穴南側付近で止まっている。

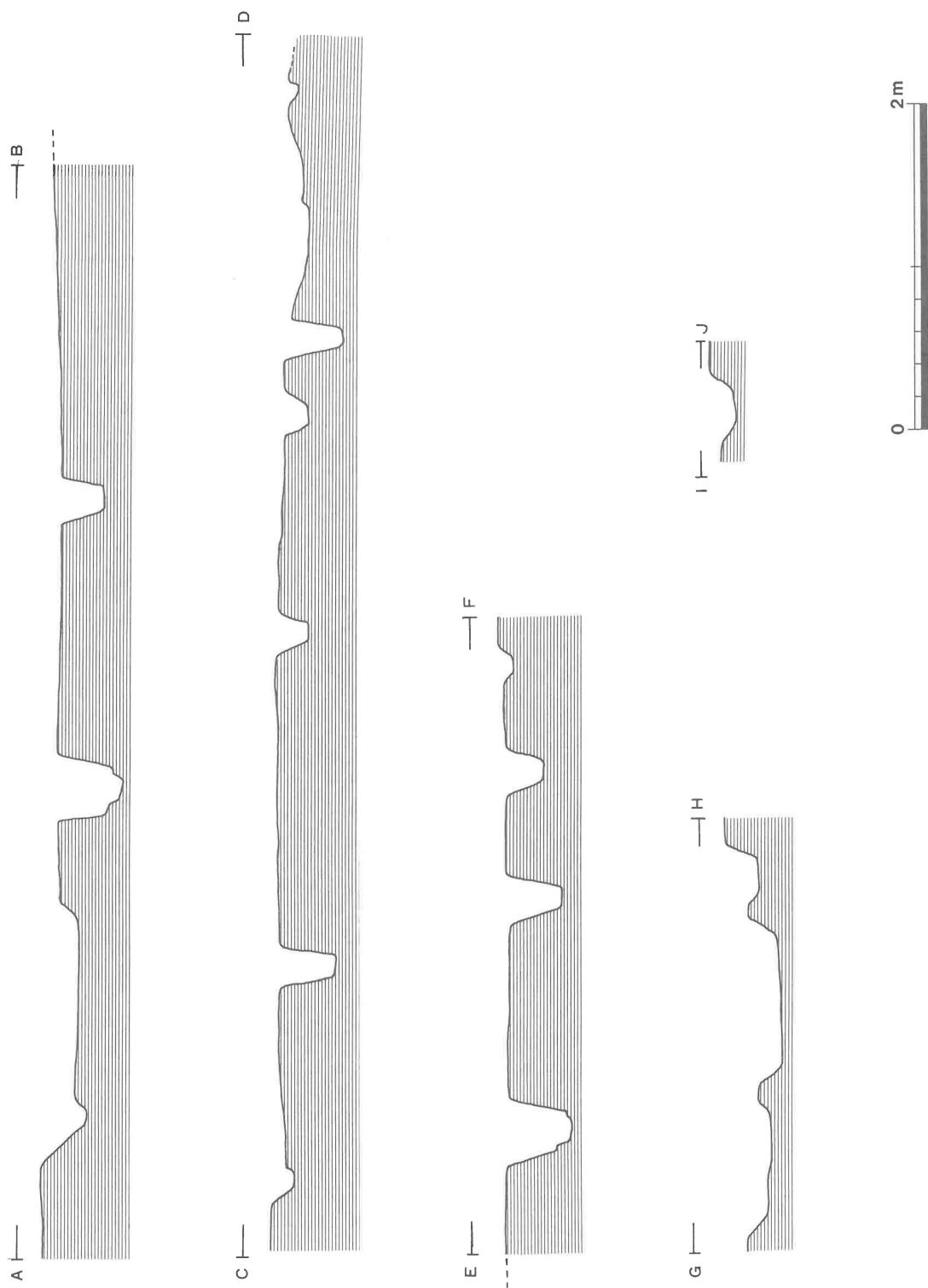
南壁の東西中央部に、平面形が楕円形の遺構がある。大きさは東西の長さ1.65m、南北の長さ1.50m、深さは床面から5cmを測る。南側の一部が南壁といっしょに南側外方へ張り出している。位置や大きさから推して出入口に関する施設とも考えられる。

床面は、ほぼ平坦に造られている。

遺物は、柱穴P 3の調査区境付近から、須恵器の高壺（36）の壺部と脚部とが50cmほど離れて出土した。1号貯蔵穴内からは、須恵器の高壺の脚部が立った状態で出土した。2号貯蔵穴内からは須恵器の壺身が上向きで3個（32～34）が少しづつ重なって出土した。同じ貯蔵穴内から土師器の甕が3個体分（26～28）出土した。また、1号貯蔵穴の南隣にある小ピット内から甕（30）が



挿図第20 見丁塚遺跡F地点 第3号竪穴住居址の平面図



挿図第21 見丁塚遺跡F地点 第3号竪穴住居址の断面図

潰れた状態で出土した。

(2) 遺物 (挿図第22・23、図版第24・25、第7表)

遺物は、竪穴内の埋積土から出土したものと、床面上から出土したものとに大別できる。

① 埋積土からの出土遺物

ア. 須恵器 (18~24)

坏蓋 (18・19) 形態により2種類に分かれる。

A類 (18) 浅い半球形を呈し、口径が大きい。頂部と口辺部との境に沈線状の段をつける。

B類 (19) 小形で半球形を呈し、頂部に回転範削り痕がみられる。

坏身 (21) 半球形を呈し、口縁部がわずかに内彎する。口辺部に1条の沈線をめぐらし、底部は平坦である。

壺 (22) ハの字に朝顔状に開き、口唇部内面がやや受け口状につくられている。

壇 (23) 口頸部で、ハの字で大きく朝顔状に開く、口辺部に2条一組の浅い沈線がめぐっている。

甕 (24) 胴部で、表面は右斜め叩き目、内面は右下がりの範撫でが施されている。

イ. 奈良朝須恵器 (20)

坏蓋 (20) 頂部が偏平で天井部に擬宝状の鉤がつくものである。口端を短く下方に折り曲げたものである。

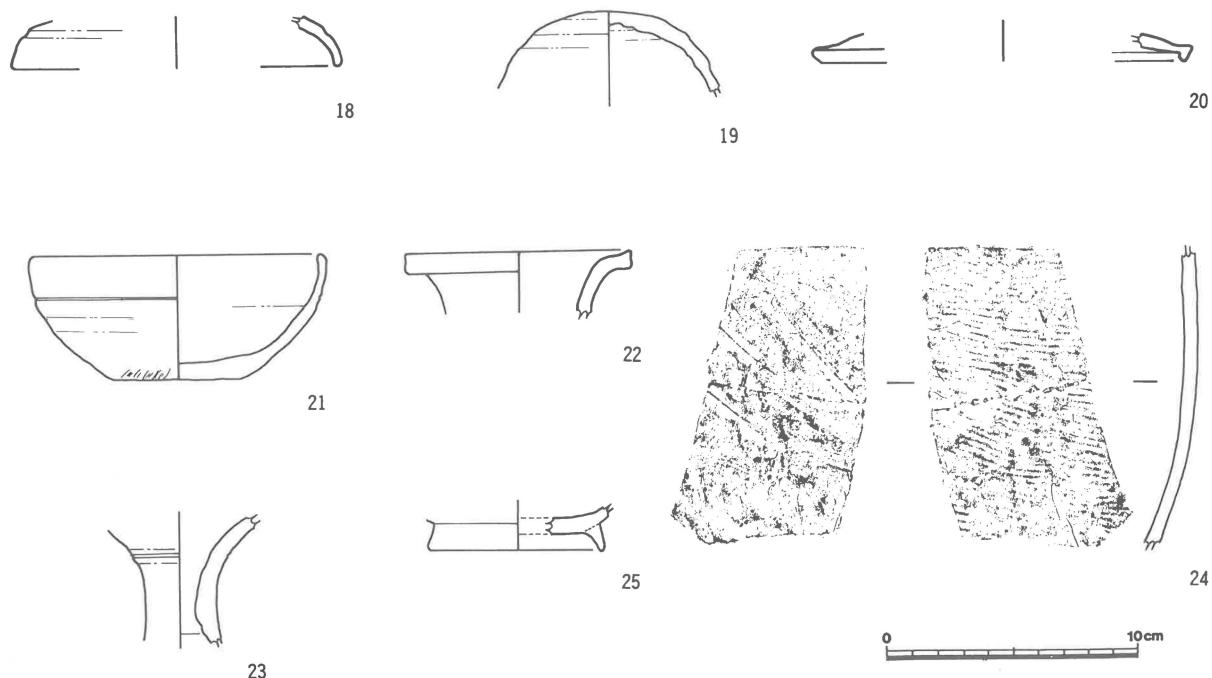
ウ. 平安朝瓷器 (25)

碗 (25) 底部で、高台は外方に開き、断面形が三角形を呈する。

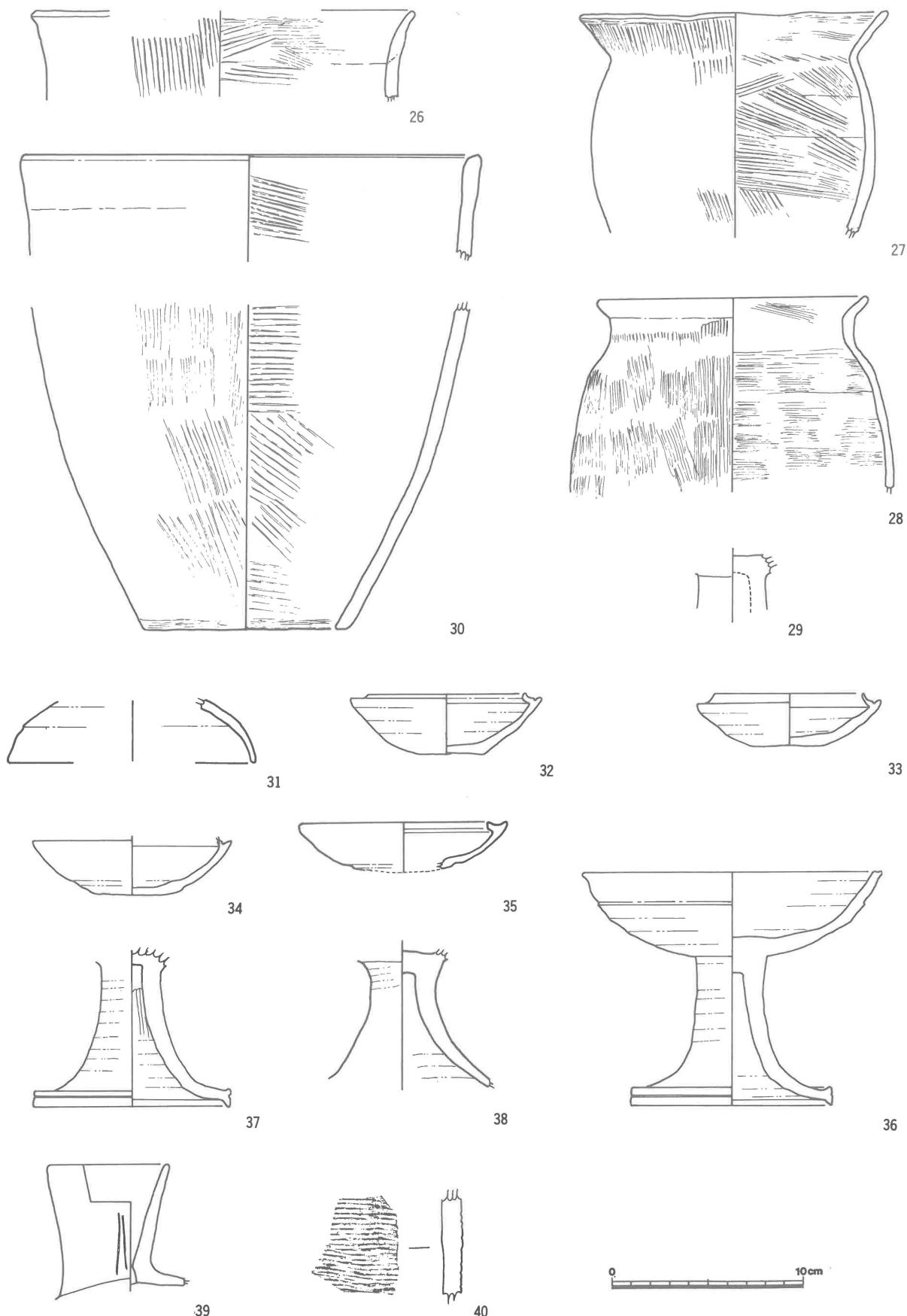
② 床面の遺物

ア. 土師器 (26~30)

甕 (26~28) 口辺部の形態により3つに分かれる。



挿図第22 見丁塚遺跡F地点 第3号竪穴住居址出土遺物実測図 (1)



挿図第23 見丁塚遺跡F地点 第3号竪穴住居址出土遺物実測図（2）

A類（26） 口径がやや大きく、わずかに外方に外反り気味に開く。口辺部から口唇部に向かうにしたがって器壁が薄く、口唇は丸めてある。外面には縦位の刷毛目痕、内面には横位・右上がり・右下がりの浅い刷毛目痕が組合せてめぐらされている。

B類（27） A類に比べ小型になる。口辺部はハの字に直線的に開き、器壁の厚さはほぼ同じで、口唇は丸い。胴部は中程に最大径をもつ偏球形で、外面は風化が激しく、右下がりの刷毛目痕がわずかにみられ、内面は右下がりに刷毛目痕がみられる。

C類（28） B類とほぼ同じ大きさである。頸部が垂直に立ち上がり、口縁部でハの字にわずかに受口状に開く。器壁は頸部より口縁部の方がわずかに薄く、口唇は丸い。胴部は偏球形を呈し、外面は、縦位または右斜めに細かい刷毛目仕上げがされている。内面は、口辺部が右下がり、胴部は横位の刷毛目仕上げである。C類はA・B類に比べつくりが丁寧である。

高坏（29） 坏部と脚部の接合部である。ハの字に開く脚部であろう。

甑（30） 深鉢形の器体で、上胴部に左右一対の角形の把手がつくものであろう。胴上部と把手を欠損している。口辺部は直立気味で、口辺部外面をやや厚く、口唇を角張り気味につくる。底部は底がないものである。外面は胴部中程が縦位、底部は右下がりに間隔の広い櫛状器具を用いて刷毛目仕上げされ、内面も同器具を用い口辺部は右下がり、胴部は横位、底部は右下がりに刷毛目仕上げされている。

イ. 須恵器（31～40）

坏蓋（31） 浅い半球形を呈し、頂部と口縁部との境にわずかに稜をつけ、口縁部はハの字に直線的に開く。

坏身（32～35） 小型で、立ち上がりの内傾角度が50度程となり、高さも32は2mm、33は5mmと短くなる。35は立ち上がりが蓋受けと同じ高さとなり、高さをもたなくなる。口径は平均8.3cm、最大径の平均は9.5cm、高さの平均は2.8cmを測る。32と33の蓋受け部中程に1条の細い沈線をめぐらしている。32～35の底部には範削り痕がみられる。32と33はつくりが似ており同一工人の手によるものであろう。

高坏（36～38） 36は坏部が浅い半球形を呈し、口唇部は外方にわずかに開き、口端の中程に1条の浅い沈線をめぐらす。口辺部にも1条の沈線をめぐらし、その下方が段状につくってある。脚部はハの字に開き、脚端部をわずかに上下に拡張し、外面の中程に1条の沈線をめぐらしている。

37・38は脚部である。37は36と同じつくりで、同一工人が作製したものであろう。38は脚部を欠く、36・37とはつくりが異なる。

平瓶（39） 口頸部で、ハの字に直線的に開き、口唇は丸くつくられている。外面に「||」印の範描き記号状刻文が施されている。

甕（40） 胴部で、横位の叩き目仕上げである。

（3）まとめ

竪穴の北壁の中央部には竈、東北コーナーには1号貯蔵穴、その西隣に2号貯蔵穴の施設があり、南壁の中央部には出入り口に附属する遺構がある。南東コーナーには竪穴の外方へ延びる排水溝がある。

埋積土から出土した須恵器は、この地方の編年（註6）で、18・23は第4型式、19・20は第5型式、22・24は両型式のいずれにも属する。年代は第4型式が6世紀末から7世紀初頭頃、第5型式が7世紀前葉から7世紀中葉頃である。20は奈良朝須恵器で8世紀代、25は平安朝瓷器（註7）の第3型式にあたり、11世紀代から12世紀初頭頃の年代を考えている。

床面上から出土した須恵器は、この地方の須恵器編年の第5型式に属する。31の壺蓋は第4型式の特徴を持っているが、古い第4型式の名残を持ったものが第5型式に残ったものと考えている。年代は、7世紀前葉から7世紀中葉頃である。

土師器は須恵器と同時期のものであり、この地方の土師器第3期後半（註8）に属するものである。これらのことからこの竪穴住居址は、7世紀前葉から7世紀中葉頃に営まれたものである。

5. 第4号竪穴住居址

(1) 遺構（挿図第24、図版第21）

調査区の北西隅に位置する。

竪穴は、北側と西側の一部が調査区外に延びていたため全形を知ることはできなかった。埋積土は暗黒色有機土層である。平面形は約3分の2が検出でき、推定復元して隅円方形と考えている。現状での規模は、南北の長さが壁上端で5.02m。床面での長さは壁溝を含め4.92m。東西の長さは壁上端で5.37m、床面での長さは壁溝を含め5.30m。深さは現状で15～31cmを測る。面積は現状で約26m²である。

壁溝は、現状から推察して四方の壁面沿いをめぐっていると考えてよからう。幅は10～20cm、深さは5～10cmを測る。

竪穴の上部が後代の攪乱を受け削平されたことを考慮すると、築造当時は現状より10～20cmほど深かったと考えられる。主軸方向はN-23°-Eを測る。

柱穴は竪穴内に3個検出できた。P1は東壁から1.22m、南壁から1.30m、太さは36×40cm、深さは床面から34.5cmを測る。P2は東壁から4.25m、南壁から85cm、太さは37×41cm、深さは床面から27cmを測る。P3は東壁から2.40m、南壁から2.67m、太さは27×30cm、深さは床面から35cmを測る。P1とP2の柱穴の間隔はその中心で3.05mを測り、この2個の柱穴は主柱と考えられる。P3はその位置から推してP1およびP2の主柱を補助する支柱と考えられる。

なお、南壁の中程の壁沿いにあるP4は、大きさ57×63cm、深さは床面から20cmを測る。断面形が浅いU字状になっており、柱穴とは考えがたい。

床面は、ほぼ平坦面に造りされている。

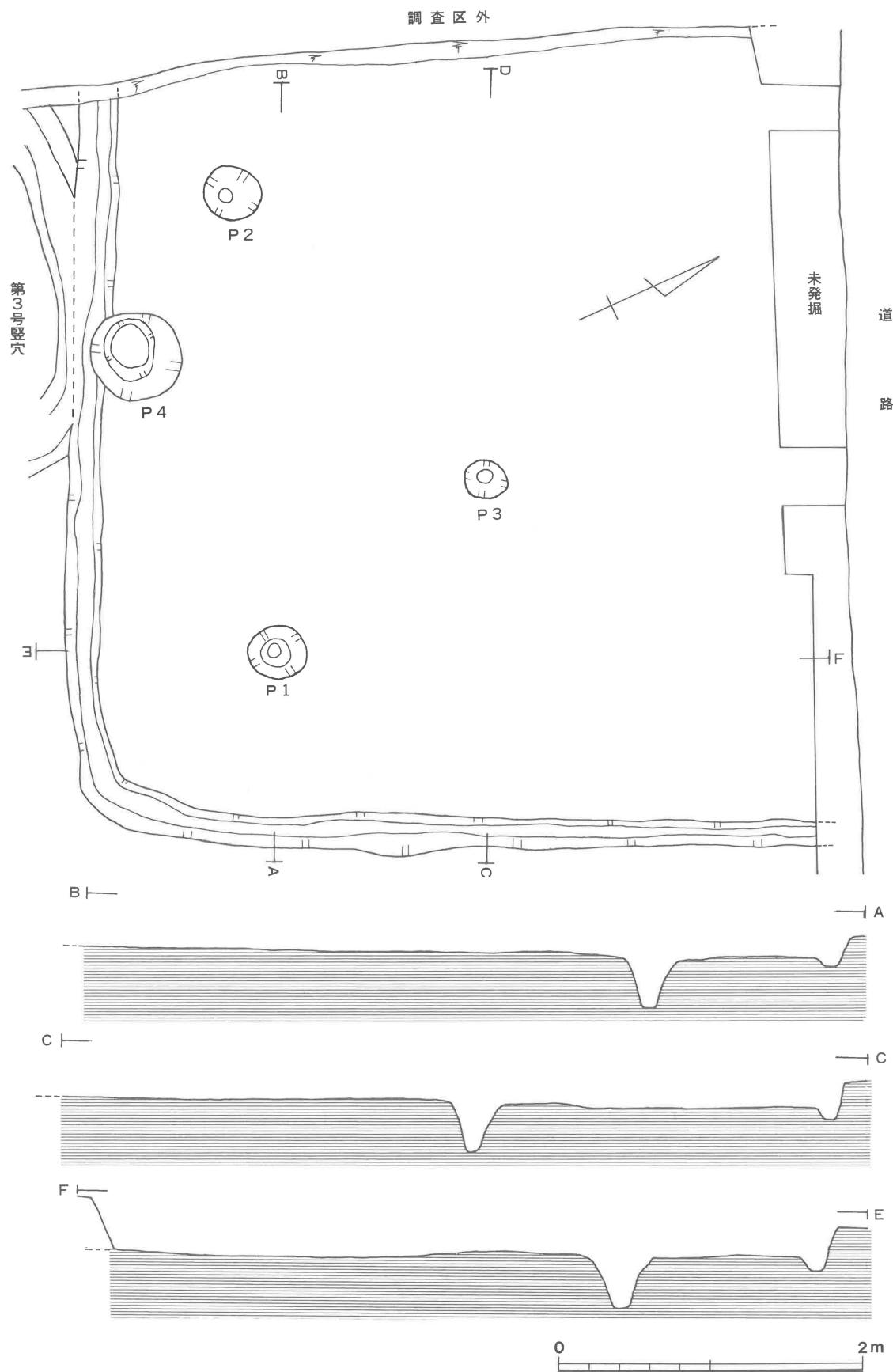
(2) 遺物（挿図第25、図版第26、第7表）

竪穴住居址の埋積土と床面上から出土したものとに大別できる。

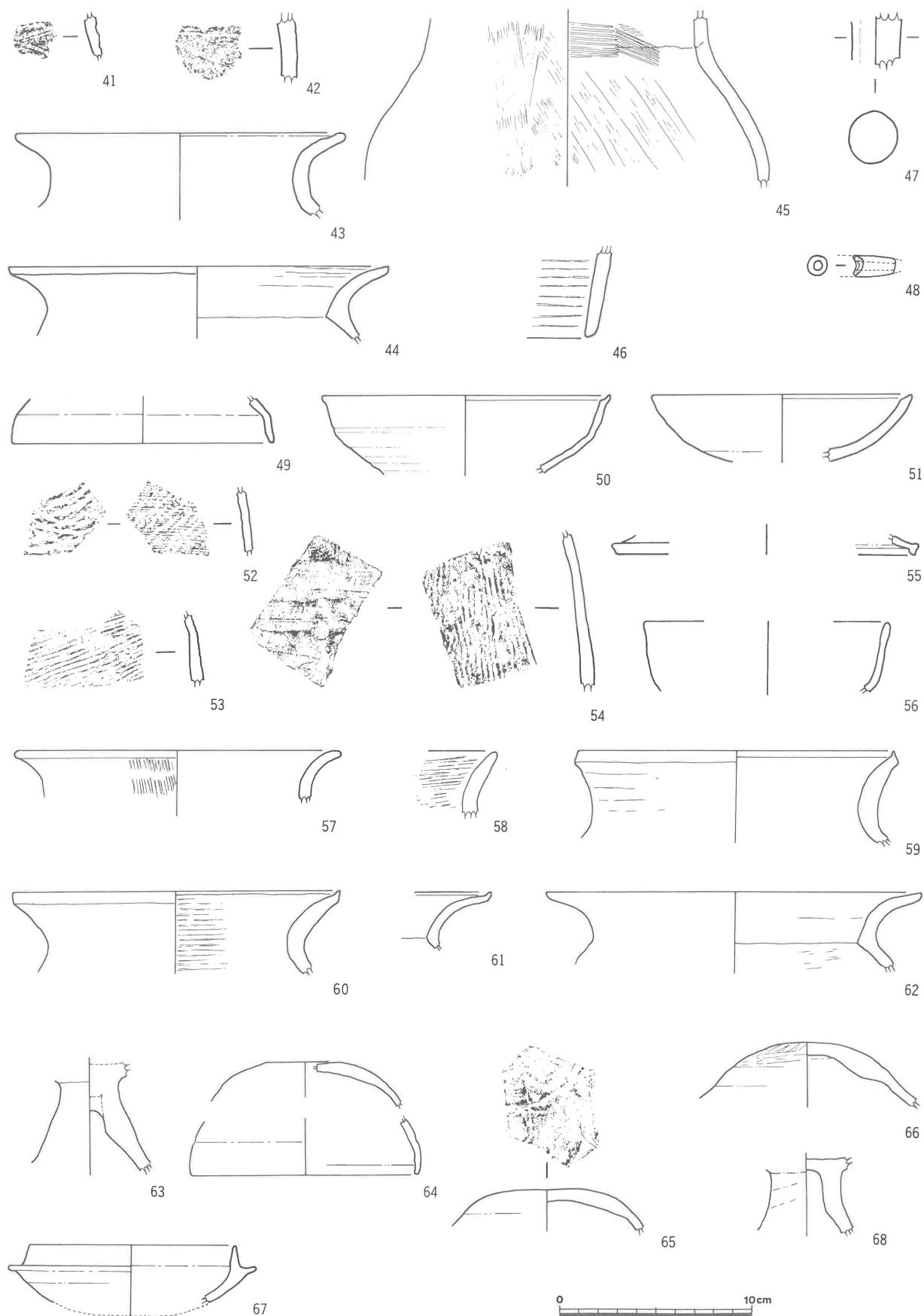
① 埋積土からの出土遺物

ア. 繩文式土器（41・42）

深鉢形土器の破片で2点ある。41は小巻貝の折口を用いた2条一組の沈線を左下がりに1条、そ



挿図第24 見丁塚遺跡F地点 第4号竪穴住居址平面図・断面図



挿図第25 見丁塚遺跡F地点 第4号竪穴住居址出土遺物実測図

の下方に右下がりに2段重ねて4条引いてある。42は無文土器で、横位または右下がりの擦痕仕上げである。

イ. 土師器（43～46）

甕（43～45） 43・44は口辺部の形態により2種類に分かれる。

A類（43） 口頸部はくの字に緩やかに開き、口唇部内側にやや段をつくる。頸部から口唇部にかけての器壁の厚さはほぼ同じで、口唇を丸くつくる。

B類（44） 口頸部はくの字に強く、やや外反り気味に屈折する。頸部から口唇に向かうにしたがって器壁は薄くなり、口唇部は外面に範をあて三角形につくる。口辺部内面は横位の範撫で仕上げである。

45は頸部から胴上部にかけての破片である。外面は左下がり、右下がりの刷毛目仕上げ。内面は頸部が右下がりの刷毛撫で、胴上部は右下がり範撫で仕上げである。

甌（46） 底部で、内面は横位の櫛目痕が見られる。

ウ. 須恵器（49～56）

坏蓋（49） 口辺部で、頂部と口辺部との境にわずかに稜をつくる。

高坏（50・51） 2点とも坏部である。50は半球形を呈し、底部と口辺部との境にわずかに稜つけ、口辺部は直線的につくられ、口唇部は内側に段をつくる。

51は浅い半球形を呈し、口唇部は内側が斜めに仕上げられている。

壺（52） 胴部で、表面は右斜めの叩き目の上に横位の細かい描き目文を施す。内面には青海波文が見られる。

甕（53・54） 胴部で、53は左斜め叩き目文である。54は表面が右斜め叩き目文、内面は青海波文と横位の範撫で仕上げである。

エ. 奈良朝須恵器（55・56）

坏蓋（55） 縁端部で、縁端に稜をつけ短く下方へ屈折させてある。

坏身（56） 坏部で、腰部が丸みをもって屈折するものである。直線的でわずかに外開きし、口唇は丸い。

オ. 土製品（47・48）

製塩土器（47） 角形脚付製塩土器で、基部から先端部に向かうにしたがって細くなり、断面形は円形を呈する。基部から中間部にかけて破片であり、太さは 2.6×2.7 cmを測る。二次火熱を受け赤褐色に変色している。

土錐（48） 小型で細い管状を呈し、中央がわずかに太くなっている。断面形は円形である。約3分の2が遺存していた。太さは中央で 10×11 cm、孔の太さは 4.5×5.0 cm、重さは5gを測る。

② 床面の遺物

ア. 土師器（57～63）

甕（57～62） 6点とも口頸部がくの字に外反り気味に開くものである。形態により4種類に分かれる。

A類（57・58） 口辺部の器壁の厚さがほぼ同じで、口唇が丸くなっている。57は外面に右斜めの刷毛目、58は内面に左下がりの刷毛目が施されている。

B類（59・60） 頸部から口唇部に向かうにしたがって器壁が薄くなり、口唇外面に範をあて角張らせ、口端を上方にわずかに拡張してある。

C類（61） 器壁の厚みが3mmと薄く、口唇が上方にやや受口状に拡張してある。

D類（62） 口頸部がくの字に直線的に屈折し、口縁部は強く外反りして開く。口唇部の器壁の厚みは口辺部に比べわずかに薄く、口唇は尖がり気味である。

高坏（63） 脚部の基部で、脚部がハの字に開くものであろう。

イ. 須恵器（64～68）

坏蓋（64～66） 64は半球形で、頂部と口縁部の境にわずかに細い沈線をめぐらしてある。65・66は浅い偏球形を呈する。65の天井部には範描きによる「+」印の記号状刻文がある。66は天井部が範削りされている。

坏身（67） 浅い半球形を呈し、口縁部の立ち上がりは80度とわずかに内傾し、長さが1.1cmを測る。

高坏（68） 脚部の基部である。ハの字に開くものであろう。

(3) まとめ

豎穴の埋積土から出土した縄文式土器は、深鉢形土器の小破片である。時期は縄文時代晩期を考えている。

須恵器の49・50は、この地方の須恵器編年（註9）の第4型式に比定でき、年代は6世紀末から7世紀初頭頃。51は第5型式で、年代は7世紀前葉から中葉頃と考えられている。奈良朝須恵器の55・56はこの地方の須恵器編年（註10）の第3期、7世紀後葉頃と考えられる。甕は須恵器および奈良朝須恵器に伴うものである。土師器は、上記の両型式の須恵器に伴うものである。

製塙土器は、太さから推して第4型式の須恵器に伴出するものと考えられる。

土錘は、須恵器ならびに奈良朝須恵器に伴う時期のものであろう。

床面から出土した須恵器は、この地方の須恵器編年の第4型式と考えられ、年代は6世紀末から7世紀初頭頃である。土師器は、この須恵器第4型式と同時期と考えてよい（註11）。

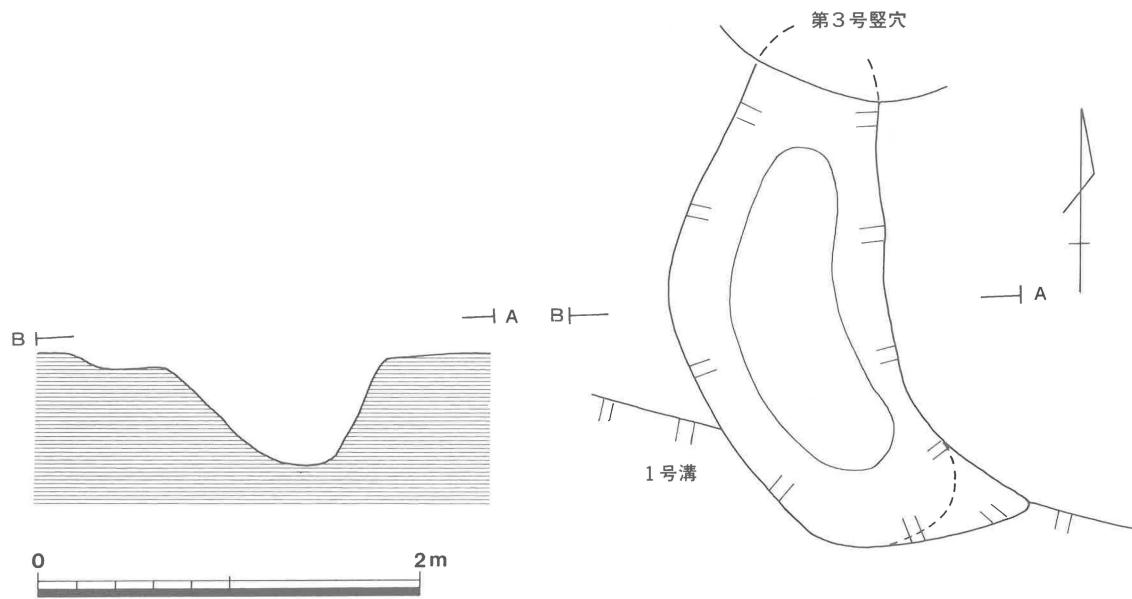
これによりこの豎穴が営まれた年代は、6世紀末から7世紀初頭頃と考えてよからう。

6. 第1号土壙状遺構（挿図第26、図版第20）

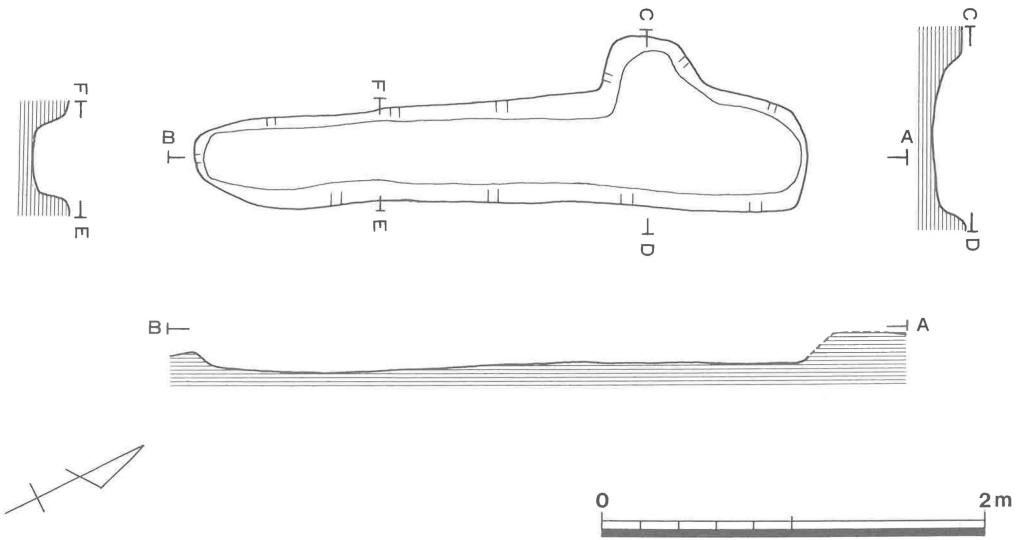
第3号豎穴住居址の南隅に位置する。

土壙は、北端部を第3号豎穴住居址により切り込まれ、南端部は1号溝状遺構により削平されている。平面形は、丸みをもつくの字状を呈する。規模は現状で、南北の長さは上端で2.6m、下端で1.73m。東西の長さは上端で1.15m、下端で0.57m、深さは地山面から55cmを測る。長軸方向はN-10°-Eを測る。

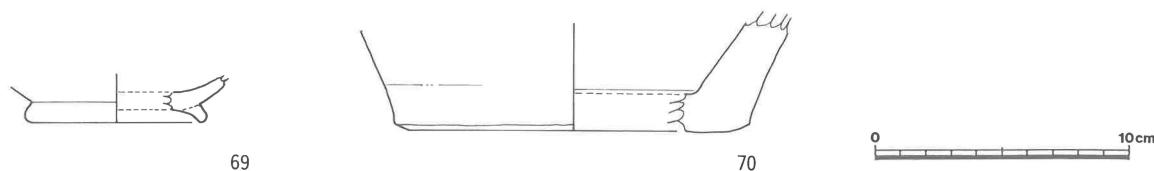
埋積土は、暗黒色有機土層である。遺物は見出せなかった。



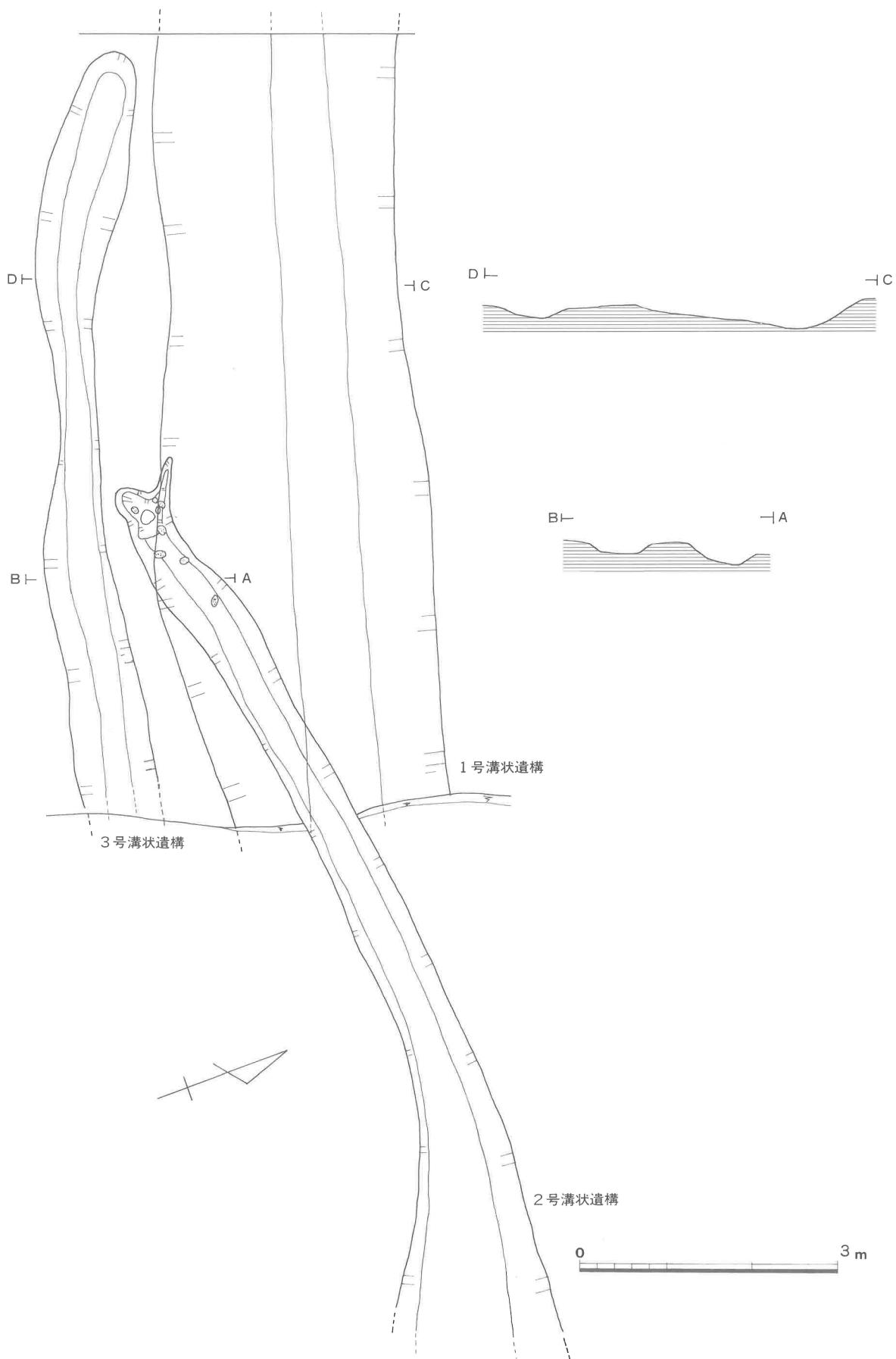
挿図第26 見丁塚遺跡F地点 第1号土壙状遺構の平面図・断面図



挿図第27 見丁塚遺跡F地点 第2号土壙状遺構の平面図・断面図



挿図第28 見丁塚遺跡F地点 2号溝状遺構出土遺物実測図



挿図第29 見丁塚遺跡F地点 1号・2号・3号溝状遺構の平面図・断面図

この土壙は、第3号竪穴住居の築造時に北端部が削り取られていることから、竪穴が営まれた7世紀前半以前の年代が考えられる。

7. 第2号土壙状遺構（挿図第27、図版第22）

調査区のほぼ中央部にあり、第3号竪穴住居址の南東1mの位置にある。

土壙の北端部は第3号竪穴住居址の排水溝により切り込まれている。平面形は、西側の北端部に半円形の張り出し部をもつ長円形である。規模は現状で、南北の長さは上端で3.24m、下端で3.15m、東西の長さは上端で50～65cm、下端で31～46cm、深さは地山面から19cmを測る。土壙の上部は後代の攪乱を受け削平されていることを考慮すると、造られた当時は50～60cmの深さがあったであろう。半円形の張り出し部の大きさは、南北の長さ下端で50cm、東西の長さ下端で37cmを測る。長軸方向はN-7°-Wを測る。

埋積土は、暗黒色有機土層である。遺物は、埋積土から条痕系土器が小破片で1点出土した。

この土壙は、規模や形態から推して土壙墓とも考えられる。また、形態が方形周溝墓の南溝にも似ている。

土壙は、第1号土壙状遺構と同じく、遺構の北端部が第3号竪穴住居址の排水溝により壊されていることから、第3号竪穴住居址の築造以前の年代があたえられる。埋積土から出土した条痕系土器は水神平式土器とも考えられ、縄文時代晩期末頃の時期とされている。

8. 1号溝状遺構

（1）遺構（挿図第28）

調査区の中央部に位置する。

西側は調査区外に延びており、東側はすでに宅地造成のため削平されている。現状での長さは東西9.0m、幅は上端で2.60～2.80m、下端で60～80cm、深さは現地表から26cmを測る。断面形は幅広でU字状を呈する。

この溝の西部では北側にある第1号土壙状遺構の北端部を削平し、東部では南側にある2号溝状遺構を長さ6m程を削平しており、埋積土は茶褐色土層である。遺物は確認できなかった。そのため年代は明らかにすることはできなかった。おそらく近代になって造られたものであろう。

9. 2号溝状遺構

（1）遺構（挿図第28、図版第22）

調査区の中央部に位置する。

1号溝状遺構と3号溝状遺構に挟まれている。第1号竪穴住居址の東北コーナー北隣から始まり、東方に向かって走っている。基部から1～6mの間は、1号溝により上部が削平されている。東方部は調査区外に延びており、長さを明らかにすることはできなかった。溝の基部は二叉状に分かれ、中央部は擂鉢状になっている。基部から東に1.4mの範囲に拳大ほどの河原石が8個見出された。東方

に向かうにしたがって南にややカーブをし、幅も徐々に広く、深さも深くなっている。

現状での長さは、東西 11.50 m、幅は基部付近で上端 50 cm、下端 20 cm、深さは現地表から 21 cm を測る。東端部付近の幅は上端 1.80 m、下端 1.00 m、深さは現地表から 70 cm を測る。断面形は浅いU字状を呈する。

埋積土は、少々貝殻が混じる暗茶褐色土層である。遺物は、埋積土から小破片で数点が出土した。

(2) 遺 物 (挿図第 28、第 7 表)

① 埋積土からの出土遺物

ア. 平安朝瓷器 (69)

碗 (69) 底部の破片で、高台は外方に開き、断面形はやや内弯した三日月形を呈する。

イ. 行基焼 (70)

甕 (70) 底部の破片で、器壁が厚く、内外面に淡緑色の釉がみられる。

(3) ま と め

埋積土から出土した平安朝瓷器は、碗で第2型式（註12）に属し、年代は10世紀代と考えられている。行基焼の甕は、型式は明らかでなく年代を中世としたい。この溝は1号溝より古く、中世以後に埋没したと考えられる。

10. 3号溝状遺構 (挿図第 29、図版第 22)

東西に長く延びるものであり、検出した長さは 9 m、幅 80 cm、深さ 20 cm であった。この溝は第 1 号豎穴住居址を掘りとっている。

溝内からは、行基焼の碗・甕、近代の陶磁器および瓦の計 8 点が出土した。いずれも小片であり図示できない。近代以降に掘られた溝である。

11. 4号溝状遺構 (挿図第 13、図版第 22)

東西に長く延びる溝であり、検出した長さは 8 m、幅 1.5 cm と広く、深さは 40 cm であった。溝内からはチャートの剥片、行基焼の碗、内耳鍋および近代の陶磁器、素焼きの甕、瓦、土管の計 13 点を検出した。いずれも小片であり図示できない。近代以降に掘られた溝であろう。

第4節 小 結

この発掘調査において、遺構の相対年代が明らかになったのは弥生時代の方形周溝墓 1 基、古墳時代の豎穴住居址 4 軒である。土壙状遺構 2 基、溝状遺構 4 条については、明確な年代は明らかにできなかった。

方形周溝墓は、四方に周溝をめぐらし四隅に陸橋部をもつものである。南溝と西溝の 2 条が遺存しており、形態はこの時期に広く普及した様式である。規模は、推定で一辺 8.50 m 前後を測り、大きさとしては中規模である。

この方形周溝墓は、この地域の集落を治めた首長層の墳墓と考えたい。

第6表 見丁塚遺跡F地点 横穴住居址の規模と年代

〔()内は現存長と床面積、単位はcm〕

横穴名	形状	南北の長さ	東西の長さ	床面積	竈の位置	年代
第1号横穴住居址	長方形	(320)	270	(7.5 m ²)	東壁中央	5世紀代
第2号横穴住居址	方形	500～512	(350)	(14 m ²)	北壁中央	7世紀前半
第3号横穴住居址	隅円方形	675～770	(390)	(35 m ²)	北壁中央	7世紀前半
第4号横穴住居址	隅円方形	(543)	(600)	(25 m ²)		6世紀末～7世紀初頭

南溝内の中央部から弥生時代中期中葉の壺形土器が出土しており、この地方の下長山式土器である。この土器は尾張地方の外土居式土器と並存しており、前代の伝統を承け継ぎつつ大きく変化を求める時期である。

壺形土器は、溝内の床面から17cm程の高さで西向き横倒しとなって出土した。土器は供献用と考えられ、被葬者の遺骸を安置すると同時に祭祀儀礼のひとつとして床面より高い位置に、棚のような木製の台を溝底に据えてその上面に壺を置いものか、また、死後も追悼の墓前祭が行われ溝が土砂で埋まりつつある時点で飲食物を入れて供献したものであろうか。

この方形周溝墓は豊橋市内においては初めての発見例である。その後昭和55（1980）年に浪ノ上遺跡において古墳時代前期が1基（註13）、翌56年には同じく浪ノ上遺跡において弥生時代後期から古墳時代前期の方形周溝墓が5基（註14）、昭和60年（1985）年には中屋敷遺跡において弥生時代後期が1基確認されている（註15）。次いで平成元（1988）年に橋良遺跡で2基、森岡遺跡で1基、両遺跡とも弥生時代中期の時期である（註16）。そして平成3（1991）年から平成4年にかけて高井遺跡で弥生時代中期が2基（註17）、平成10（1998）年には橋良遺跡で弥生時代中期が2基（註18）検出されている。これらの数を合わせると現在15基を知る（註19）。

4軒の横穴住居址は、後代の攪乱や発見の契機となった宅地造成に伴う工事、それに調査区外に遺構が伸びていることから4軒とも正確な規模は明らかにできなかった。次表に現状での規模や年代等を記した。

4軒の横穴住居址のうち、第1号横穴住居址は、他の3軒と性格と年代を異にする。南北に長軸を持ち、平面形が長方形で2本柱であることから、切妻風の屋根と考えらる。床面は約7.5m²と他の横穴住居址の3分の1以下と小規模な造りである。竈が東壁中央部に設置されており、3～4人の家族単位で生活を営むには小さすぎる。当時の大人の身長が現代人より低いと考えた場合でも1～2人が何とか生活できる広さであろうか。一方、竈に火が点いていると1人で寝起きするにも狭いようにも感じられる。これらのことから、横穴住居址は竈を有した調理専用の建物址か何らかの工房址であったのだろうか。

この横穴住居址の築造年代は、古墳時代中期の5世紀代と推定されており、この地方でこの時期に竈を有する横穴住居址の発見例は稀である。

第2・第3・第4号横穴住居址の時期は、いずれも古墳時代後期である。平面形は方形と隅円方形と考えられ、屋根は寄棟造りであろう。

第2号堅穴住居址と第3号堅穴住居址は、北壁中央部に竈を有し、日当たりのよい南壁に出入口に関するテラス状の施設が造られている。他に類例を知らないが、排水溝と考えている施設があり、壁溝を住居址外部に2~3m程延長し造ったものである。

第2号堅穴住居址と第3号堅穴住居址の床面上から見出された遺物は、須恵器編年の第5型式であり、年代は7世紀前半と考えられる。このことから両堅穴住居址は、ほぼ同時期に営まれていたと考えられる。

第4号堅穴住居址は、南壁のほぼ中央部を第3号堅穴住居址により切り込まれている。これは第3号堅穴住居址より第4号堅穴住居址の方が古いことを示している。床面上の出土遺物の時期も、第3号堅穴住居址よりも第4号堅穴住居址の方が一時期古く、須恵器第4型式であり、年代は6世紀末から7世紀初頭頃と考えている。

昭和62(1987)年に、この調査区の北隣に位置する見丁塚遺跡G地点(註20)が豊橋市教育委員会により発掘調査された。堅穴住居址8軒と掘立柱建物址1棟が検出され、出土遺物からその時期は、古墳時代後期の範囲に入るるものである。両遺跡は隣接した位置にあり、5世紀代から7世紀代にかけて継続して営まれた同じ村落共同体の集落址としてよからう。

各堅穴住居址の規模や出土遺物から、社会的な身分差は知ることはできなかった。おそらく一般的に農業を営んでいた庶民層と考えられる。

見丁塚遺跡F地点、見丁塚遺跡G地点の両遺跡から東方へ100m程にある見丁塚遺跡A地点からも古墳時代後期の遺物が出土しており、集落址が西方の台地内へと広がっている可能性もある。

両遺跡周辺の崖下には、昭和30年代まで4か所の湧水地(挿図第2)があり、東脇地区および牟呂地区においてもまとまった数の湧水地がある地域である。この集落が営まれた古墳時代にも湧水地があったとすると、この湧水地は生活用水はもちろん台地裾部付近で行われたであろう稻作等にも利用されていことが想像できよう。

第3号堅穴住居址出土の土師器と須恵器は、土師器の甕(26・27)は粗雑なつくりであり、集落内での自給生産品として作られた地元の製品と考えられる。そして、甕(28)と甌(30)は入念なつくりで専門工人による製品とも考えられる。

須恵器は、第5型式の良好な一括資料であり、そのほとんどが愛知県と静岡県との県境に分布する高師山古窯址群と湖西古窯址群の製品と考えてよからう。

第4号堅穴住居址から唯一出土した製塩土器は、渥美半島の先端部に分布する製塩遺跡群から、土器の坏部に塩を詰めたまま交易品としてもたらされたものであろう。

註1 久永春男「弥生式土器総括」『瓜郷』豊橋市教育委員会 1963

註2 芳賀 陽「青山貝塚—渥美半島における古代漁村の土器」『古代学研究』20号 古代学研究会 1959

久永春男、斎藤嘉彦「高橋遺跡出土の弥生式土器と土師器の編年」『高橋遺跡』豊田市教育委員会 1969

註3 久永春男、斎藤嘉彦「高橋遺跡出土の弥生式土器と土師器の編年」『高橋遺跡』豊田市教育委員会 1969

註4 芳賀 陽「東三河における古墳出土須恵器の編年」『二本松古墳群』愛知県営開拓パイロット事業石巻地区

埋蔵文化財調査団 1976

久永春男、斎藤嘉彦「三河における古墳出土須恵器の編年」『天神山古墳群』愛知県立岩津高等学校 1969

註5 久永春男、芳賀 陽「渥美半島古窯址群出土行基焼の編年」『豊橋市大岩町北山古墳群、豊橋市植田町大膳古窯址群』豊橋市教育委員会 1966

註6 註4と同じ

註7 伊藤 恵『豊橋市南部における平安朝瓷器古窯址群』東海古文化研究所 1979

久永春男「刈谷市における古窯の分布とその製品について」『刈谷市誌編纂委員会 1958

註8 註3と同じ

註9 註4と同じ

註10 森田勝三『渥美半島の須恵器窯』東海古文化研究所 1982

註11 片山 洋、森田勝三『山西遺跡』豊川市教育委員会 1988

註12 註7と同じ

註13 故木下克己先生が調査主任となり、小畠頼孝と森田勝三が調査員として参加した。

註14 住吉政浩「愛知県豊橋市牛川町浪ノ上遺跡」『日本考古学年報34』日本考古学協会 1984

註15 石巻地区文化財保存会員の野口剛氏ご教示。

註16 北村和宏他『森岡遺跡・淡州神社北遺跡』愛知県埋蔵文化財センター 1991

小林久彦他『橋良遺跡』豊橋市教育委員会 1994

註17 賢 元洋他『高井遺跡』豊橋市教育委員会 1996

註18 岩瀬彰利『橋良遺跡(Ⅱ)』豊橋市教育委員会 1999

註19 この15基以外に、平成13年に行われた橋良遺跡発掘調査において弥生時代中期の方形周溝墓が9基検出されたとしている。

現地説明会資料No.46『橋良遺跡現地説明会資料』豊橋市美術博物館 2001

註20 小林久彦他『見丁塚遺跡』豊橋市教育委員会 1990

〈参考文献〉

・森田勝三他『豊橋市東脇 見丁塚F地点発掘調査日誌』牟呂町誌編纂委員会 1976

・小野田勝一他『古代の塙づくり』渥美郷土資料館 1993

第7表 見丁塚遺跡F地点 出土遺物觀察表

(単位 cm)

図番号	遺構	種別	器種	口径	器高	最大径	底径	色調	胎土	焼成
15-1	方形周溝墓	弥生土器	壺	16.4	35.8	33.0	5.8	茶褐色	砂含む	良好
19-2	第1号竪穴	土師器	台付甕					茶褐色	金雲母含む	良好
19-3	第1号竪穴	土師器	高坏				7.4	黄褐色	金雲母含む	良好
19-4	第2号竪穴	土師器	甕A					淡橙色	砂含む	良好
19-5	第2号竪穴	土師器	甕B	16.4				淡茶色	砂含む	良好
19-6	第2号竪穴	土師器	甕B					淡橙白色	砂含む	良好
19-7	第2号竪穴	土師器	甕C					淡橙色	細礫含む	良好
19-8	第2号竪穴	須恵器	坏蓋					青灰色	緻密	良好
19-9	第2号竪穴	須恵器	坏身	9.4		11.0		青灰色	緻密	良好
19-10	第2号竪穴	須恵器	坏身					青灰色	緻密	良好
19-11	第2号竪穴	須恵器	盃	8.8				淡青灰色	緻密	良好
19-12	第2号竪穴	須恵器	壺					青灰・茶色	緻密	良好
19-13	第2号竪穴	行基焼	山茶碗				9.0	暗灰色	緻密	良好
19-14	第2号竪穴	石器	縦長剥片	(長さ6.4×幅5.4)				乳白色		
19-15	第2号竪穴	石器	縦長剥片	(長さ7.4×幅7.2)				灰色		
19-16	第2号竪穴	須恵器	盃	10.2	4.2			灰色	緻密	良好
19-17	第2号竪穴	須恵器	広口短頸壺	15.0	7.8	15.8	6.0	青灰色	砂含む	良い
22-18	第3号竪穴	須恵器	坏蓋					暗灰褐色	緻密	不良
22-19	第3号竪穴	須恵器	坏蓋					青灰色	緻密	良好
22-20	第3号竪穴	奈良朝須恵器	坏蓋					灰色	緻密	良好
22-21	第3号竪穴	須恵器	坏身	11.8	4.9		5.0	灰白色	緻密	良好
22-22	第3号竪穴	須恵器	壺	8.8				灰色	緻密	良好
22-23	第3号竪穴	須恵器	醜					青灰色	緻密	良好
22-24	第3号竪穴	須恵器	甕					青灰色	緻密	良好
22-25	第3号竪穴	平安朝瓷器	碗				6.8	淡灰色	緻密	良好
22-26	第3号竪穴	土師器	甕A					橙色	細礫含む	良い
22-27	第3号竪穴	土師器	甕B	16.0		14.8		暗橙色	砂含む	良い
22-28	第3号竪穴	土師器	甕C	14.2		16.8		茶褐色	砂含む	良い
22-29	第3号竪穴	土師器	高坏					淡橙色	緻密	良い
22-30	第3号竪穴	土師器	甕	23.6			10.4	淡橙色	緻密	良い
22-31	第3号竪穴	須恵器	坏蓋					青灰色	緻密	良好
22-32	第3号竪穴	須恵器	坏身	8.4	3.1	10.0	3.5	濃青灰色	緻密	良好
22-33	第3号竪穴	須恵器	坏身	7.8	2.8	9.6	3.7	濃青灰色	緻密	良好
22-34	第3号竪穴	須恵器	坏身			10.4	4.0	暗青灰色	緻密	良い

図番号	遺構	種別	器種	口径	器高	最大径	底径	色調	胎土	焼成
22-35	第3号竪穴	須恵器	壺身	8.8		10.8		淡肌色	砂含む	良い
22-36	第3号竪穴	須恵器	高壺	15.6	12.3		10.4	灰色	砂含む・緻密	良好
22-37	第3号竪穴	須恵器	高壺				10.4	淡青灰色	砂含む	良好
22-38	第3号竪穴	須恵器	高壺					灰白色	砂含む	良好
22-39	第3号竪穴	須恵器	平瓶	6.0				青灰色	緻密	良好
22-40	第3号竪穴	須恵器	甕					淡青灰色	緻密	良好
25-41	第4号竪穴	縄文式土器	深鉢					赤褐色	金雲母含む	良い
25-42	第4号竪穴	縄文式土器	深鉢					暗褐色	金雲母含む	良い
25-43	第4号竪穴	土師器	甕A	17.0				淡明茶	金雲母含む	良い
25-44	第4号竪穴	土師器	甕B	19.6				淡橙色	金雲母含む	良好
25-45	第4号竪穴	土師器	甕	21.0				淡橙色	細礫含む	良好
25-46	第4号竪穴	土師器	甕					淡茶色	細礫含む	良好
25-47	第4号竪穴	土師器	製塩土器	(太さ2.6~2.7)				赤褐色	砂含む	良い
25-48	第4号竪穴	土師器	土錘					淡橙色	緻密	良好
25-49	第4号竪穴	須恵器	壺蓋	13.6				青灰色	緻密	良好
25-50	第4号竪穴	須恵器	高壺A	13.6				淡青灰色	緻密	良好
25-51	第4号竪穴	須恵器	高壺B	15.0				淡明灰色	緻密	良好
25-52	第4号竪穴	須恵器	壺					青灰色	緻密	良好
25-53	第4号竪穴	須恵器	甕					淡青灰色	緻密	良好
25-54	第4号竪穴	須恵器	甕					淡灰色	緻密	良好
25-55	第4号竪穴	奈良朝須恵器	壺蓋					灰色	緻密	良好
25-56	第4号竪穴	奈良朝須恵器	壺身					淡灰色	緻密	良好
25-57	第4号竪穴	土師器	甕A	17.0				橙色	金雲母含む	良好
25-58	第4号竪穴	土師器	甕A					淡赤褐色	細礫・砂含む	良好
25-59	第4号竪穴	土師器	甕B	16.4				淡茶色	細礫含む	良好
25-60	第4号竪穴	土師器	甕B	16.0				淡明茶色	緻密	良好
25-61	第4号竪穴	土師器	甕C					淡橙色	金雲母含む	良好
25-62	第4号竪穴	土師器	甕D	19.6				淡橙色	砂含む	良好
25-63	第4号竪穴	土師器	高壺					淡明橙色	緻密	良好
25-64	第4号竪穴	須恵器	壺蓋	10.8				淡灰色	緻密	良好
25-65	第4号竪穴	須恵器	壺蓋					青灰色	緻密	良好
25-66	第4号竪穴	須恵器	壺蓋					暗灰色	緻密	良好
25-67	第4号竪穴	須恵器	壺身	10.8		13.0		淡灰色	緻密	良好
25-68	第4号竪穴	須恵器	高壺					淡明灰色	緻密	良好
25-69	2号溝	平安朝瓷器	碗				7.8	淡青灰色	緻密	良好
25-70	2号溝	行基焼	甕				13.8	淡灰色	緻密	良好

第4章 林遺跡A地点

第1節 位置

J R 東海道本線の豊橋駅西口から南西に延びる県道豊橋港線を 1.2 kmほど進むと往完町の交差点に至る。そこから、豊橋消防署西分署を通り南西に 0.6 kmほど進むと右手に林公園がある。この公園の道路を隔てた南西に林遺跡A地点（註1）は位置する。地籍は、愛知県豊橋市東脇一丁目 21番地の1に属する。林公園の周辺には、林貝塚をはじめ林遺跡B地点、C地点、D地点がある。1972（昭和47）年に完了した柳生川沿線土地区画整理事業以前は、愛知県豊橋市牟呂町字林に属していたので、その地名を借り、さらに字名の林で最初に発見されたことから林遺跡A地点と呼ばれるようになった。

遺跡周辺は標高約 5 mで昭和 20年頃まではうっそうと生い茂った竹藪で、まさに地名をよく表しているようである。その後、土地区画整理事業が完了してからは、住宅地に変貌している。



挿図第30 林遺跡A地点の位置
(▲1 B地点、▲2 C地点、▲3 D地点、▲4 林貝塚)

第2節 調査の経過

1969年（昭和44年）当時、中学生であった森田勝三氏は前年に東脇貝塚の発掘調査に刺激を受け、その後、牟呂校区内で丹念に表面採集を始めた。当地点で奈良時代の須恵器（蓋坏の蓋と身）や江戸時代の完形のかわらけを採集した。地籍が牟呂町字林であり、この地点で最初に見つかったので、林A遺跡と呼ぶようにし、『志香須賀第1号』に掲載している。

1979年（昭和54年）5月に林遺跡A地点（註2）と確認されている東脇一丁目21番地の1の地点が削平されていた。土地の所有者である山本勇氏に確認したところ畑地の造成をすることであった。土器片も見つかっていることから豊橋市教育委員会に連絡した。市の教育委員会から土地所有者の山本勇氏に連絡をとったところ、工事を一時ストップしてもよいとの承諾をえたのでさっそく発掘調査体制を組織することになった。ちょうど牟呂史を作成しようという気運が盛り上がり、牟呂町誌編纂委員会が設立されていたので、その委員会の古代部が担当して発掘調査をすることになった。

通報から5日間がたち、書類が整い土地所有者の了解も得られたので、牟呂町誌編纂委員会の住吉政浩（日本考古学协会会员）が担当し、発掘調査員として小畠頼孝が当たり、愛知大学考古学研究会の会員（園井正隆、石元晃一、小林雅博、茅野泰正、今井茂夫、山尾秀則、岡本昌子、後藤功、坂田美代子、小田雅子、大羽康祥、小梢隆、谷本幸彦、松本竹代、神谷公子、中平寛、広川和江、内川和江、内藤浩二、森川常厚、野口真美江、増田弘美、野田明美、杉山弘道、三須信二、間嶋淑恵、松井真理子、中岡博文、坂本英幸）の協力を得て調査を開始した。

調査区域東側に南北方向に長さ15m、幅1.5mのトレンチを設定し、Aトレンチとした。さらに、貝の分布する地点2箇所に縦横3mのグリッドを設定し、それぞれAグリッド、Bグリッドとした。発掘調査面積は40.5m²で、発掘調査は5月23日（水）から5月28日（月）の6日間行なった。参加者は延べ60名を数えた。

5月23日（水）天気 晴れ

発掘調査現場は、ブルドーザーによって表土は地均しがされており、あちこちに土器片が散乱していた。まず、表面採集によって土器片の比較的多く見られた調査地の東側で南北に走る道路にはほぼ平行に長さ15m、幅1.5mのトレンチを設定し、南から長さ5mごとにAトレンチー1、Aトレンチー2、Aトレンチー3と区画して発掘調査にかかった。このトレンチの西側24mの地点に縦×横が3mのグリッドを設定し、Aグリッドとした。

ブルドーザーで地均しされたため、土は固く締まっていた。作業初日ということもあり、参加者の打合せを丁寧に行って発掘作業に着手した。同時に調査範囲の表面採集を行った。採集品は、内耳鍋の破片が多く、奈良朝須恵器片、平安朝瓷器片、陶器片や磁器片なども見られた。

5月24日（木）天気 晴れ

昨日設定したAグリッドの西側の比較的貝の多く見られる区域に、3m×3mのグリッドを設定し、これをBグリッドとした。そして、地層の確認と遺構の存在の有無を調べるためにグリッドの東側に幅30cmのサブトレンチを設け、調査を始めた。本日は、愛知大学考古学研究会の新入部員が初めて発掘調査に参加した。そのため、参加者が25名と増加した。各トレンチやグリッドでは学習会も含めて

作業が進められた。

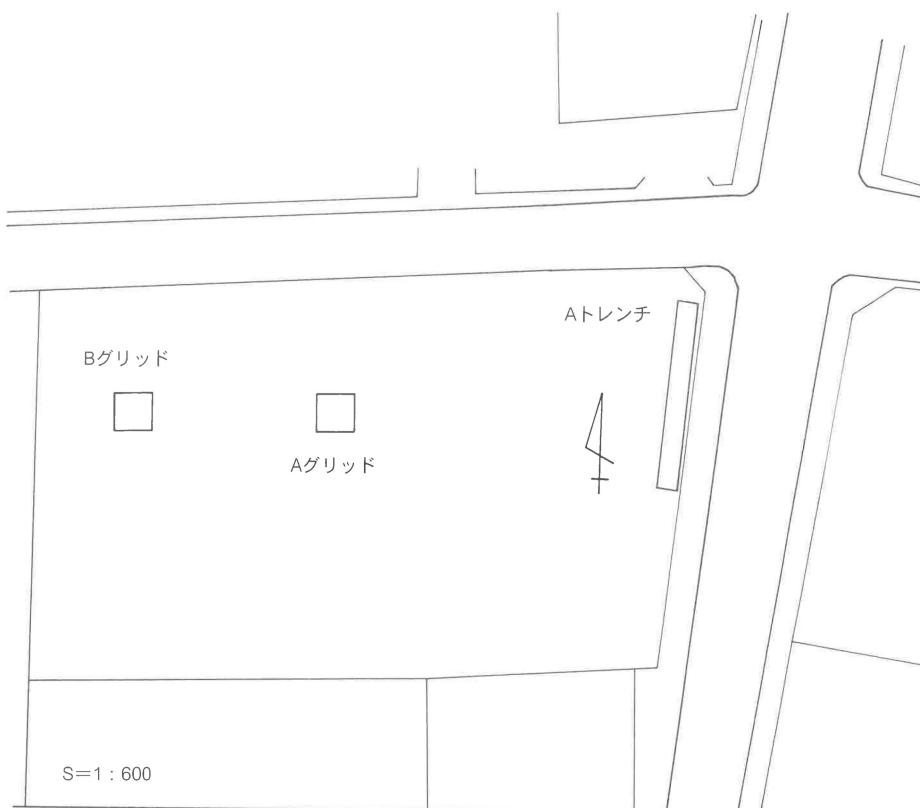
Aトレンチー1では竪穴住居址が確認された。Aトレンチー2では土壙が、Aトレンチー3では2条の溝が確認された。Aグリッドでは1条の溝と1個の柱穴それに埋土から寛永通宝が検出された。Bグリッドでは2条の溝が確認された。出土遺物は奈良朝須恵器片、平安朝瓷器片、行基焼の破片、内耳鍋、かわらけなどである。

5月25日（金）天気 晴れ

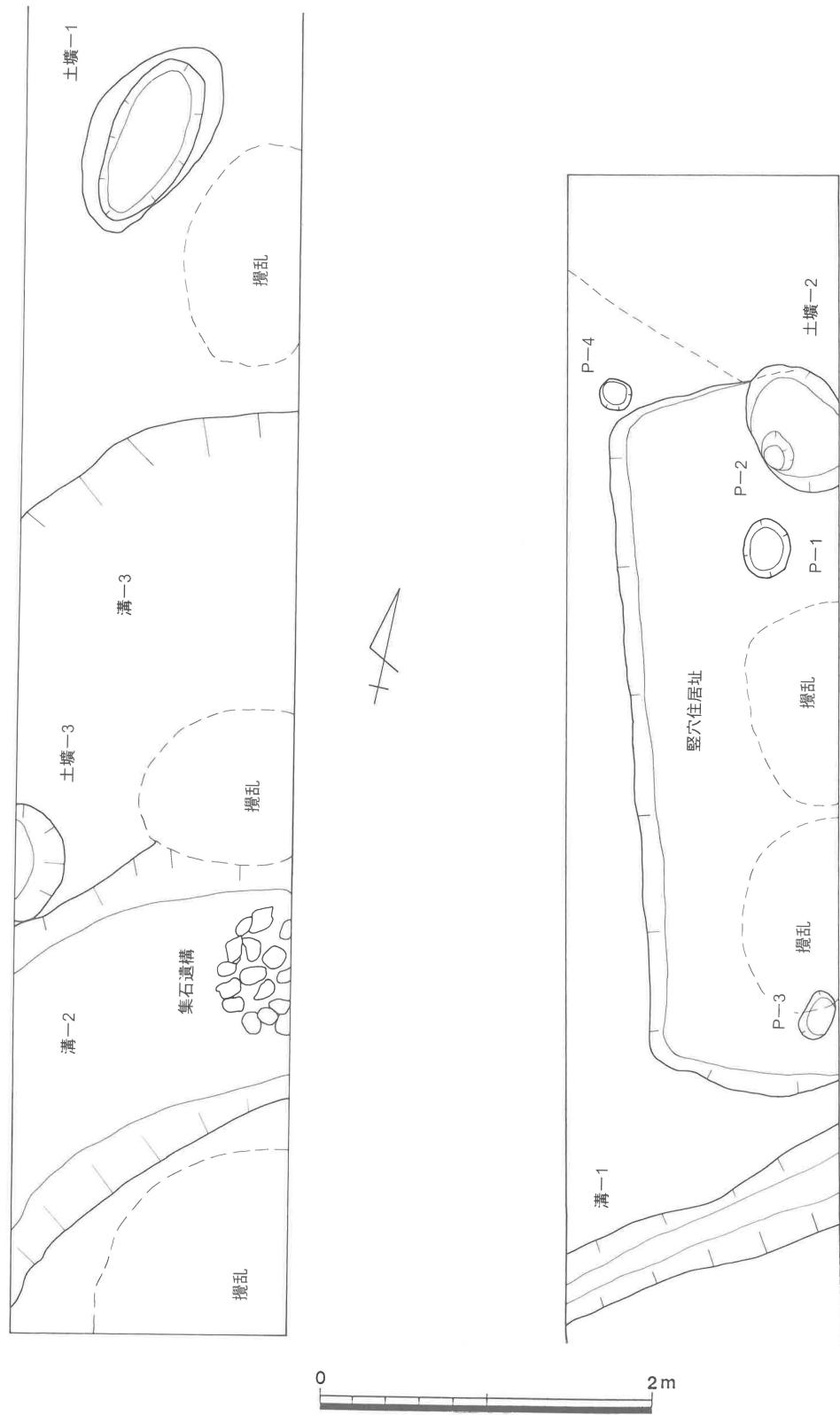
発掘作業と並行してトレントやグリッドの位置や遺構の平面図などの作成を行った。

Aトレンチー1の竪穴住居址の床面から奈良朝須恵器片が検出された。土壙もほぼ完掘したので写真撮影をするとともに平面図の作成にかかった。Aトレンチー2は竪穴住居址の続きと土壙が確認された。Aトレンチー3からは、溝が2条、柱穴が2個確認された。幅の狭い溝の底面では十数個の円礫が固まっていた。周辺には内耳鍋やかわらけの破片が検出された。幅の広い溝の埋土からも内耳鍋の破片が検出された。

Aグリッドの層序は破碎貝を含む砂質土層と小礫を含む粘性の強い黒褐色土層からなっている。1条の溝とその南側で1個の柱穴が確認された。Bグリッドでは、2条の溝と1個の土壙と3個の柱穴が確認された。楕円形をした土壙では、中央部に幅10cmの間壁を十字に設定して調査を進めた。間壁の断面に炭や灰が認められた。土壙の西側の地山の一部が赤く焼けていた。断面に見られた炭や灰と関係があるものと思われる。土壙を取り囲むように7個の円礫が見つかった。土壙の埋土からは須恵器や内耳鍋の破片が検出された。東側の柱穴の埋土からも須恵器片や内耳鍋片が出土した。グリッド



挿図第31 林遺跡A地点 トレントおよびグリッドの配置図



挿図第32 林遺跡A地点 Aトレーニチの平面図

の南東隅に貝殻を混入する溝を認めた。埋土中から内耳鍋片が出土した。

5月26日（土）天気 晴れ

各トレンチやグリッドの精査をするとともに各遺構の平面図や断面図の作成にかかった。Bグリッドの土壌の周りで柱穴を2個検出した。まだ、発掘の終わっていない南側を地山面まで掘り進めた。

5月27日（日）天気 晴れ

各トレンチやグリッド、遺構などの間壁を外すとともに実測図の補正ならびに床面の精査をした。写真撮影し、実測図を完成したAグリッドは埋め戻しを行った。出土遺物の確認をして、本日の作業を終えた。

5月28日（月）天気 晴れ

Bグリッドの平面図を作成する。同じく、グリッドの東側と南側の断面図を作成する。写真撮影をしたあと、再度図面等の確認をした。全員で各トレンチやグリッドの埋め戻しをして発掘調査をすべて終了した。

第3節 遺構および遺物の出土状態

林遺跡A地点を発掘調査してからすでに20年の余が経過した。その間、発掘調査に参加していた愛知大学考古学研究会では、林遺跡A地点のまとめをし、翌年の大学祭にビーフ等にまとめ発表している。しかしながら、その後、すべての実測図の所在が分からなくなってしまった。今回、報告書を作成できる機会を得た。小畠頼孝氏の協力を得て心当たりを、また、芳賀陽氏には埋蔵文化財収蔵庫を、石川明弘氏には愛知大学考古学研究室を隈無く探してもらったが、残念ながら見つけることができなかった。担当者として責任を感じるが、手元に残された発掘日誌、実測図のコピー、担当者のメモ、現像された写真と出土した遺物をもとに記述した。そのため、計測値の記載できない遺構が存在する。記載してあるのは、発掘調査日誌や残された実測図のコピーから割り出したものである。発掘した土器については、すべて保管されていた。

そこで、遺構については、AトレンチとAグリッド、Bグリッドの順番に記載をする。

発掘調査地点の基本層序は、機械により地均しがされていたが、表土層、小礫や破碎貝を含む砂質土層、粘性の強い粘土質土層である。地山は小礫を含む粘土質である。地山面は、東西、南北がほぼ水平である。

1. Aトレンチ

堅穴住居址が1軒と溝が3条、土壙が2基、柱穴が4箇所検出された。

(1) 堅穴住居址

Aトレンチー1からAトレンチー2の範囲に位置する。住居址の東側は区画整理された歩道にあたる。そのため、現存する堅穴住居址は西壁部分と南壁・北壁の一部である。西壁の長さは上端で390cm、下端で370cmを測る。現存する南壁は上端で114cm、下端で102cm、北壁は上端で140cm、下端で130cmを測る。

柱穴は4個見つかった（第8表）。この堅穴住居址の柱穴は、柱穴の位置や配置関係、大きさや深

さからP-2とP-3であろう。

柱穴と柱穴の中心間の距離は290cmを測る。

竪穴住居址の床面からは、奈良朝須恵器片が検出された。住居址の壁面から縄文式土器が検出された。出土した土器の位置や状態から竪穴住居址にともなうものではないと考えられる。竪穴住居址を覆っている埋土中から平安朝瓷器

片ならびに行基焼片、内耳鍋片などが出土している。床面からは奈良朝須恵器の長頸壺や壺が出土している。

(2) 溝

3条の溝が検出された。Aトレントー2の中央部から1条、Aトレントー3から2条である。

ア. 溝-1

南西から北東にはしる溝である。溝の幅は、トレントー南西端の上端では38cm、下端10cmを測る。トレントーの北東端の上端で54cm、下端で20cmである。埋土中からは、内耳鍋やかわらけが検出された。

イ. 溝-2

南西から北東にはしる幅の広い溝である。トレントー西側では、上端で166cm、下端で116cmとなっている。トレントー東側では、上端で166cm、下端で114cmである。この溝の東側には差し渡し10~16cmほどの円礫が17個ほど固まって出土した。集石遺構としておくが用途は不明である。この溝は、土壙3の上端部を削りとり、集石遺構や攪乱部分によって、削りとられている。溝の下面からは半球形の内耳鍋や擂鉢の破片が出土している。

ウ. 溝-3

溝-1・2と同じく南西から北東にはしる幅の広い溝である。トレントー西側の上端で244cm、東側は攪乱箇所によって削られているため正確さを欠くが、180~265cmの範囲である。土壙-3を削りとっていることから溝-3の方が新しいものと考えられる。この溝の埋土から内耳鍋が出土している。

(3) 土壙

3基の土壙が確認された。土壙-1は長楕円形をしたものである。土壙の法量は右表のごとくである。土壙を覆う地層からブロック状に完存した貝を含んでいたので、その一部を資料として取り出して調べた結果が別表にあたる（第10表 貝の種類と数）。

第8表 林遺跡A地点 柱穴の法量

(cm)

図番号	長径	短径	床面よりの深さ(cm)	備考(柱穴内の出土遺物)
P-1	46	28	-18	奈良朝須恵器片の細片出土
P-2	24	18	?	奈良朝須恵器片の細片出土
P-3	30	16	-15	奈良朝須恵器片の細片出土
P-4	20	20	-12	内耳鍋の細片出土

第9表 林遺跡A地点 土壙の法量

(cm)

土壙番号	長径		短径		備考(出土遺物)
	上端	下端	上端	下端	
土壙-1	124 95		66 40		かわらけ 縄文式土器鉢
土壙-2	75 66		64 48		平安朝瓷器碗 行基焼碗・片口鉢
土壙-3	74 50		30+ α 10+ α		内耳鍋 かわらけ

第10表 林遺跡A地点 土壙－1の貝の種類と数

貝の種名	貝の種類	内 容 内 訳
斧足綱	ハマグリ	左殻13(6.2cm、5.3cm、4.3cm、3.8cm×2、3.2cm、3.0cm×3、2.9cm、2.8cm×2、2.7cm) 右殻13(6.2cm、5.0cm、4.0cm、3.9cm、3.5cm、3.3cm、3.1cm、2.9cm×3、2.8cm、2.3cm 測定不能1)
	ヤマトシジミ	左殻1(2.5cm) 右殻1(2.5cm)
	シオフキ	右殻1(3.5cm)
	アサリ	左殻1(3.2cm) 右殻1(3.5cm)
	サルボウ	右殻3(4.0cm、3.5cm、3.0cm)
	マガキ	右殻1(7.2cm)
腹足綱	アカニシ	5.4cm×1
	ツメタガイ	5.8cm×1

ア. 土壙－1

土壙内の埋土中からは、小片ながらかわらけが出土している。土壙内の底から縄文式土器の鉢の底部や胴部の破片が、ほぼ1個体ほど検出された。かわらけは小片であり、出土した位置がはっきりしていないことからこの土壙との関連は薄い。この土壙は、土器片から縄文晚期前半に比定されよう。

イ. 土壙－2

土壙－2は、東側の一部がトレンチの範囲外である。現存する形は楕円形である。埋土中からは、平安朝瓷器第3型式の碗の底部片や行基焼第1型式の碗や片口鉢の底部片が出土している。

ウ. 土壙－3

土壙3は、西側の半分以上がトレンチの範囲外である。埋土中からは内耳鍋やかわらけが出土していることから近世のものと考えられる。

トレンチ内では、近代になってからの攪乱箇所が6箇所もあった。トレンチの北端では1.5m以上の範囲にわたり掘り凹みが見られた。トレンチの南端でも1.1m以上の範囲に掘り凹みの跡が見られた。他の4箇所も直径120cm以上の楕円形をしたもので、いずれも埋土中からガラスビンや缶詰の缶の腐蝕したものが出土していることから現代の攪乱によるものと考えられる。

2. Aグリッド

Aグリッドは、3m×3mの大きさのものである。この範囲の調査区からは溝が1条と柱穴が1箇所で確認された。

(1) 溝－4

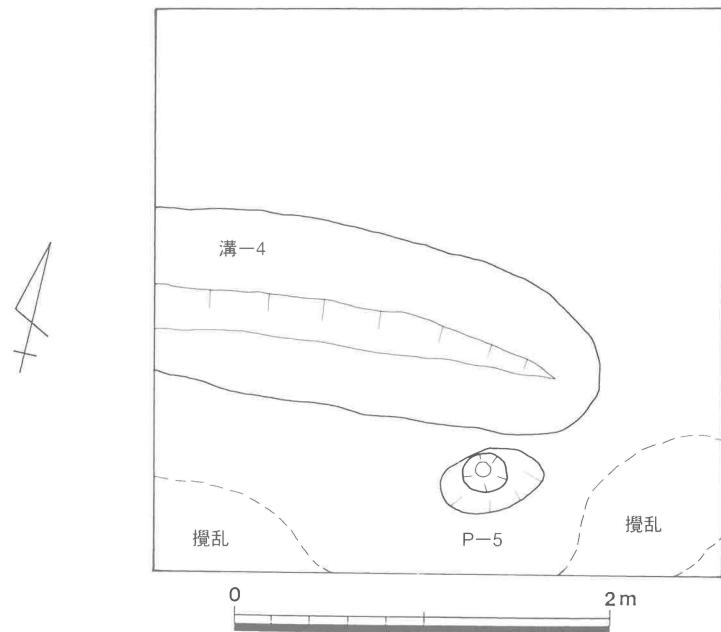
1条の溝がグリッドの中央東側から掘り込みが始まり、西へ続いている。溝の東端から50cm西よりで上端で80cm、下端で10cmを測る。グリッドの西側では上端で90cm、下端で25cmを測る。現存する溝

の長さは240cmである。溝内の埋土中からくの字状口縁内耳鍋やかわらけが出土している。

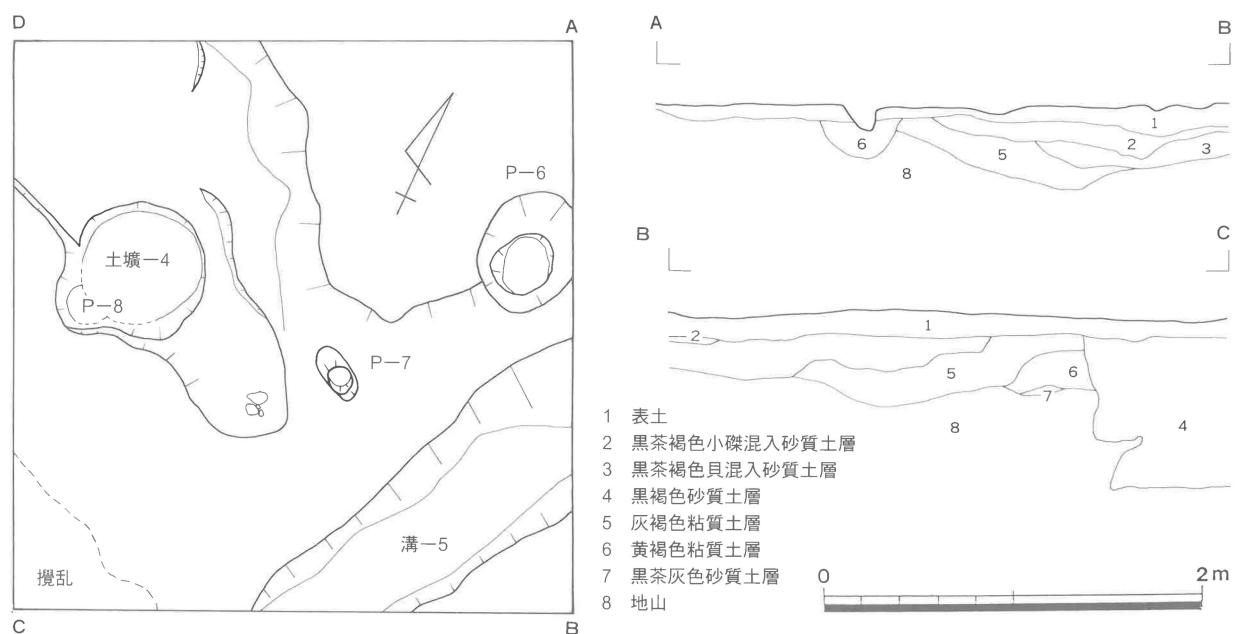
(2) 柱穴 (P-4)

溝の東端の南に位置する。穴は中間で窄まり、長軸×短軸は上端で64cm×34cmで、中間部のところで24cm×21cmとなり、下端で8cm×6cmとなる。遺物は出土していないので時期は不詳である。

攪乱部は2箇所ある。グリッドの東隅と西隅で、大部分がグリッドの範囲外である。現存する長さは80cmと90cmである。



挿図第33 林遺跡A地点 Aグリッド平面図



挿図第34 林遺跡A地点 Bグリッド平面図・断面図

3. Bグリッド

Bグリッドは、3m×3mの大きさである。この範囲の調査区からは溝が1条と土壙が1基、柱穴が3箇所確認された。

(1) 溝-5

幅60cm、深さ25cmである。どのような形状をなすか、試掘の段階では不明である。溝の下面には炭化物が含まれておらず有機土もないで排水としての機能はなかったものと考えられる。埋土は破碎した貝を含んでおり、内耳鍋の破片が出土している。グリッド南西隅は攪乱されている。

(2) 土壙-4

長軸83cm、短軸77cm、深さ32cmを測る。土壙内の西側部には固く焼き締まった焼土面と炭化物を含む埋土が確認された。屋外の炉址と考えることができる。埋土の上層から奈良朝須恵器片や内耳鍋片、下面から内耳鍋片が出土した。なお、焼土面の南側に土壙を囲む形で西から南へ差し渡しが10cm大の円礫が7個並んで確認された。土壙と関連があるかどうかは分からなかった。

(3) 柱穴(P-6・7・8)

柱穴は3箇所で確認された。

ア. 柱穴-6

長軸58cm、短軸50cm、深さ39cmである。埋土中からは内耳鍋片や須恵器片が出土した。埋土中には破碎した若干の貝を含んでいた。下面からは内耳鍋の破片が検出されている。

イ. 柱穴-7

上面では長軸30cm、短軸14cm、中面では長軸15cm、短軸14cm、下面では長軸も短軸も10cmの二段掘りを呈した柱穴である。埋土中からは遺物が検出されていない。

ウ. 柱穴-8

柱穴の北側の一部が土壙によって削られているが、現存する長軸22cm、短軸15cmである。埋土中から遺物は出土していない。

第4節 遺 物

遺物を出土地点ごとに説明する。今回の調査では、AトレンチとAグリッド、Bグリッドの3箇所を遺構ごとに説明をすることにした。Aトレンチは、竪穴住居址(1~9)、土壙1(10~14)、土壙2(25, 27, 28, 34)、表土層(15~24, 26, 29, 30, 35~37, 40~44, 46, 48~51, 53~60)、黒色土層(31, 32)、礫層(33)、下層(45, 47, 52)、地山直上(38, 39)、Aグリッドは、土壙中層(61~64)、土壙床面(65)、Bグリッドは、土壙4南(66~70)、土壙4東(71~73)、溝(74~80)、溝貝層(81~88)、柱穴(89~93)、地山直上(94~97)、表土層(98~104)である。

1. Aトレンチ出土遺物

(1) 竪穴住居址(挿図第35の1~9)

1は奈良朝須恵器の長頸壺である。円筒形で直立ぎみの頸部は口辺部に接する部分で外反する。口端は斜め下方に折れ曲がり、口唇部は面をなす。頸部と肩部の接合は、いわゆる二段継ぎである。胴部以下は欠損しているが、残存する肩部片から倒卵形に近いものとなろう。胎土、焼成は良好で、外面の色調は暗青灰色を呈する。

2～5は奈良朝須恵器の蓋坏の蓋である。2は口径16.0cm、4は口径12.0cmである。口縁部を下方へ折り曲げたのち外反させてくの字状を呈し、口端をていねいにまるめている。蓋の内側は明瞭な稜をつけて折り曲げてある。3は口径13.4cm、5は口径20.0cmである。ともに、口端を垂直に下方へ折り曲げてある。胎土焼成はいずれも良好で、色調は淡青灰色ないし青灰白色を呈する。

6は、奈良朝須恵器の蓋坏の坏である。口径15.6cmで、薄手の器壁で口縁部はやや外反し、腰部のあたりが屈折ぎみにつくられている。高台の有無は不明である。胎土、焼成は良好、色調は青灰白色を呈する。

7は、高坏の脚部の破片である。外面は下方に広がる形態をしているが裾部を欠損しているので定かでない。透かしの有無は不明である。胎土、焼成は良好、色調は青灰白色を呈する。

8は縄文式土器の壺か甕の脚台である。現存する高さ3.0cm、底径6.0cmである。外反する脚部が脚端ですばまっている。胎土には1mm大の砂粒を多く含む。焼成は良好で色調は暗茶褐色を呈する。

9は、小片のため器種は定かでないが横瓶の胴部と思われる。外面には平行叩き痕が内面には当て具痕が認められる。胎土は密で焼成は良好、色調は青灰色を呈する。

(2) 土壙－1（挿図第35の10～14）

10は平安朝瓷器の碗の底部である。高台の直径は7.0cmで、断面は逆三角形を呈する。底部には糸切り痕が認められる。口辺下方に破風状の浸け釉が施される。内面には筋状の油脂痕が幾重にも認められ、二次的に灯明皿の代わりに使用したものと思われる。胎土、焼成は良好、色調は淡青灰色を呈する。

11・12は行基焼の碗の底部である。11は高台径7.6cmを測る。高台の断面形は逆三角形で外方へ開き先端をまるめている。底部には糸切り痕が認められる。12は高台径7.2cmを測る。高台の断面は先端のつぶれた逆三角形で、やや外反している。胎土、焼成はいずれも良好で、色調は淡青灰色を呈する。

13は、行基焼の片口鉢の底部である。腰部に回転ヘラ削り調整がなされている。高台の高さは2.0cmを測り、やや外反し先端を丸く仕上げている。高台径は11.6cmを測る。胎土には1mm大の砂粒の混入が見られ、焼成は良好で、色調は淡青灰色である。

14は、行基焼の小皿の底部である。高台の断面形は丈の低い逆三角形をなし、先端をまるめている。高台径は5.2cmを測る。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で色調は淡青灰色である。

(3) 土壙－2（挿図第35の25，27，28，34）

25は、土師器のかわらけである。口径9.0cmで、内彎した口縁部を有する手つくねの土器である。胎土は密で焼成は良好である。色調は淡赤褐色を呈する。

27・34は縄文式土器の深鉢で、同一個体と思われる。底部外面には木の葉痕がある。器体外面には、右上がりの条痕が見られる。胎土に直径1～2mmの砂粒を多く含んでいる。焼成は良好で、色調は淡

赤褐色を呈する。

28は、土師器で甕の口頸部と考えられる。胎土焼成ともに良好で、色調は暗灰褐色を呈する。

(4) 表土層（挿図第35の15～24, 26, 29, 30, 35～37, 40～43 挿図第36の44, 46, 48～51, 53～60）

35, 36は須恵器である。35は、高坏と考えられる。坏部と脚部の接合部のみである。36は、奈良朝須恵器の蓋坏の蓋である。口径13.5cmを測る。口端で下方に垂直に折れ曲げられている。いずれも胎土は密で、焼成は良好であり、色調は淡青灰色を呈する。

21, 29, 30は平安朝瓷器である。21と29は、碗の底部である。21は、高台径6.4cm、高台の高さは0.9cmで、高台は断面三日月形に仕上げてある。29は、高台径7.0cm、高台の高さ0.6cmの逆断面三角形をした底部である。30は長頸壺である。朝顔形に開いた口縁部の口端を押し広げ、幅広い口唇部に2条の沈線を巡らせている。器体外面には薄い黄緑色の釉薬がかけられている。胎土、焼成はいずれも良好、色調は灰白色を呈する。

15～17と19は、くの字状口縁の内耳鍋である。15は、口縁部先端を外方に折り曲げ、内側を摘み出し、幅広い口唇部にしてある。折り返しの先端には、沈線が巡っている。器体外面には煤の付着が見られる。16は15と同じ技法を用いているが、折り返した部分を肥厚させ、明確な稜をつけたあと沈線を巡らせている。17は口縁部が肥厚しており、口端が丸く仕上げてある。19は口縁部先端を上方に立ち上げ、幅0.8cmの口唇部を有する。器体外面は刷毛目による調整がなされている。いずれも胎土、焼成は良好で、色調は淡赤褐色を呈する。

18, 20, 37, 40～44, 46は、半球形内耳鍋である。20は、口縁部の先端を笠で押させて仕上げた幅1.0cmの口唇部を有する。37は、口縁部がゆるやかに内彎するとともに肥厚させているが口端部を極端に内外に摘み出しているため断面がT字状を呈する。内耳を有するものは18, 20と37である。器体外面に煤の付着が認められたのは、18, 20, 37, 40～44である。いずれも胎土、焼成は良好で、色調は淡赤褐色を呈する。

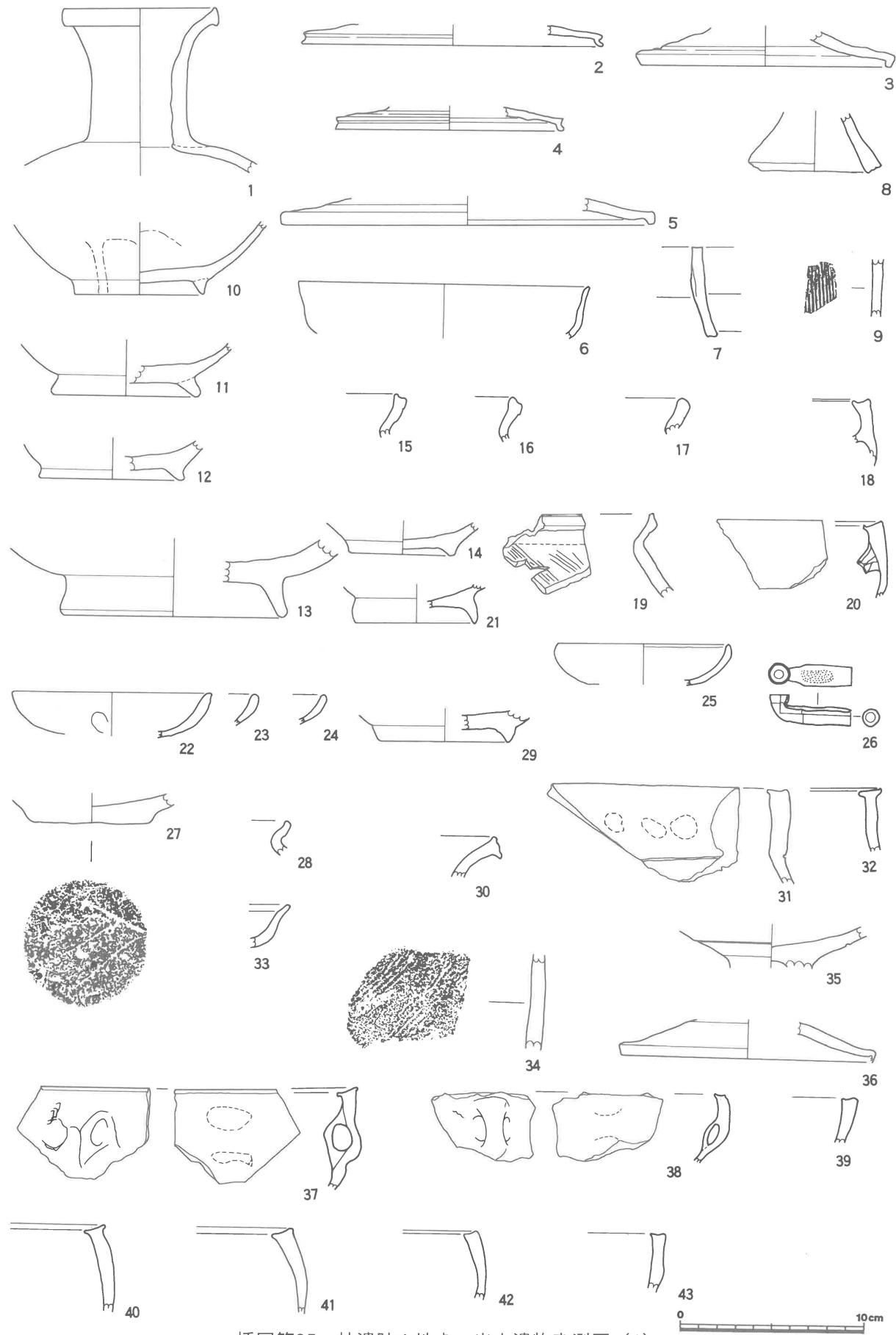
22～24, 48, 49, 60は、土師器のかわらけである。22は口径が10.6cmで、器体外面には指圧痕がある。23, 24も同じ技法で作られたものである。48, 49, 60は、ゆるやかに内彎した口縁部をしている。器体外面の粗雑な作りに対して内面はていねいな作りである。いずれも手づくねである。胎土は密で焼成は良好、色調は淡赤褐色を呈する。

50, 51, 53～58は、近世陶器である。

50, 51は、擂鉢である。器体外面に鉄釉が施されている。50は、器体内面に10条1組の条痕が粗く刻まれている。擂鉢の底周辺の条痕は、磨耗し器体の地の部分が露出しており、使用の度合いがしのばれる。51は、底部に糸切り痕を残し、腰部外面に回転ヘラ削り調整が施される。内外面に鉄釉が施される。器体内面に11条1組の条痕が粗く刻まれている。50と同じように擂鉢の底の部分は磨耗して地肌が露出している。

53は、鎧茶碗と呼ばれているもので、器体外面の腰部に鎧の緘ようの列点を4段に巡らせている。高台脇はヘラ削りがなされ、高台は、削り出しにより断面台形に仕上げている。器体内面には鉄釉がかけられ、外面は灰釉がかけられている。

54は、徳利か花瓶と思われる。器体外面の肩部に鉄釉で蕨手状の絵を描き、そのうえに灰釉をか



插図第35 林遺跡A地点 出土遺物実測図（1）

けてある。さらに、器体全面に貫乳が見られる。器壁は、0.4 cmと薄く仕上げてある。

55は、器体全面に鉄釉のかかった甕の口縁部である。

56は行平で、口径は、15 cmである。口縁部は、受け口状をしており、器壁は、0.4 cmと薄く仕上げてある。器体内外面全体に黄色の釉薬がかけられ、細かな貫乳も見られる。

57は五徳である。器壁は0.8 cm～1.2 cmと比較的厚い。口縁部または底部には幅0.5 cmで深さ0.3 cmの太い一条の沈線が巡らせてある。火鉢か七輪の上におき、鉄瓶などをかけた輪形の器具である。

58は、いわゆる尾呂茶碗である。内外面とも飴色の鉄釉の上から鶴ノ斑を散らし、口縁部に灰釉を施している。

59は、砥石である。現存する長さは6.0 cm、幅は3.0 cm、厚さは2.0 cmである。片面は使用痕が見られる。石質は粘板岩である。

26は、煙管の火口（火皿）である。銅製品で火口の長さは4.4 cm、火口の直径は1.0 cmである。

(5) 黒色土層（挿図第35の31, 32）

31は、ほぼ垂直に立ち上がる肥厚した口縁部をもつ内耳鍋である。口端部は水平に仕上げている。口縁部から胴部の境に1条の沈線を巡らせ、内面には明確な稜が見られる。32は、半球形内耳鍋である。垂直に立ち上がった口縁部の器壁は0.7 cmと薄く仕上げているが、口端を内外に押し広げ、断面がT字状をなす。いずれも胎土は密で焼成は良好、色調は赤褐色を呈し、器体外面には煤の付着が見られる。

(6) 磔層（挿図第35の33）

33は、丁寧な作りをした土師器のかわらけである。口径は11.0 cmである。口縁部は外反し薄くなるが口端は丸く仕上げている。器体内面には、口端部に稜を有する。胎土は密で、焼成は良好、色調は赤褐色を呈する。

このほかに、細片のため図示できないが天目茶碗の胴部の破片がある。器壁の厚さは0.6 cmで、黒茶褐色の天目釉が器体外面に施されている。

(7) 下層（挿図第36の45, 47, 52）

45, 47は、半球形の内耳鍋である。いずれも口縁部の作りが同じである。47は器体外面に煤の付着が認められる。胎土は密で焼成は良好、色調は赤褐色を呈する。

52は、陶器の擂鉢である。小片であるが、10条または11条1組の条痕が粗く刻まれている。内外面に鉄釉が施される。

(8) 地山直上（挿図第35の38, 39）

38, 39は、半球形の内耳鍋である。38は、器体内面に内耳を持つが、作りとしてはやや粗雑である。いずれも器体外面に煤の付着が見られる。胎土は密で焼成は良好、色調は赤褐色を呈する。

2. Aグリッド出土遺物

(1) Aグリッド溝-4の中層（挿図第36の61～64）

62は、須恵器の破片であるが小片のため器種は不明である。一部に回転ヘラ削り調整が見られる。胎土は良好焼成もよく、色調は青灰色である。

61は、平安朝瓷器の碗か皿の底部である。高台の断面は、低い三日月形である。胎土、焼成は良好で、色調は淡青灰色を呈する。

63, 64は、くの字口縁内耳鍋である。63は、器体外面に右下がりの刷毛目痕が見られる。内面には横ナデ調整が施される。胎土も焼成も良好で、色調は淡灰褐色を呈する。64は、口縁部を肥厚させ、口唇部内側を摘み出し、肥厚させた下部に沈線を巡らせ、肩部と胴部を区画するものである。器体外面には、煤の付着が見られる。胎土、焼成はともに良好で色調は淡灰褐色である。

(2) Aグリッド溝-4の床面（挿図第36の65）

65は、くの字状口縁の内耳鍋である。器体外面には、煤の付着が見られ、内面には肩部と胴部の境に明確な陵を有し、横ナデ調整がなされている。胎土、焼成は良好で、色調は淡灰褐色を呈する。

3. Bグリッド出土遺物

(1) Bグリット土壙-4の南側（挿図第36の66～70）

66は、須恵器の甕の口頸部である。小片であるため、詳しいことは不明だが、胎土も焼成も良好である。青白色を呈する。

67は、須恵器片であるが、小片であるため器種がはっきりしない。器体表面は、磨耗が激しい。胎土も焼成も良好であり、色調は淡青灰色を呈する。

69は、奈良朝須恵器長頸壺の頸部片と思われるが、高坏もしくは高盤の脚部となる可能性もある。器体外面には、上下に2条の細い沈線が巡らされている。胎土も焼成も良好であり、色調は淡青灰色である。

70は、須恵器の壺の胴部片と思われるが、小片のため明らかでない。外面に釉が見られる。

68は、土師器であるが、小片であるため器種は不明である。胎土や焼成は良好であり、色調は淡赤褐色である。

(2) Bグリッド土壙-4の東側（挿図第36の71, 72, 73）

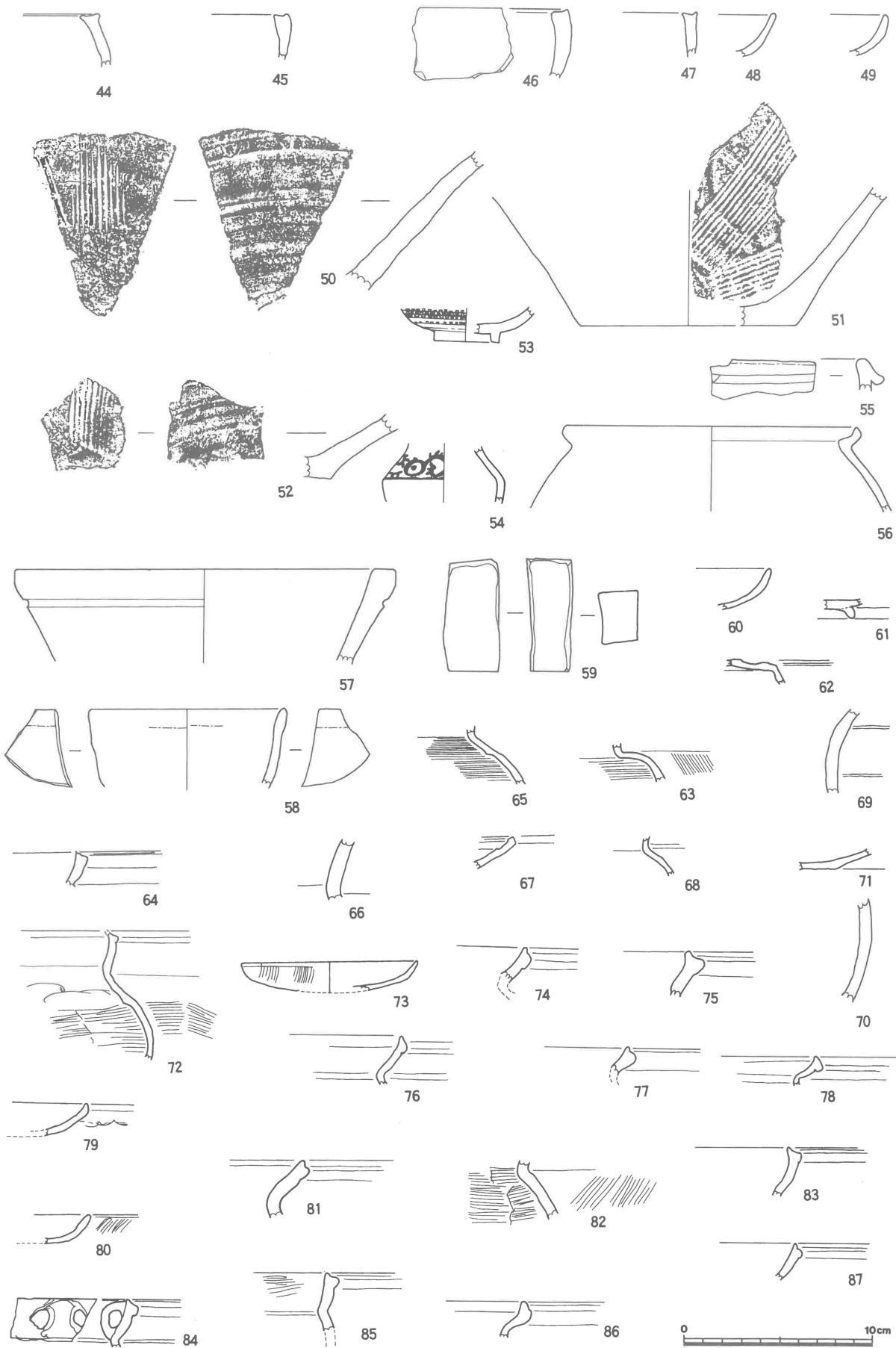
72は、くの字状口縁内耳鍋である。口縁部を肥厚させ、口唇部の内側を水平に摘み出し、頸部と肩部との境目に1条の沈線を巡らしている。器体外面には刷毛による横位または右下がりの整形痕が、内面には横位の刷毛による整形痕が認められる。胎土は良好で焼成はやや軟弱であるが、色調は淡黄褐色である。

73は、口径9.0cm、器高1.6cmのかわらけである。底部は剥落している。胎土は良好、焼成はやや軟、色調は淡黄白色である。71は、かわらけの底部と思われるが、小片のため器種は不明である。底部外面にはヘラ削り調整が施される。胎土も焼成も良好で、色調は赤褐色である。

(3) Bグリッド溝-5（挿図第36の74～80）

74から78まではくの字状口縁内耳鍋である。肥厚した口縁部の内側をつまみ出し、幅広の口唇部としている。器体外面の肥厚した下部にヘラ削り調整がなされ、1条の沈線が巡らされている。74, 77, 78は、器体外面に煤の付着が見られる。いずれも胎土も焼成も良好である。色調はいずれも淡赤褐色を呈する。

79と80はかわらけである。いずれも小片であるため口径は測定できないが、80は深さが1.4cm



挿図第36 林遺跡A地点 出土遺物実測図 (2)

である。ともに胎土は良好、焼成も良好である。色調は79が淡灰褐色で、80が淡赤褐色である。

(4) Bグリッド溝-5の貝層（挿図第36図81～87, 挿図第37の88）

81から87まではいずれもくの字状口縁内耳鍋である。85はくの字の屈折角が極めて鈍角になっているのに対して、83と86は口縁部内面が受口状になってくの字の屈折角度が鋭角になっている。81と83～87はいずれも口縁部の破片である。口縁部内側をつまみ出し幅広の口唇部を有するものである。ヘラ状器具による押圧で口唇部が凹みを有する。84は、口縁部内側に丁寧なつくりの内耳を持つ。82は、口頸部から肩部にかけての破片である。器体内外面に刷毛目調整痕が認められる。器体外面に煤の付着が見られる81, 82, 84～86がある。いずれも胎土、焼成とともに良好で、色調は淡赤褐色を呈する。

88は、かわらけの口縁部である。胎土も焼成も良好で、色調は赤褐色を呈する。

(5) Bグリッド柱穴-2（挿図第37図の89～93）

89は奈良朝須恵器の蓋坏の蓋である。極めて小片であるが、口端部を下方へ折り曲げたのち、くの字状に外反させている。胎土は緻密で焼成も良好である。色調は暗青灰色である。

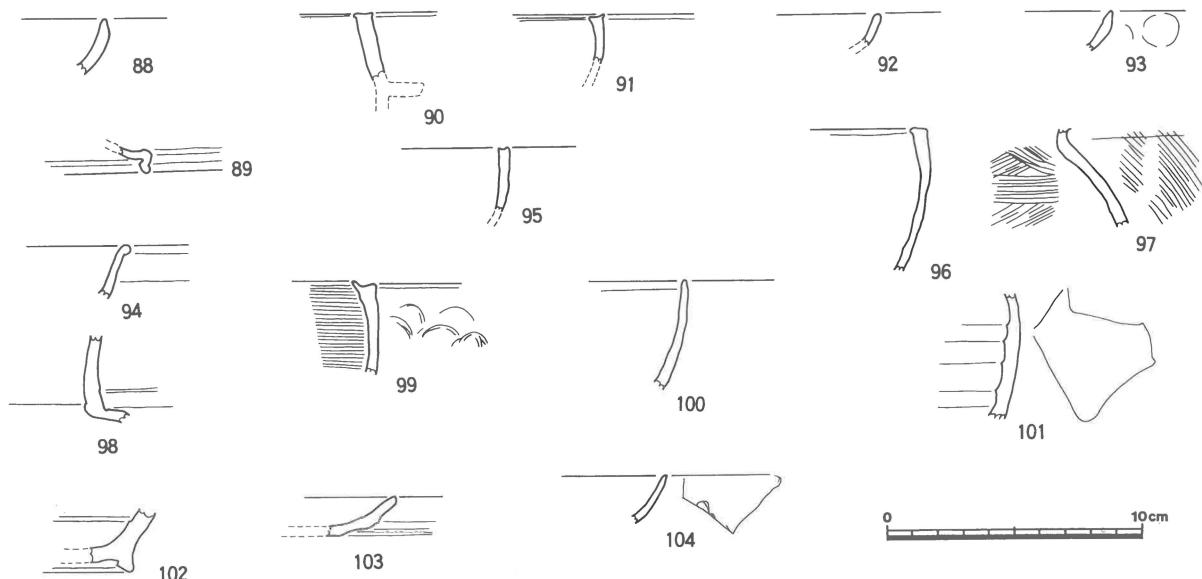
90は羽釜の口縁部と思われる。口辺部の器壁の厚さはほぼ一定で、直線的に内傾している。胎土も焼成も良好で、色調は淡赤褐色を呈する。

91は、半球形内耳鍋である。きわめて小片であるが、口唇部は凹面をなし、断面はT字状を呈する。胎土、焼成とともに良好で、色調は淡赤褐色を呈する。

92、93は、いずれもかわらけである。92は器壁の厚さが一定している。93は、器体外面に指痕が残されている。ともに、胎土も焼成も良好であり、色調は淡赤褐色を呈する。

(6) Bグリッド西側地山直上（挿図第37図の94～97）

94は、平安朝瓷器の碗である。口縁部を外反させ、口端は肥厚して丸みをもつ。胎土、焼成ともに良好である。色調は淡青灰色を呈する。



挿図第37 林遺跡A地点 出土遺物実測図 (3)

95, 96は半球形内耳鍋である。95は、口縁部から胴部にかけて半球形を呈するが、口縁端を左右に押し広げる技法が見られず、煤の付着も見られない。口縁上面はわずかに凹みが見られる。96は、口縁部から胴部にかけ次第に薄く半球形を呈している。器体外面には指痕があり、煤の付着も見られる。いずれも胎土、焼成は良好で、色調は赤褐色である。

97は、くの字状口縁内耳鍋である。器体外面には右下がりの、器体内面には右上がりまたは横位の刷毛目調整痕が見られる。器体外面には煤の付着が見られる。胎土、焼成はともに良好で色調は淡赤褐色である。

(7) Bグリッド表土層（挿図第37図の98～104）

98は、須恵器の長頸壺である。頸部から肩部にかけての破片である。器体外面には、うっすらと釉がかかっている。胎土も焼成も良好である。色調は青灰色である。

102は、平安朝瓷器の長頸壺の底部である。高台から胴部にかけて灰釉の垂れが認められる。胎土も焼成も良好で、色調は淡青灰色を呈する。

99は、半球形内耳鍋である。口端を内側に強くつまみ上げ、口縁の上面は著しく凹んでいる。器体外面には、指痕が数多く見られる。器体内面は、横位の刷毛目による調整痕が認められる。胎土も焼成も良好で、色調は赤褐色を呈する。

100は、陶器の深碗である。器体内外全面に柿色の釉薬がかかり、細かな貫乳も見られる。

101は、陶器の徳利の胴部の破片と考えられる。器体外面は乳白色の釉薬がかけられている。器体内面にロクロ目が残る。

103は、陶器の皿である。口径は不明だが、器高は1.5cmである。器体内外面には灰釉がかかり、貫乳が認められる。

104は、陶器の小皿と考えられる。器体外面に淡青色をした円形の文様を描いているが、小片のため図柄は明らかにできない。

第5節 小 結

今回の調査で検出した遺構のうち遺物をともなうものは、竪穴住居址、土壙-1、土壙-2、土壙-4、溝-5、柱穴-2であった。

このうち竪穴住居址からは、奈良朝須恵器の蓋坏・長頸壺などが出土しており、年代はおよそ8世紀後半（註3）におかれると考えられる。

土壙-1から出土した平安朝瓷器は高台の形状から平安朝瓷器第3型式（註4）に比定され、また行基焼は山茶碗の特徴から第1型式でも古い時期（註5）に比定されることから、11世紀末から12世紀初頭に位置付けられよう。

土壙-2からは、縄文時代晚期前半（註6）と考えられる縄文式土器の深鉢が、底部を中心としてほぼ1個体分まとめて出土している。内耳鍋の小片が1片のみ出土しているが、出土層位が不明であり、何らかの理由により後世の遺物が混入したものと思われる。したがって本土壙のつくられた時期は縄文時代晚期前半におかれよう。

土壙-4からは須恵器片も出土しているが、いずれも小片である。土壙の東側から出たくの字状内

耳鍋およびかわらけ片がこの遺構の時期を示すものといえよう。時期はほぼ15～16世紀ころと考えられる。

溝－5から出土した遺物は、土師器の内耳鍋とかわらけである。内耳鍋はくの字状口縁がすべてを占め半球形内耳鍋を含まないことから、この溝の時期は土壌－4と同じく15～16世紀ころと考えられる。

柱穴－2から出た遺物のうち、奈良朝須恵器は極めて小片であった。半球形内耳鍋やかわらけから江戸時代以降の遺構と考えられる。

このほか遺構は伴わないが、近世の陶器が多数出土している。

土壌－2の上を覆う土層には貝殻がブロック状に含まれていた。種の構成をみると総数35個のうち24個がハマグリであり、実に68%を占めており、オキシジミやシジミのように淡水と海水の入り混じった水域に生息する貝が15%を占めている。貝の中にアサリを含まずハマグリが大半を占めていることから三河湾の新田開発以前に採取された貝であることが予想される。柳生川と梅田川の河口部で最初に行われた新田開発は1622年の船戸新田である。少なくとも、それ以前の旧橋良湾は柳生川の淡水と三河湾の海水が入り混じったハマグリの生育に極めて適した環境であったことが推察され、きれいな海であったことは間違いないだろう。

このような遺構と遺物の構成からみて林遺跡A地点は、縄文時代晩期前半から人々が生活の居を構え、奈良時代～平安時代～鎌倉時代～戦国時代と絶えることなく人々が生活した、居住に適した土地であったといえよう。

註1 『志香須賀第一号』『牟呂史』では、林A遺跡としてあったが、今回、命名者の了解を得て林遺跡A地点とした。

同じように林B遺跡は林遺跡B地点、林C遺跡は林遺跡C地点、林D遺跡は林遺跡D地点とする。

註2 同 上

註3 久永春男「尾張・三河地方における古墳時代以後の須恵器」『乗鞍第一号窯址』白菊古文化研究所 1969

森田勝三「高師山古窯址群における須恵器の様式変遷」『渥美半島の須恵器窯』東海古文化研究所 1982

註4 伊藤惠「豊橋市南部瓷器古窯群の分布と製品について」『豊橋南部における平安朝瓷器古窯址群』東海古文化研究所 1979

註5 久永春男・芳賀陽「渥美半島古窯址群出土、行基焼の編年」『豊橋市大岩町北山古墳群・豊橋市植田町大膳古窯址群』豊橋市教育委員会 1968

註6 小畠頼孝氏のご教示による。